

チート過ぎる主人公が
幻想入り

九流トキオ

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

初めまして、別の作品から見てる方はありがとうございます。
さて、私が一番初めにpixivにて書いた小説、チート過ぎる主人公が幻想入りを、
こちらでも出してみました。

既に第一部は完結しているので、まとめて観れます。

初めに作つた故に文や口調がボロボロですが、まあ、気にすんな☆
さて、初の作品をどうぞご覧下さい。

あ、因みに後書き、前書きは最低限の部分しか出しません。

目次

第一部 第1章・幻想入り	人里の行く道で
始まり	V S ルーミア
妖怪と少女と	鈴仙・優曇華院・イナバの覚悟
覚悟と友達	79
覚悟の力	
覚悟の力と初戦闘	
第一部 第2章・永遠亭編	
永遠亭1	妖怪の賢者と人里の守り人
永遠亭2	人里での聞き込み
永遠亭3	リーダーと裕也
永遠亭4	人里異変最後の戦い
第一部 第最終章・龍脈異変	
龍神復活	
調査と運命	
運命と裕也	
暴走靈夢と裕也	
第一部 第3章・人里異変	

53	45	36	29	24	19	10	4	1	72	61
342	316	276	256	205	158	133	94			

決戦

ありがとう・前編

ありがとう・後編

515 425 380

第一部 第1章・幻想入り

始まり

「う、うん？ここは何処だ。」

俺は深い竹林の中で目が覚めた。

「確か俺は、自分の部屋でパソコンを、して？」

おかしい、この竹林に目が覚る前の記憶がない。

「どういう事だ。」

俺はゆっくり思い出してみた。俺の名前は、桐上裕也（きりじょうゆうや）普通の高校生だ。たしか、学校に帰つて、パソコンで東方ゲームをして・・・あ、れ、どういう事だ？ここから先が思い出せない。たしか、女人の人？が何かを言つて、・・・駄目だやっぱり思い出せない。どうしてだ？

「えーい、考えても仕方が無い、あれ、このパターンは、幻想入りをしたパターンに似ている。まさか、本当に幻想入り？このおれが？・・・ま、まさか、そんなこと。」

そんな事を考えていると突然声が聞こえてきて、何かがでて来た。それは、よく、幻

想入りで見かけたりする妖怪に似ていた。

「くくくくく」

なんて言つてるかわからない。ただ、なにかを言つてゐる事がわかつた。何故なら、叫んでいるから。

「うわ、凄い本物か、なんて言つてゐる場合じやない！もしここが幻想郷ならば、襲つて来る前に逃げないと、喰われる。」

ここで叫んだのがいけなかつた。冷静に考えて見れば相手はまだ気がついてないんだ、このまま静かに去つてしまえばよかつたんだ。その証拠に妖怪は物凄い勢いで追つて来る。

「うわー、やつぱりこっちに來た」

俺は、そう言つて逃げようとしたら。

「待つてくれ、話しかけてくれ。」

俺は、その声に驚いて止まつた。

「だ、誰だ」

「待つてくれ話を聞いてくれ頼む。」

俺は驚いた。何故なら背後を走つてゐた妖怪が言つたのだから。俺はそんな馬鹿な、と思つた。だつてさつきは妖怪の叫び声しか聴こえなかつたのに、突然声が聞こえてき

て、それが今追われている妖怪から聞こえたのだから。

「お前がはなしたのか？」

「そうです。話を聞いて下さい」

「妖怪はしゃべるのか？」

俺はいつでも逃げられる方法を考えながら話した。



「ふふ、面白い人間が入つてきたものね。」

「如何なさいますか？」

「まあ、今の所は様子見つて所かしらね。」

「しかし、最近は増えてきましたね。」

「そうね。何かの異変の前触れかしらね。」

「幻想郷、忘れ去られたものたちの楽園。」

「でも、最近は忘れ去られていない物も入つてきてる。」

「だから、前触れ、ですか？」

「そうよ、あの人間がどんな事をするかも気になるしね。」

「珍しいですね、あなた様が気になるなんて。」

「どうかしら？ふふ、そうかもね。さあ、楽しませて頂戴？人間よ。」

妖怪と少女と

「俺になんのようだ。」

「話を聞いてくれるんですか！」

「聞くだけだからな。」

「はい！ありがとうございます。」

「あのですね。子供が怪我をして居るんですよ。」

「怪我？」

「ええ、こっちです。」

「あ、ちよつと待てよ！」

「そう言つて俺はついて行つた。

「そうだお前の名前は何だ？俺は桐上裕也つてんだ、よろしくな！」

「私の名前は紅楼夢と言います。」

「ああ、よろしくな！」

「数分後」

「うえ〜ん痛いよー！」

「もう大丈夫だよ。薬師を連れて来たから。」

「?!如何して！」

「薬の匂いがしたからです。」

「そ、そ、うか。」

「そんな事より速く見て下さい。」

「あ、ああ、わかつた。」

「お兄ちゃんだれ？」

「俺は桐上裕也。この・・・妖怪の友達だ。もう大丈夫だから傷口見せてくれないかな?」

「うん、わかつた。はい。」

「これは！おい！紅楼夢！」

「は、はい！な、なんですか！」

「今から言う薬草を取つて来てくれ！」

「え？」

「いいから早く取つてこい！」

「は、はいー！」

「これは酷い、右腕が骨折してる、その傷からばい菌が入つて炎症を起こして居る。ねえ、この傷は如何したの？」

「妖怪から逃げている時に木にぶつけて。」

「妖怪つて、今居たやつ?」

「ううん、違う、別の妖怪。」

「そつかく、でも怖くないのか。」

「え?」

「だつて、お前をこんなにした妖怪だぞ?」

「だつて、あの妖怪さん、私を襲つて来た妖怪とは何か違うもの。」

「ふーん、そつか。それは良かつた。」

「なんで?」

「ん、俺の友達を怖がらなくて、ありがとう。」

「お兄ちゃんは怖くないの?」

「そうだなー? だつてあいつ初対面の俺に頭を下げたんだぞ、女の子を助けてくれりつて可笑しいだろ、ようかいなのに、頼んだんだぜ?」

「うん! 確かに可笑しい!」

「だろ?」

でもなんであいつは人間の言葉を喋つたんだ?
所変わつて、何処かの竹林。

「～～～」

「なんて言つて居るかわかりませんよ？」

少女が札のような物を取り出すると。その妖怪に向かつて投げた。すると、ぐしゃり、つと頭が潰れた。

「さて、帰りますかね。」

少女は、帰ろうとしたら。

「うえ〜ん痛いよー！」

「ん、何でしようかね？ 気になります言つて見ましょう。」

戻つて。

「遅いな？ 何してるんだ？」

「す、すいませ、げほ、げほ、お、遅く成りました」

「!? 如何した！ その傷！」

紅楼夢は傷だらけだった。腕は折れて居て、足も骨折してる。何より心配なのは、腹部の傷、ざつと見ただけだが、肋骨が2〜3本折れてる。

「げほ、げほ、こ、これでい、いいですか？」

「ああ、間違いない。」

「そ、それは良かつた。」

「待つてろ！こいつを手当したらそつちに行く」

「は、はい、げほげほ。」

ヤバイ早く手当しないと。

「これでよし！どうだ！」

「う、うん、もう痛くないよ。」

「よし！次だ！今ある薬草で足りるか？」

「い、いや、逃げて下さい。」

「なにいつている！紅楼夢を俺の友達をおいて行けるわけないだろ！」

「ゆ、裕也さん。」

「お嬢ちゃん一人で帰れるか？」

「う、うん。」

「ここは危ないようだから早く行きな。」

「で、でも。」

「五月蠅い！早くいけ！死んでも知らないぞ！」

「わ、わかつた。人里にきてね！絶対だよ！」

「ああ、わかつた。」

少女はここから帰つて行つた。

「・・・よし！一先ずこれでいい！しゃべれるか？」
「は、はい、何とか。」

「よし！如何してこうなつたのか話してくれ！」

覚悟と友達

「如何してこうなつた。」

俺は紅樓夢に聞いた。

「それは。」

話は数分ぐらい前に戻る

「よし！これで全部ね！急いで帰らなきや。」

そう言い紅樓夢は小走りでもどつて行つた。
しばらく行くと人の声が聞こえてきた。

「確かこっちから。」

その少女を見た紅樓夢は木々に隠れ、小声で言つた。

(・・・どうして。如何して、あいつが、東風谷早苗。あいつがいるのは、妖怪の山にある守矢神社にいるはず！なんでこんな所に。)

妖怪退治を主にしている巫女である。元々この幻想郷は博麗の巫女がいたがあとから来た守矢の巫女が一時、博麗の巫女に敵対し、沢山の妖怪を狩つて言つたから妖怪から恐れられている。ちなみに、博麗の巫女より余程達が悪い。博麗の巫女も妖怪を退治

するが、それは、人間に迷惑をかけた妖怪だけだからだ。それに比べ、守矢は、信仰を集めの為に片つ端から狩っている、らしい。噂だから詳しく述べる無いがそうらしい。（だから見つかっちゃマズイ。早く渡さなきや行けない！早く行つて）

早苗が、紅樓夢の近くで止まつた。

「うーん。何かいる気がするんですが？気のせいでしょうか？」

(!!)

紅樓夢は驚いて叫びそうになつたが、何とか持ちこらえられた。

（あ、危なかつた。もう少しで叫ぶ所だつた。はあ、はあ、早く行つて、お願ひ！）

「・・・・・きつと、気のせいですね。さあ、声があつた所に行きましょうか」

(・・・・・行つた？)

一人の気配が離れて言つた。

「ふう、行つたか。さて、早くいか無いと。」

「ああ、やっぱりここに居ましたか。」

「え、な、何で！」

そこに居たのは、東風谷早苗であつた。

「な！何で！如何して！お前は言つたはず！なのに！何で！」

それに早苗は。

「はあ、騒がないで下さいよ。何言つているかわかりませんよ？」

そう、普通の人は妖怪の声なんて聞こえない。何故、裕也には分かつたか。皆さんはわかりますよね。能力です。

さて、それでは、説明も終わつたから、戻ります。

＼早苗視点／

「～*€#＝×——☆！」

「だからなんて言つているかわかりません。おや？逃げるんですか？いいですよ。私は少しむしやくしゃして居た所ですから、少し、遊んで下さいよ。」

＼紅樓夢視点／

「や、ヤバイ！早く逃げないと！」

「だからなんていつて、以下略」

回想終わり。

「と、言う、ことがあります。」

「逃げている時に早苗にやられたんだな。」

「はい、そうです。」

紅樓夢の話を聞いていると、いきなり声が聞こえてきた。

「そこの人！避けて下さいね！」

「え、な、なんだ！」

「危ない！」

「うわ！」

裕也は紅樓夢に突き飛ばされて数メートル飛んでから顔からおつた。

「いたた、いきなりなにするんだ！」

その時、裕也が居た所がいきなり光の玉が飛んで来て、爆発した。

「こ、紅樓夢ーー！」

裕也は紅樓夢に近づくと。

「こ、来ないで下さい！貴方も巻き込まれる！」

「だ、だが！」

その時、女の声が聞こえた。

「やつぱり貴方は人間に害を及ぼす妖怪でしたか。私の読みどうり！」

「そ、そうゆう訳ですから、貴方も巻き込まれる！だから早く逃げて下さい！」

「お前を、ここで出来た友達を置いて行けるか！お前も逃げるぞ！」

「有難うござります・・・でも、私は行けません。」

「何で！」

「あの人気が、貴方も妖怪の仲間だと思われます。」

「それでもいい!! もう誰かを失うなんてやなんだ！だから！お前も、一緒に！」
「そこの人ー！はーなーれーてーくーだーさーいーねー！」

そう言つて、早苗は弾幕を打つて來た。

「あ、あいつ！ 正気か！ 普通の人間がいるのに、普通打つか!?」
「危ない！ 私の後ろに來て！」

紅樓夢がそう言つて來た。

「わ、分かつた！」

そう言つて裕也は、紅樓夢の後ろに行つた。

俺は馬鹿な真似をしたと、痛感した。だつて、後ろに避けたら。

「つあ！ ぐが！ ぐう！ ごほ！」

そう、こうなる。

「俺は馬鹿か！ 何で！ 後ろにいっちまつたんだ！ くそ！ おい！ 紅樓夢！ 大丈夫か！」

「げほ、ごほ、だ、だい、じょうぶ、です、げほ。」

「そんな訳あるか！ 腕がなくなつているじゃないか！」

「がは、はあ、はあ、はあ、き、きいて、くれますか？」

「そんなのはあとで聞く！今は早く！」

「い、いえ、き、きいて、くだ、さい。」

「くそ！分かつた！だが聞いたら一緒に逃げるぞ！」

「は、は、い。」

そして紅樓夢は話し始めた。

俺は隠れられる場所にいき、話を聞いた。

「私は一人でいました。私は、人間と妖怪のハーフなんです。だから、家族は殺されて、一人妖怪の中で生きていました。」

「それって！」

「そうです。妖怪の中で生きていくには、この言葉が必要だつたんです。」

「だ、だが、俺はお前の声が聞こえるぞ。」

「ふふ、きっと貴方は能力もちなんですよ。」

「そ、そんな事は。」

「いいえ、きっと貴方の能力は”色々な声を聞ける程度の能力”じゃないのかしら。」

「そ、そんなはず」

「無いって？だったら、裕也は如何して私の声が聞こえるの？」

「そ、それは！」

「こらー！何処にいるんですか！早く出て来なさい！」

早苗の声が聞こえてきた。

「！、もう時間がありません！これを。」

「これは？」

紅樓夢から渡されたのは、一枚の白い紙の様な物だつた。

「スペルカードです。私が母上から貰つた物です。」

「そんな大事な物受け取れない。」

「いいえ、貴方だから受け取つてもらいたいのです。仲間と言つてくれた貴方に。」

「でも。」

「大丈夫です。私が戦つてくるのでそのうちに逃げて下さい。それでは。」

「おい！紅樓夢、紅樓夢ー！」

紅樓夢は外に出て、早苗と戦つた。

そして。

「やつと現れましたか、妖怪。さて、それでは、死んで下さい。」

「私はそう簡単にやられません。」

「だから！なにいつているのかわからないつて言つてるでしようが！」

裕也視点。

「くそ！くそ！くそ！なんだよ！逃げるしかないのか！紅樓夢が、俺の友達が戦つているのに！逃げてるしかないのかよー！」

その時、何処からか声が聞こえて来た。

「貴方は、彼女をたすけたいの？」

「だ、誰だ！はあ、はあ、はあ、姿を表せ！」

「私はここにいる。」

「え、も、もしかして、そこの竹か！」

「そうです。それで貴方はあの子を救いたいのですか？」

「す、救いたいに決まっているだろ！俺の友達だぞ！」

「・・・それに嘘、偽りは、ない？」

そう言つてくる竹に。

「当たり前だ！」

「わかつた。私の下の土をほつてみて。」

「？、あ、ああ、わかつた。」

俺は、言われたどおりの場所を掘つたら、箱が出て來た。

「これは？」

「その中には、スペルカードが三枚、それから、弾幕を打てるようになるブレスレットが

はいつてゐるわ。役立てて。ちなみに、見た所貴方能力もちね。しかも、結構強力なやつ。」

「如何してそれを。」

「長生きしてるとなんと無くわかるの。さあ、それを受け取つて早く行つて？早くいか無いと、手遅れになるよ？」

「わ、わかつた、有難う。」

「ああ、それから、ブレスレットの使い方だけど、貴方の思いた弾幕が打てるはずだよ、それじゃあ、頑張つてね？お兄さん。」

「有難う！」

そうして俺は、来た道をもどつて行つた。

「・・・貴方の他にもわたしの声が聞こえた人が、いましたよ。銀姫さん。」

そう言つて、一本の竹はしおれて行つた。

覚悟の力

（紅樓夢視点）

「に、逃げてくれましたか、げほ。こ、これで大丈夫なはず。」

「いや、逃げてくれましたか、さて、人に危害を加えた妖怪は……退治しませんとね

！」

「く！」

そう言つて、早苗が打つて來た、弾幕を紅樓夢は避けた。

「あ、危なかつた。でも、如何しましようか。・・・あまり使いたくありませんが。」

そう言つて紅樓夢は自分の血を指に付けて、早苗に向かつて打つよう、指に付いた血を投げたすると。

「うわ！な、何ですか！血が弾幕のようになつて！あ！し、しまつた！ぐう！」

早苗はいきなりでよける事を忘れてしまつていて、放たれた血の弾幕をもろに食らつてしまつた。

「ぐ！がは！こ、これしき」

「まだまだ！てりや！」

紅楼夢は近くにあつた竹を取つて早苗に投げた。

「な・く・げは・」

またも突然の事で避けるのを忘れた早苗は、もろにくらつた。
「ぐう！やつ、やつぱり、妖怪は化け物ですね、げほ。あんなひどい怪我をしていて、あれだけできるんですから。」

「あ、あれで、ま、まだ倒れない！巫女は皆化け物なんですか！」
すると。

「红楼夢ーー！」

「ゆ、裕也さん!? 何でここに！」

「今です！」

「あ！し、しまつた！」

奇跡 「グレイソーマージ夢幻！」

スペルカードを出して、早苗がそう言うと大量の半透明の弾幕が红楼夢向かつて発射された。

「危ない！」

「え？ うわ！」

裕也が、何が？ と言う前に抱きつかれて後ろに転んだ。

「な！お、お前！な、何を！」

裕也は少し恥ずかしがりながら、そう言つた瞬間に。

「がっは！ぐは！げは！ごほ！ぐ！だ、だい、じょう、ぶ、で、です、か、？」

「お、おい！紅樓夢！」

「ぶ、ぶじ、でし、た、か、？」

「すまない！俺がもどつたが為に！」

「い、いい、ん、で、す。わ、わたし、を、たすけ、よう、と、してく、れた、んで、す
よね？あ、有難う、ご、ざ、い、ま、す。」

「おい！紅樓夢！氣を失つただけか。後は俺が何とかしてやる。」

その時、紅樓夢に止めを刺す為に早苗が降りて來た。

「そこをどいて下さい。」

「嫌だ。」

「何ですって？」

「嫌だと言つたんだ！」

「貴方は馬鹿ですか？見た所貴方は人間だ、人間の貴方が何で妖怪を庇う。」

「それは！」

「それは？」

「友達だからだ！」

「はあく、友達く。貴方は本当に馬鹿ですか？妖怪と友達になれる訳ありません。」

「お前らがそう思い込んでるだけじゃないのか？」

「ほー、貴方は人間に危害を及ぼす妖怪に、何を期待しているんですか？」

「・・・天狗はどうだ、何だつたら鬼でもいい。」

「え？」

「人間と仲良くしている妖怪もいるはず。」

「ええ、そうですよ？だから、彼らには手を出してはいません。」

「だつたら、何で野良妖怪を殺すんだ。」

「はあく、やつぱり馬鹿ですね。人を襲うじやないですか。」

「お前こそ馬鹿か？」

「はあく？なにいつて

「はあく、東風谷早苗、お前こそ馬鹿だ。」

「な！わたしの何処が馬鹿だつて言うのですか！」

「本当にわかつてないのか？」

「だから！何がですか！」

「・・・妖怪は人を襲う物だ。」

「は？貴方は何言つて。」

「そして、人間は喰われまいと知恵をだし、妖怪を追い払う。追い払われた妖怪は考へる、如何したらいいか。そして、知恵を絞る、妖怪も人間も。」

「そんなの！堂々巡りじゃありませんか！」

「誰が決めた？」

「え？」

「だからそんな事になるつて、誰が決めた？博麗の巫女か？妖怪の賢者か？人間に溶け込んでいる半妖か？誰も堂々巡りになると行つていない！もし！そんな事を言つてい るやつがいたら、今行つた言葉をそのまま言つてやる。」

「そんなの屁理屈です！もういい！貴方との話しあはこれで終わりです！」

「ああ、わかつた。お前に命の重さを教えてやる！覚悟しろ！東風谷早苗！」

覚悟の力と初戦闘

「行くぞ！」

そう言つて、裕也は駆け出した。

「ふ！」

早苗は弾幕を出して裕也に向かつて打つた。

「くそ！」

そう言つて裕也は弾幕をよける為に、横に飛んだ。

「今だ！出ろ！弾幕ーー！」

ブレスレットをした手を早苗に向けた。すると、手から弾幕が展開して、早苗に向かつて放たれた。

「な！普通の人間が弾幕を打つた！いや、幻想入りした人ですね。幻想入りした人は、弾幕を使える者もいたそうですから、きっとそうです。」

一瞬驚いた早苗だつたが直ぐに冷静を取り戻した。

「今度はこっちから行くわよー！」

奇跡「神の風！」

早苗はスペルカードを出して、言つたすると、強い風が現れ裕也と周りを巻き上げ、下に叩きつけた。

「かは！ぐう！」

裕也は一瞬息が止まつたが、すぐもちらなをした。

「げほ、げほ、はあ、はあ、」

「おや？これで終わりですか？私に説教をしたのに、対した事ありませんね。」

「ぐぞ！まだだ！」

「はあ～、まだわからないのですか？貴方じやあ弱すぎて相手にならない。」

「勝手に決めるな、まだやれる。」

そう言つて裕也は弾幕を打つた。

「ふ！や！どう！」

早苗は弾幕を全部よけたその時。

「今だ！」

裕也は自分の真下に弾幕を打つた。すると、衝撃波を利用して、裕也は空を飛んだ。

「何ですつて！」

早苗もこれには驚いてよけるのを忘れた。その隙を裕也は見逃さなかつた。

早苗の頭を押さえて、落下する速度を利用して、地面に叩きつけた。勿論驚いてよけ

るのを忘れた早苗は顔から地面に叩きつけられた。

「ぐは！」

「まだまだ！」

裕也は、体制を崩した早苗に追い討ちをした。

「ぐ！」

大量の弾幕を食らった早苗は大ダメージを受けた。

「どうだ！」

「げほ、やりましたね！本気でいきます。」

「え？」

開海 「海が割れる日！」

何も無い所から海が出て来てその海に裕也は、飲み込まれた。

「ごぼ、がぶげごが。」

(このままだとヤバイ何とかしないと)

「がぼぐが？」

(でもどうする?)

「降参するなら許してもいいですよ?」

「ばべが、でぼでぶじだが」

(誰が、でもどうするか。)

「さあ、如何しますか。このままだと死にますよ？」

「ごぶだ！」

(そうだ！)

裕也は、ブレスレットをしている手を自分に向け弾幕を打つた。

「ぐぼ！」

裕也は、強い衝撃と共に海から出た。

「な！貴方は馬鹿ですか！死ぬつもりなんですか!?」

「げほ、げほ、俺は死なない、お前に命の大切さを教えて、生きる為に死なない！」

「如何して、貴方は妖怪の為にそこまで出来るのですか！」

「如何して、それは友達だからだ！友達を助けるのに、説明なんてない！そうだろ!?」

「それは人間です！人間だけの話です！」

「そんな事は無い！それだったら俺が証明してやる！妖怪とも人間とも、ありとあらゆる物と友達になつてやるよ！お前ともだ！だがまず、お前を倒す！」

「なら！私に見せて下さいよ！私を倒して、証明して下さい！」

「ああ、お前に見せてやる！」

その時。裕也のポケットが急に光つた。

「な、何だポツケが光っている?」

裕也はポケットの中を見たら、紅楼夢から貰ったスペルカードが光っていた。

「スペルカード! 何で貴方がもつてているの!」

「紅楼夢、手伝ってくれるんだな、よし! 行くぞ!」

「や、ヤバイ防御を。」

血符「針棘の山!」

裕也がそう言うと、大量の針や、棘が山のようになつて、早苗を襲つた。

「ぐが! ぎい! ぐう!」

「どうだ!」

「く、そ。」

早苗は倒れた。

「やつたか? つてヤバイ!」

裕也はそう言うと、早苗を治療した。

「ヤバイ、二人とも早く医者に見せないと! ん、ここは竹林と言う訳は永遠亭がある! そこに急ごう!」

第一部 第2章・永遠亭編

永遠亭1

「永遠亭」

「ん」、師匠からの仕事はこれで終わりね。」

居間の一角、テーブルで作業をして居た少女は不思議な格好をして居た。兎の耳を付けて現代風の学生服を来て居た。そんな彼女の名前は、鈴仙・優曇華・イナバ、ここ永遠亭で助手のような事をしている。

「さてと！これから如何しようかしら？」

そんな事を考へて居る優曇華に、玄関から大きな声が聞こえて來た。

「おい！誰かいないのか！急患だ！開けてくれ！頼む！」

「はいはい、分かりましたからそんなに声を荒げなくていいです、よ。」

優曇華は一瞬固まつた何故なら、ボロボロに成つた女三人を抱えて來たからだ。しかも、抱えられている一人は見覚えがあつた。何故なら。

「てゐ！如何したの！」

「はあ、はあ、それで、治療はしてくれるのか？」

「待つて。」

「何だ。」

「如何して、てゐが傷だらけなのか説明しなさい。」

「手短に話すぞ。この兎がここに来たければ私を捕まえろと、言つたからこいつに手伝つてもらつて、病人がいるのにくだらない事をするなど、教えただけだ。」

「つて事は、てゐに勝つたの！ 弾幕で！ てゆうか！ こいつつて木の棒じやないですか！」

「そうだ！ さあ！ 説明したぞ！ げほ、ごほ、早く治療をしてくれ。」

「分かりましたが、そこの妖怪はダメです。」

「何故！」

「私達は人間しか見ません。」

「な！ 差別だ！ 医者なら人間だろうが、ようかいだろうが、異質なものでも、怪我を見るのが医者だろ！」

「貴方は分かつてますか。」

「何がだ！」

「はあゝ。いいですか、確かに医者は助けるものです。しかし、二と覆うものは一頭も得ずと言う言葉があります。必ず患者全てが救える訳ではありません。そうした場合異質な物よりも人間がゆうせんされます。」

「違う！」

「何が違うんですか？」

「確かにお前の言つた事は正しい。」

「なら。」

「だが！ その程度の認識で医者を名乗るな！」

「な！」

「確かに人間は優先だ、しかし！ 本当に見る物は人間じゃない！ 誰が重症かだ！ 確かに妖怪はほつといても治る。けど！ 痛みはある！ その痛みをとつてやるのも医者の勤めだ！ それすらも分からぬ奴が医者を語るな！」

「で、ですが。」

「これだけ言つてもまだ見ないか。なら！ お前を倒して見て貰うまでだ！」

「私に弾幕勝負を挑むのですか。」

「ああ、ルールはスペルカードルールだ。お互に使えるスペルは一回。その一回で相手に膝をつかせたら勝ちだ。」

「・・・いいでしよう、受けて立ちます！」

「ここで休んで居てくれ、紅樓夢。」

「それじゃあ行きます！」

「ああ、こい！」

「すいませんがいきなり勝たせて貰います。」

優曇華がそう言うといきなり裕也の視界がぼやけ、頭痛がした。

「ぐう！な、何だ、頭が、ぐえ。」

「さあ、これで私の勝ちです。」

幻想 「近眼花火（マインドスター・マイン）」・

優曇華がそう言うと、赤く光る座薬が裕也に飛んで来て爆発した。

「ぐ、がー！が、あが！ぐう！まだ、だ！」

裕也は耐え切つた。

「な！貴方は人間ですか！脳を強く揺さぶられている中で、爆発と光それから匂い、一番
なのは、あれで貴方は意識を失っていなければおかしい！だつて貴方はボロボロだつ
た。だから！」

「それが・・・どうした。」

「え？」

「所詮貴様の覚悟なんてその程度だ。そんなんじや俺は倒せない。その程度のこうげき
で 倒れる訳には行かねえんだよ！小娘が！」

「ひつ！」

優曇華は怯えた。何故ならそいつは、私を殺すと、目が言つて居たからだ。

「がは！」「今度は、俺の、番だ！」

血符「針棘の山！」

「くらえ！」

スペルから大量の針と棘が山になつて優曇華を襲つた。

「ひつ！ 辞めて！ こないで――！」

幻爆「近眼花火（マインドスター・マイン）!!」・

さつきより、大量の座薬が展開され針と棘の山を爆破して行つた。
〔ブチ。〕

「辞めてー！ こないでー！ 殺さないでー！」

「この！ 馬鹿たれが！」

裕也は爆発と針と棘の山に突進して行つた。

「ぐー！ がはー！ 少し、頭を冷やせー！ この馬鹿がーー！ 弹幕！ 展、開！」

そして、優曇華の腹に向かつて打つた。

「がは！」

優曇華は吹つ飛ばされた。と、同時に弾幕が消えた。

「そ、それじやあ、通させて貰うからな。 . . . くそ！」

裕也は女四人を抱えて中に入つていった。

「あれだけ騒いだのに何も出てこない？ . . . おーい！誰かいないのかー！」
. . .

「くそ！」

裕也は永遠亭を調べた。調べている時、女人の声が聞こえて來た。

「人がいない時に色々してくれたわね、人間。」

「誰だ！ げほ！ があ！ はあ、はあ、く、そ、まだ居たか。こいつらに、げほ、危害を加えるなら容赦しないぞ。」

「お前は医者か？」

「ええ、貴方が抱えている兎たちの師匠よ。」

「なら！ こいつらを見てくれ。妖怪もいるんだがいいか？」

「・・・ 良いわよ。」

「・・・ 本当だな。」

「嘘はつかないわ。約束する。」

「・・・わかつた。それから、この兎、優曇華と言つたか。」

「そうよ。」

「あいつはもう少しどうにかした方が良い、ぞ。」

そこで裕也の意識が途切れた。

「・・・さつきから見て居たけど、凄いわね彼、早苗、優曇華、てゐ、この三人に勝つて尚且つあんな傷を追つて居ながら、他人の心配をする。これは、良い試験体を見つけたわ。」

永遠亭2

「ん、ここのは？」

裕也は見知らぬ部屋で目が覚めた。

「俺は、如何して。・・・・そ、そうだ！紅樓夢は！早苗は！ぐう！」

「まだ起きては駄目よ傷が開くわ。」

「お前は？」

「あら？お前何て酷いわね。折角助けてあげたのに。」

「どうか、有難う。所で、紅・・・あの妖怪は如何なつた？他の三人もだ。」

「まず、早苗はさつき気がついたわ。」

「そうか。」

「まあ、一日様子見と言う訳で永遠亭に泊まつてたけどね。」

「あの兎達は？」

「まあ、一日様子見と言つて永遠亭に泊まつてたわ。まあ、余り酷くなかったしね。」

「それじやあ、妖怪は？」

「・・・傷も治つて目もさましたわ。今薬を取り行つてもらつてる。」

「薬？」

訳を聞こうとした時、襖があいた。

「あ、目が覚めたんですね。裕也さん。」

「红楼夢！」

「ご苦労様。」

「いえいえ、このぐらい。」

「あら？ 妖怪にしてはやさしいのね。」

「お前！ わかるのか!?」

「私を誰だと思ってるの？ 月の煩惱、八意永琳に、できない事なんて無いのよ。」

「ふーん。」

「リアクション薄いわね。」

「所で红楼夢何でお前が働いている？」

「あ！ それはですね。ここで働く事になつたんですよ。」

「良いのか、言つちやあ悪いがこいつは妖怪だぞ。」

「良いのよ、優曇華やてゐも妖怪みたいな物だから。」

「そうか、よかつたな红楼夢。これでお前は一人じや無いぞ。」

「ええ、そうですね。」

「は？ 何言つてるの？」

「え？」

「裕也と言つたかしら？ 貴方も此処に住むのよ。」

「は？ おい！ そんな事聞いていないぞ！」

「当たり前よ、今行つた事なんだから。」

（こんな美味しい実験体、もとい、試験体を見逃してたまる物ですか！）

「その顔！ 絶対何かよからぬ事を考えているな！」

「あら？ そんな事無いわよ。」

（ち、鋭い。さて、如何しましようか。ふむ。）

「・・・貴方の身体はボロボロなのよ。」

「え？」

「はあ？ いい？ 貴方は普通の人間の癖に優曇華、てゐ、そして、あの傷を見ると、早苗とも戦つてゐる。それで、身体に何の異常も起きないと思つて居た訳？ 実際、貴方の神経細胞はボロボロなのよ。しかも、両腕両足その他の所もボロボロ、実際貴方の腕どれたんなからね。」

「そ、そんな事！ だつて腕はあるし！」

「当たり前よ。だつて私が新しく腕を付けたんだもの。」

「・・・それで？」

「え？」

「だから、それが如何した。」

「だ、だから貴方の腕。」

「だつたら定期的にくれば良い。違うか。」

「・・・貴方、止まる場所あるの？無いでしょ、人の好意は素直に受け取るべきよ。」

「・・・それは、本当に好意か？」

「え？」

「お前八意とか言つたな。」

「そうよ。それが何か？」

「八意お前は、自分の事を、月の煩惱と言つたな。」

「だから、それが何。」

「自分でそう言う奴は少なからず、こいつで調べて見たい。普通の人間なのに如何して

持つたのか調べたい。見たいな事を少なからず考えている。違うか？お前は・・・俺の

カンだが、罪を犯しているな。」

「・・・如何して。」

「そう思うか、か？簡単だ。お前の目が言つている。」

「目?」

「そう、俺は外の世界で医者をやつて居たからな、何百人と見て来たよ。」

「でも、貴方、見た所16～7歳に見えるわよ?」

「小さい頃から見て來たからな。小さい頃は、天狗になつてた。何故?当たり前だ、自分に治せない病気は無かつた。必ず治せた。」

「まあ、それは、天狗にもなるわよ。」

「そう、そして、その思い上がりが罪を犯してしまつた。その時、俺は悔やんだ、自分の思い上がりで大勢の人を殺してしまつたんだ。」

「それは、如何して?」

「言つたろ天狗になつてたつて、俺は偶然にも、不老不死の薬を作つてしまつたんです。」

「不老不死の薬如何やって!」

「・・・兎に角、俺は実験がしたかつた。そして・・・死刑囚にその薬を使つた。」

「そして、如何なつたの?」

「死なくなつた。どんなに死ぬような事をされても、その死刑囚は死なかつた。そして、戦争が起つた。」

「戦争。」

「そう。そして、関係ない人が・・・死んだ。自分を呪つたよ。如何して普通にしなかつ

たのか。普通の薬を作つていれば、あんな事にはならなかつたのに。」

「それで？ 貴方は如何したの？」

「勿論、逃げたさ。でも、逃げても、逃げても、駄目だつた。だから、強く天に祈つたんだ。この忌々しい薬と一緒に自分もどつか遠くに、誰も知らない世界について、祈つた。・・・そして気がついたらここ、幻想卿にいた。」

「そうだつたの。」

「ああ、だから、済まない。」

「ううん、良いの。所でその薬持つて いるの？」

「・・・ああ、だが如何するつもりだ。」

「確かめたくて、お願ひ。」

「・・・わかつた。」

そう言うと、何処から出したか、大きいバツクが出できた。

「貴方何処から出したのよ。」

「これだ。」

それは、光り輝く美しい羽であつた。

「これなの？」

「ああ。そうだ。」

「これを食べれば良いの。」

「いいや、潰してある物を使わないといけない。そのままだと食べたらすぐ死ぬ」「ある物つて？」

「・・・言えない。」

「何故？」

「また、起ころかかもしれないから。」

「そう。話が脱線したわね。それで如何する？」

「・・・紅樓夢お前はここにいたいか？」

「え！ 私ですか！」

「ああ、答えてくれ。」

「私は、ここにいたい、そして薬をもつと学んで人を助けたい！だからここに残る。」

「どうか。なあ、八意。」

「なに。」

「どれくらいで治る？」

「ざつと見て二週間は必要よ。」

「じゃあ、その後も宜しく頼む。」

「それは如何言う意味かしら？」

「此処に住まわせてくれつて意味だよ。」

「・・・いいのかしら？」

「ああ、だつてお前はもう間違いなんて侵さないそなうだろ？話してて分かつたからな。それと、きっと八意は、俺を実験体にしようと思つていたな。」

「如何して。」

「顔がそう言つてる。」

「あらやだ。」

「でも、此処に住まわせてくれるのなら、実験体になつてやつてもいい。どうだ。」「・・・貴方はそれでいいのね。」

「ただし、紅樓夢を立派な薬師にしてくれ。」

「わかつた。これから宜しくね裕也。」

「ああ、宜しく八意。」

「永琳。」

「え？」

「私の事、そう呼んで。」

「・・・わかつた、永琳。」

「じやあ、早速だけどこれを飲んでくれないかしら？」

「なあ、永琳。」

「何かしら？」

「何かが蠢いているんだが。」

「ふふふ、安心して。多分死なないから。」

「ちょ！ 多分！ 多分つて！ や、やめ。」

「観念しなさい。大丈夫だから。」

「や、や、ぎややややー！」

「え、あの、シリアルスは？」

こうして、永遠亭に住む事になつた裕也で紅樓夢。さて、はて、これから如何なる事やら。

永遠亭3

「ぐー重い。何だ？」

裕也は目を開いた、いや、開いてしまつた。其所に居たのは、上半身裸の男が乗つかつていた。

「ぎ、ぎやややー!!」

裕也の悲鳴が永遠亭に響いた。

「な、何だ！お前は！」

「うん？ やあ、おはよう。いい朝だね。」

「いい朝じやねえ！ お前あれか!? 残念なイケメンか!? てかまず！ 服を着ろー!!」

「はつはつは、いいじやないか！ さあ！ 語り合おう！ 体の奥底まで！ ビンビンにいーーー！
「ぎややー 残念なイケメンじやねえー！ イケメンな変態だーー！ 誰か！ 誰か助けてーー！ 嘰
われる、喰われるーー！」

「はつはつは、あつはつはつはー！ さあー！ さあー！ さあー！ ヤろうじやないかー！」

「だ、誰かーー！ や、やめ、く、来るなーー！」

「ふふふ、もう逃げれないよ。俺は男に飢えているんだー！ やつと見つけた男！ 逃がす訳

無いじゃないか！」

「ぎやややー！畜生ー！この！いい加減にしろー！」

「ぐふ！いいパンチだd」

そういう男は倒れた。

「はあ、はあ、何だつたんだ？一体。」

「大丈夫ですか!?」

其所に優曇華が現れた。

「て！また貴方ですか！」

「優曇華こいつ知つてるのか？」

「ええ、この伸びている男は、女になる程度の能力を持つてゐる、新城一馬よ。」

「何だその能力は。」

「言葉道理の意味です。」

「ほら、起きて下さい、一馬。」

「ぐ！いたた。ん？おお！優曇華じやないか！如何した？」

「如何したじやありませんよ。」

「・・・」

「さつきは済まなかつた、久々の男でつい。だからそんな怖い顔しないでよ。」

「はあ、もういい。優曇華？もう朝食だろ？行くか。」

「あ、はい。」

優曇華と共に居間に行こうとした時。

「なあ、お前！」

「はあ～。何だ・・・つ！」

裕也は驚いた何故なら其所に居たのは、さつきの変態イケメンじゃなくて腰まである綺麗に整えられた髪、そして誰でも振り向くであろう、美人な女人の人が其所に居た。

「な！お、お前！」

「おやおや？鼻の下が伸びているぞ～」

「く！お前な！」

「にやはは！冗談冗談。これで許してくれたかい？裕也君。」

「く！」

「はあ～、馬鹿な事をやつてないで行きますよ。裕也さん。一馬。」

「おう！今行く！あ！それから裕也つて言つたか。」

「何だ」

一馬は手を出しこう言つた。

「これから宜しくな！」

「！ ああ、こちらこそよろしく一馬。」

握手を交わした。

「ふう、いい所悪いけど、服を着なさいよ。」

「大丈夫男にもどればいい（キリ）」

そんな話をしながら居間についた。そこには、先に来て居た永琳とてゐそれから綺麗な女性が居た。

「優曇華遅いわよ。」

「すいません、姫様。」

「まあまあ、いいじやないですか。輝夜さん。」

「一馬知つているのか？」

「ん、ああ、この人はこの永遠亭の主蓬萊山輝夜つて人だ。」

「あら、貴方が永琳が言つてた子なの」

「はい。姫様。」

「ん、ちよつと待つてくれ。永琳、こいつはなんでいるんだ？」

「それはね。」

「いや、永琳さん。自分で説明しますよ。」

「そう。」

「ちよつと待つたー！」

「ど、どうしたんですか姫様！」

「そんな事より！朝飯よ！朝飯。」

「いやいや！輝夜さん！自分の紹介をさせて下さいよ！」

「うるさい！残念な変態！私はお腹が空いたのよ！」

「ざ、残念な、変態？いやいや！それはひどいじゃないですか？この！ヒキニート！」

「違う！私はちよつと動くのがキツイからただ、部屋に籠つていてるだけだ！けしてヒキニートでは無い！」

「それをニートって言うんですよ！この！ニートの中のニート、THEニート。ofキング。」

「何よ！変態行為しかしない変態が！」

「違う！俺はただ曲者が来ない様に下着とか、風呂場を覗いているだけだ。断じて変態では無い！仮にも変態だととしてもそれは、こよなく女子を愛する紳士だ！」

「鏡を見て言いなさいよ！紳士？違うわね！一馬！貴方は紳士装つているただの変態よ！それに比べて私はただ出る用事がないから出ていないだけ、だから！けして！ニートでは無い！」

「は！お前こそ、パソコンするので忙しいと言つてなんにもしないだらうが！これをニートと言わずとして何がニートだ！」

「うつさい！この痴漢！」

「何だと！このニート！」

「何ですつて！このちかん」

ブチ

「え？」

「やば。」

「ふ、ふふ、ふふふふ。姫様、一馬こつちに来て下さい。」

「い、いや、輝夜さん先に行つて下さいよ。」

「ま、またまた。一馬貴方が先よ。」

「早く、来なさい？フタリトモ。」

「輝夜さん。」

「ええ！一馬！」

「逃がしませんよ。」

「な、なに！回り込まれた！」

「くつ！・・・今だ！」

甘い。

隙を見て逃げようとした一馬だつたが。読んでいたのか永琳は一馬の首を掴んだ。

「首！、首が締まつてます！永琳さん首がー！」

「一馬、貴方の犠牲は忘れないわ。それじゃあ！」

「あ、くそ！また俺を置いていかなないでくれ！」

「兆^サがようとしても無駄ですよ姫。」

「え？」

何時の間にか輝夜の襟首を掴んでいた永琳。それに輝夜は。

「あ！ちょっと話し合いましょう！ね！永琳。」

「ええ、隣でじつづくりと。」

「誰か！助けて！」

そんな二人を抱えて永琳は隣の部屋に入つて行つた。

「ちょー・ホー・ギヤヤヤヤーー・グボアー

ま！ア―――!!

「ちよと、まつて、永琳冗談よね？そ、そんな物使つたら！」

「グツバイ」

「き、きやややややー！」

二人の悲鳴が部屋から数分聞こえたあと、所々血まみれな永琳が其所にいた。

「し、師匠、死んでないですよね？」

それに永琳は、ニッコリ笑いながら。

「大丈夫。死んでいたとしても、私が蘇らせるから。」

「で、でも。」

「優曇華？私の言う事がきけないの？」

「い！いいえ！滅相も御座いません。」

「そう。ほら、裕也も座つて。」

「ああ、わかつた。」

「それでは。頂きます。」

こうして、永遠亭の朝が過ぎて行つた。

永遠亭4

「あ、裕也君。」

「？ 何だ永琳。」

縁側で休んでいた裕也に永琳が話しかけてきた。

「ちよつときてくれない？」

「？ ああ、わかつた。」

少し歩いた所

「・・・ここよ。」

「あのー此処は？」

「ん？ 私の部屋だけど？」

「いやいや！ こんな部屋があるか！」

永琳の部屋にあつたのは・・・悪魔の部屋に拷問道具を足しそれに薬品が並んでいて、かなり混沌な空間になっていた。

「あら？ 普通でしょ？」

「全然普通じゃねえだろ！ 悪魔の科学者だよ！」

「そう？」

「・・・・もういい。」

「それじゃあこの薬を飲んで？」

「何だこの物体Xは？」

「・・・飲み物？」

「違うよ！ただの蠢いてる物だよ！今度こそ死ぬから！」

「大丈夫だから安心して？」

「・・・本音は？」

「いやー、ちょっと凄い飲み物無かつたからだつたら自分で作つてやろうとなつて何や
かんやして出来たけど何か嫌な予感がしたから優曇華に飲ませたら、変な踊りをしながら
楽しくハツスルしてから倒れてびくんびくんと、して痙攣していくから大丈夫！」

「それ！全然大丈夫じゃないから！」

「兎に角飲んで？」

裕也は永琳から怪しい薬を貰つた！

「えーい！男は度胸！」

裕也は飲んだすると。

「あれ？案外普通？」

「よかつたわね。それじゃあ！これと、これと、これもよろしく！」

「ま、待て！それは！がべぼがぐえぐが！」

「これでよし！さて！如何？」

裕也はびくんびくんしていた。

「裕也くん、大丈夫？」

「・・・・・」

「あのー」

「ぐ！げほ！何するんだ永琳！」

「あら？何にも無い？」

「ああ、奇跡的にな。」

「・・・貴方、本当になんとも無い。」

「何言つて。」

「良いから答えて。」

「？ 特には何とも。」

「・・・貴方氣ずいて無いの？」

「??」

「仕方がないちょっと外にきて。」

??

裕也は外に出た。

「一体何なんだ？」

「私と勝負して貰うわ」

「は？ ちよおま！ 何言つてんだ！」

「・・・神脳 「オモイカネブレイン」

裕也に大量な鐘が落ちてきた。

「ちよ！ 鐘？！ うわ！」

裕也はあり得ないスピードでよけた。

「あ、あれ？」

「やつぱり。」

「は？ それは如何言う意味だ？」

「貴方色々飲んだじやない。」

「お前に無理矢理な。」

「まあ・・・そのせいなのかしら。」

「だから何だよ。」

「色々な能力が上がっているのよ。」

「は？」

「しかも靈力は紫と同様かそれ以上。」

「は？おいおい、ふざけるのもいい加減にしてくれ。」

「なら、ためしてみる？」

「え？な！ぐあ！いきなり何を……！」

大量の弾幕が放たれた。

「く！」

血符 「針棘の山！」

「ぐう！…効かないわね。」

回復 「泉の水」

永琳がそう唱えると傷が癒えていった。

「な！」

「休んでいる暇は無いわよ？本気で行くからよけてね。」

禁固 「夢路の封印」

永琳の周りに鳥居が現れそこから大量の綺麗な玉が一斉に裕也に向かつて襲つてき

た。

「わ！は！や！と！」

裕也は必死に避けている。

「早くし無いとしぬよ?」

「や! は! く! ぐは! ち!」

(くそ! 如何する! ……! そうだ! 幻想卿に常識は通用しないなら。新しく作ったこのスペルと、あれで!)

「さあ、如何する。」

「後悔するなよ! ミツクススペル!」

裕也は避けながらスペルを二つ出した。

「それで何をするつもり?」

冰心「針棘の暴風雷雲」

雨、針、棘が風で竜巻を起こし、その中で雷が落ちてきた。

「な! なに! ぐ! 避けきれない! き、きやーー!」

数十分の後嵐が止んだ。

「あ! 永琳! 大丈夫か!」

嵐が止んだ場所にいた永琳は身体中傷だらけで服はボロボロだつた。

「だ、大丈夫よ。」

「だ、だが。」

蘇活「生命遊戲——ライフゲーム——」・

永琳は傷が癒え何故か服も元に戻った。

「ふう、如何だつた。裕也?」

「凄かつた、スペルカードを使つても全然疲れない。」

「そう、よかつたわね。それよりさつきのなに?」

「ああ、ミツクススペルですね。」

「そう、それ。ミツクススペル何て聞いた事が無いわよ。」

「勿論だ。だつて、俺が考えたからな。」

「な! 貴方自分で考えたの! 嘘でしょ!」

「ああ、ある物を思い出してな。」

「所で、貴方今スペルカードいくつあるの?」

「えーと紅樓夢に貰つたのと、拾つたので・・・4枚だな。」

「で今使えるのは?」

「3枚。」

「どんなのか説明をしてくれない?」

「良いですよ。まずははじめは、血符「針棘の山」、次に暴風「雷雲」、最後に、治癒「自然の力」ですね。」

「そうなの、だつたらはい。」

そう言つて渡したのはスペルカード3枚だつた。

「良いんですか？」

「ええ、いつも実験に付き合つてくれてる御礼、と、でも受けとつておいて。」

「は、はあ、わかりました。」

「それでは昼にしましようか。」

「あ！もうそんな時間か。」

居間に行こうとした裕也に永琳は。

「ねえ。」

「うん？」

「またよろしく。」

「・・・ああ！」

こうして裕也の午前が終わつた。

第一部 第3章・人里異変 人里の行く道で

【裕也】

「ふわあ～よく寝た。しかし……」

裕也は昨日の事を思い出していた。

【裕也】

「紫と同じかそれ以上……か。実感が湧か無いな。」

考え込んでいる裕也に這い寄る一人の男がいた。

【一馬】

「僕の事を考えていたのかい？OK！なら！俺と！や ら な い か？」

【裕也】

「遠慮しておきます。」

【一馬】

「それは残念。」

そんな他愛も無い話をしていたら、襖が空いて紅楼夢が顔を出した。

【紅樓夢】

「ご飯が出来ましたよ。」

【一馬】

「OK！性を付けにイつてこようじやないか！」

【裕也】

「辞めろ！お前が言うと卑猥に聞こえるわ！」

【一馬】

「え！何だつて！？ご飯が終わつたら二人で大人の階段を登つて戦隊ものみたいに合体したいつて！これは、体がビンビンになるな！」

一馬は笑顔で言つた。それに裕也は。

【裕也】

「勝手に言つてろ。」

無視をした。

★

移動なう

★

裕也達が居間の襖を開けると。優曇華、てゐ、輝夜、永琳、全員いた。

【優曇華】

「何かありましたか？」

【紅樓夢】

「いえ、何も。」

紅樓夢は苦笑いをしながら話した。



（食後）



【裕也】

「ふう、食べた、食べた。」

居間でゆつくりしていた裕也に永琳が話しかけて来た。

【永琳】

「今良いかしら？」

【裕也】

「？ 何だ？」

【永琳】

「人里に行つて来てくれ無いかしら?」

【裕也】

「人里に? 何で?」

【永琳】

「ここにじつとしていても体が鈍るわ、大丈夫。優曇華の付き添いだから。」

【裕也】

「優曇華の?」

【永琳】

「あら? 言つていなかつたかしら、私と優曇華で人里に薬を売りに行くのよ。」

【裕也】

「薬を?」

【永琳】

「ええ、私達医者は命を助けるのが仕事よ、だから、ね☆」

【裕也】

「分かつた行つてくる。」

【永琳】

「優曇華！行くわよ～！」

【優曇華】

「は～い！師匠分かりました。」

人里に行く途中の場所。

【優曇華】

「はあ～師匠の命令だからって何であんたと行かなきやならないのよ！私を医者じや無
いって言つた貴方に。」

【裕也】

「あれはお前が悪い。」

【優曇華】

「何ですつて！」

【裕也】

「だつて・・・・・！」

【優曇華】

「急に如何したのよ？」

【裕也】

「声が聞こえた。」

「声？」

【優曇華】

「優曇華は耳を済ませてみたが何も聞こえなかつた。」

【優曇華】

「何も聞こえませんよ？きつと氣のせいですよ。」

【裕也】

「いや！氣のせいじゃない！……こつちだ！」

【優曇華】

「あ！ちよつと！」

優曇華の止める言葉を無視して下に降りた。

【優曇華】

「あーもー！」

優曇華も下に降りた。

【裕也】

「確か……こつちに。」

裕也は声がしたと言う場所を探していたら怪我をしている女がそこにいた。

【裕也】

「いた！おーい！優曇華……こっちだ！」

【優曇華】

「本当にいた。」

【裕也】

「おい！誰にやられた！いや、今はそんな事より治療だ」

裕也は永琳からもらつた薬箱を取り出し女を治療し始めた。

【優曇華】

「凄い手際。師匠を見ているみたい。」

【裕也】

「これで大丈夫。さて、何が合つたんだ話してくれ。」

【女】

「ひ！や、辞めて、食べないで！ごめんなさい、あ、謝る、謝るから、」
女はかなり震えていたようで裕也達の姿が目に入つていなかつた。

【裕也】

「優曇華、お前の出番だ。」

【優曇華】

「優曇華、お前の出番だ。」

「は？ 何で私が。」

【裕也】

「はあ～良いか？ お前の能力。狂気を操る程度の能力が必要何だよ。この女の恐怖を中和する為に、だから、お前の出番だつて言つたんだよ。」

【優曇華】

「はあ～分かつたわよ。やれば良いんでしょやれば。」

その時近くの草むらがガサガサ揺れそこから現れたのは。

【EXルーミア】

「おい、その女をわたせ。」

女がいきなり尋常じやない怯え方をした。

【裕也】

「嫌だ、と言つたら？」

【EXルーミア】

「貴様を殺しその女を連れて行くだけだ。」

【優曇華】

「ひーー、この感じあの時と同じ。」

優曇華はいきなり怯え始めた。

【裕也】

「おい！ 優曇華！ お前何怯えてんだ！」

【優曇華】

「何で？ 彼処から逃げたはずなのに、もう、あの恐怖はもう無いはずなのに。」

【裕也】

「優曇華！？ おい！ 優曇華！」

【EXルーミア】

「・・・・なるほど、兎の耳を付けた女、お前戦場から逃げたな？」

EXルーミアがそう言うと優曇華が体をびくつと動いた。

【裕也】

「戦場？」

【EXルーミア】

「そうだ。多分その女脱走兵だ。」

【裕也】

「脱走兵？」

【EXルーミア】

「ああ、そいつは何処かの国から逃げたんだ。だから私の殺気に怖じ気ついたんだ。そ

「ういえばお前は大丈夫なのか?」

【裕也】

「俺か?ああ、だつて、その程度の殺氣ならあつち側でお前以上の殺気に会つてゐるからな、今更その程度じやあ引く気は無い。」

【EXルーミア】

「なるほどな。だが如何する?そこの兎は戦意喪失してゐるし、女は怪我をしてゐる。さあ、如何する?」

【裕也】

「こうする。」

そう言うと裕也は優曇華の襟首を持つておもつきり殴り付けた。

【優曇華】

「ぐう!な、何を。」

裕也は怒鳴りながらこう言つた。

【裕也】

「お前は医者だろ?!医者は人を助けるのが仕事だ!お前は何の為に医者になつた!恐怖をまぎわらすためか?!罪の意識か!違うだろ!もうあんな事はやだつて思つたから医者になつたんだろ?!違うか!違うならそこでじつとしてろ!でも、そうじや無かつたら

そいつを守れ！」

【優曇華】

「わた、私は。」

【EXルーミア】

「お前は本当に人間か？」

【裕也】

「何言つてやがる。今は人間や妖怪何て関係ない、俺は、皆を守りたいただの医者だ！覚えておけ！」

【EXルーミア】

「なるほど、なら私もそれに答えなければいけ無いな。・・・私の名前は、ルーミア、この姿だとこう言われているよ。EXルーミアってな。」

V S ルーミア

【EXルーミア】

「行くぞ。」

【裕也】

「！　ま！待て！」

【EXルーミア】

「待つと思うか？」

夜付「B l a c k ストーム」

ルーミアの周りに闇が広がりそれが収縮してルーミアの手のひらに乗った。

【裕也】

「な、何だ、何かしたのか？」

【EXルーミア】

「周りに見えてる物が本物だとは限らない。」

【裕也】

「な！上か！ぐ・・・・・が・・・・！」

裕也は前にいたルーミアに気を取られていて、上から来たルーミアに黒い弾幕を当たらされた。

【EXルーミア】

「それだけじや無いぞ。」

【裕也】

「なに！ぶ・・・・・ぎ・・・・・が・・・・・?!?!?」

裕也の腹がいきなり凹み回転しながら近くの岩や竹を壊して数メートル飛んで止まつた。

【EXルーミア】

「ふむ、やり過ぎたか。だがこれでこいつを殺せる。」

【女】

「ひーー、来ないで！謝るから！謝るからああああ!!!」

【EXルーミア】

「もう・・・・・遅い。」

ルーミアの腕が黒くなり指先が尖った。その腕を女に突き刺そうとしたが。

【裕也】

「ま、待て、ごぼ・・・・・はあ・・・・・はあ・・・・・お前の相手は・・・・・げほ・・・・・俺だ

ろ。俺は……まだ……生きてるぞ！」

【EXルーミア】

「何故生きてる。あれは貴様を殺したはずだ。」

【裕也】

「あれ……だと……。」

【EXルーミア】

「ああ、さつきのスペルカードは生きているんだよ。ただし使つた時に一回きりだがな。」

【裕也】

「なる……ほど。げほ……ごほ。」

裕也はふらつき血を口から出しながら喋つてた。

【EXルーミア】

「お前は、彼奴の仲間か何かか？」

【裕也】

「いや……違う。だが……そいつを助けたのは……俺……だ。」

【EXルーミア】

「だから、か?……だから助けるのか?誰かも知らない奴を助ける為に命を張るのか

？」

【裕也】

「きめ……たんだ……俺が見た人……は……どんな奴からでも……守り……そして……敵味方関係無く……友達になるつてな！だから……俺は！」

【EXルーミア】

「くだらん。だつたら聞くが、そいつを殺したい程に憎んでいる奴は？そいつに殺された人は？10年に及び憎んでいた奴と友達になつたら？他にも色々あるが言うか？」

【裕也】

「そんな……事は……分かつてる……だが……それでも！がは……可能性があるなら一人でも……一パーセントでも可能性があるなら……俺は！」

諦めない！行くぞ！ルーミア！」

人間「人々の悪意」

裕也の手から怨霊が現れルーミアに張り付いた。

【EXルーミア】

「何だ？これは？……！」

ルーミアの手、目、足、が動かなくなつた。

【EXルーミア】

「何をした！」

【裕也】

「辛いだろ、痛いだろ、このスペルカードは俺が受けた痛みに少しの怨念が付きまとう技なんだ。怨念は俺が殺してしまった人のだ。」

【EXルーミア】

「なるほど、つまり、自分が受けた痛みを相手と同じにして痛みを共感するスペルカードか。」

【裕也】

「そうだ。如何だ気持ちは」

【EXルーミア】

「そうだな。これが痛いって事なんだろうな。・・・なあ、お前は本当に友達に慣れると思つてているのか？」

ルーミアの言葉に裕也は笑顔で言つた。

【裕也】

「当たり前だ！」

【EXルーミア】

「そうか。だったら私とも友達になってくれないか？」

ルーミアがそう言つた瞬間いきなり痛みと金縛りが治つた。

【裕也】

「？ 何言つてんだ？ 戦いが終わつたら、もう……友達だろ！」
笑顔で言つた。それにルーミアは。

【EXルーミア】

「そうか。有難う。」

【裕也】

「そ……れより……どうして……その女を狙つたんだ。」

【EXルーミア】

「それより、良いのか？ そこにいる兎は。……ちょっと良いか」

【裕也】

「ん？ 何だ？」

【EXルーミア】

「ああ、実は。」



【優曇華】

「遅いな。何してるのでよ。」

ガサガサと草むらが揺れ・・・ルーミアが姿を現した。

鈴仙・優曇華院・イナバの覚悟

【優曇華】

「裕也、裕也は如何した！」

【ルーミア・大人】

「・・・・・」

【優曇華】

「答えるルーミア！」

【ルーミア・大人】

「・・・・殺した。」

【優曇華】

「な・・・・に・・・・？」

【ルーミア・大人】

「だから・・・・殺した・・・・私が・・・・この手で。」

【優曇華】

「き・・・・さま・・・・！」

優曇華は怒りをあらわにして、殺氣を出しながらルーミアを睨み付けた。

【ルーミア・大人】

「ほう、中々だが……その程度か？」

【優曇華】

「ひつ！」

優曇華はルーミアが出す殺気に怯え、後ずさつた。

【ルーミア・大人】

「なんだ？ 口先だけか？ 野兎。なら……その女をよこせ……それとも……死んでからにする？」

【女】

「ひつ！ た、助けてよ！ 私を見捨てないでよ！ 彼奴見たいに死んでも守りなさいよ！ か、金ならいくらでも出すわ！ だ、だから！ あんたと同じ化け物何だから!?」

【優曇華】

「は？」

優曇華は疑問に思つた。

【優曇華】

「……（如何してこの女は、ルーミアに狙われている？ 確かにルーミアは人喰いだ、だ

が、ある日から人を食べ無くなつたらしい。そのルーミアが、人を意味無く食べる何てあり得るのか？……聞いて見るか）」

【女】

「何とか言いなさいよ！化け物！」

【優曇華】

「……なあ、ルーミア、何でこの女を狙つているんだ？教えてくれないか？」

【女】

「私を無視しないでよ！この！化け物！」

【ルーミア大人】

「……良いだろう。教えてやる。如何してこの女を狙うか。」

ルーミアはゆっくり話し始めた。

【ルーミア・大人】

「あれは、少し前起きた事だ。私が暇を潰せるのを探している時だ。」

数時間前

【ルーミア】

「ひまなうのうだ。」

ルーミアはいつも通りにフラフラしていた。その時、一人の女がルーミアの目に入つた。

【ルーミア】

「そーだ！ 少し驚かすのだー♪」

ルーミアは嬉しそうに女の所に行つた。

【女】

「確か、この辺りに。」

【ルーミア】

「がお～♪た～べ～ちゃ～う～ぞ～☆」

【女】

「ふふ、見つけた。この子の・・・を手に入れたら、私も。」

女はボソボソと話していた。ルーミアは聞こえなかつたと思ひ言い直した。

【ルーミア】

「がお～♪た～べ～ちゃ～う～ぞ～☆」

【女】

「ねえ？ ルーミアちゃん？ こつちに来てくれない？」

【ルーミア】

「？　如何したのだ？？」

ルーミアは何の疑いも無く、女に近付いた。

【ルーミア】

「きたぞ？　如何したのだ？」

【女】

「ええ、ちょっとね！」

【ルーミア】

「かつ・・・・は・・・・何を？」

女はルーミアが油断していた所に・・・・漆黒の剣を胸に刺した。ルーミアは血を出しながら・・・・地面に倒れた。そして女はルーミアの髪飾り・・・・封印の札を取つた。

【女】

「安い仕事ね。たかが小娘の札を取れば良いつて、しかも、それだけじゃなく、この剣までくれるなんて、本当に良い仕事を見つけたわ。それじゃあ、バイバイ、化け物。」

【ルーミア？】

「まで。」

【女】

「なあに？また、刺されたいわけ？それじゃあ……何回でも……刺してあげるわよ！」

女はルーミアに刀を振り下ろしたが、今度ルーミアは片手で受け止めた。

「え？ 何で！ さつきは！」

【女】

【ルーミア？】

「私は……ただ……寝て いたいがけなんだがな？ 貴様か？ 人間、私を目覚めさせたのは。」

【女】

「ひつ！ だ、誰よ！ さつきのチビは！ それに貴様は何者なの！」

【ルーミア？】

「私が？ 私は私だ。それ以上でも無い。……私の眠りを醒ました代償は高いぞ？ 覚悟をしろよ……人間。」

女はルーミアがだす殺気に怯えながら逃げた。

【ルーミア・大人】

「……静かに……ただ……ただ……それだけなのに。」

ルーミアは呟きながら女を追いかけて行つた。



【ルーミア・大人】

「ど、言う事があつてな。分かつただろう？その女は自分の為なら他は如何でも良いつて思つてる馬鹿な女だ。……生きる価値は無い。」

【女】

「た、助けてよ！ねえ！」

【優曇華】

「……なるほど。……それじゃあ……如何して……裕也を殺したの？」

優曇華は声を震えながら言つた。

【ルーミア・大人】

「悔しいか？悲しいか？ 目の前で殺した私が憎いか？だが、それはお門違いだ。貴様が怯え後ずさつたから、彼奴がお前の代わりに行つたんだ。憎むなら、お前自身を憎め。」

優曇華はギリリと歯を噛んだ。

【ルーミア・大人】

「分かつたらそこをどけ。脱走兵。」

【優曇華】

「・・・やだ。」

【ルーミア・大人】

「何?」

【優曇華】

「嫌だつて言つてんのよ! ルーミア!」

幻波 「赤眼催眠(マインドブローイング)」

優曇華はスペルカードを出した。

【ルーミア・大人】

「ぐ・・・・が。」

【優曇華】

「どうだ、上手く歩く事も出来無いでしょ?」

優曇華は笑いながら言つた。だがルーミアはさつきまで苦しそうにしていたが、数分でおさまった。

【ルーミア・大人】

「ふむ、なるほど、これは精神の破壊だな。中々危険な能力だな。・・・私も本氣で行こ

闇付 「眩む視界」

【優曇華】

「うぐ！ 目が。」

【ルーミア・大人】

「どうだ？ 闇の感覚は？ 何も見え無いだろ？ さあ・・・如何する？」

【優曇華】

「く・・・目が、見えない。」

【ルーミア・大人】

「行くぞ。」

ルーミアは素早く優曇華の懷に入り3回パンチを入れ、弾幕を丸め固めた黒い玉を中に打ち込んだ。

【優曇華】

「が・・・は・・・うぐ・・・あ・・・」

優曇華は数メートル吹っ飛んだが、上手く体制を立て直した。だが、直接食らつたから腹を抱えていた。

【ルーミア・大人】

「どうだ？ 闇の力を受けた感覚は？」

【優曇華】

「げほ！ がは・・・・はあ・・・・はあ・・・・滅茶苦茶よ！ くそ！」

優曇華は傷だらけだったが、ルーミアを睨みつけた。

【ルーミア・大人】

「ほう、私との実力差を感じたはず。なのに立ち向かうのか？ 何故？ 逃げれば良い、その女を私に渡して、如何した？ 脱走兔。」

【優曇華】

「もう、やなのよ。逃げるのは、許してくれた師匠の為にも、私を見捨てないでくれた姫様を、悪戯をして励ましてくれた仲間の為にも、そして、会つて間もない私の心配してくれた・・・・居候の為にも！ 逃げる訳には行かない！」

赤眼「望見円月（ルナティックプラス）」

優曇華から、大量の銃弾が現れそれが、不規則に散弾銃見たいにルーミアに向かつてうち放たれた。

【ルーミア・大人】

「ち！ 犯めるな！ 小娘！」

闇符「ダークサイドオブザムーン」

【優曇華】

「な!? 私の弾幕が闇の中に取り込まれて行く!? いや! まだまだ!」

〔ルーミア・大人〕

「なーぐうつ！」

優曇華が手に溜めておいた弾幕がルーミアが出した闇の中を抜け、ルーミアの肩に当たつた。

優曇華

「どうだ！ ルーミア！」

ルーミア・大人

ぐ……さ、最後に聞かせてくれ。如何してお前はそんなに頑張る。」

〔優曇華〕

「認めてくれた姫様達の為にも、今はもういない、会つて間もない私を守つてくれた！だから！私は頑張るんだ！」

〔ルーミア・大人〕

「そうか・・・おーい、もう出てきて良いぞー。」

優曇華

「は？」

〔裕也〕

「よ！優曇華。」

【ルーミア・大人】

「成功だな。」

【裕也】

「ああ、そうだなルーミア。」

【優曇華】

「な、な、な、なんじやそりやー！」

【女】

「ひつ！お前もあの化け物の仲間か！た、助けてー！」

そう言うと女は走つて逃げて行つた。

【ルーミア・大人】

「貴様！まで！」

【裕也】

「追うなルーミア！」

【ルーミア・大人】

「つ・・・・！」

裕也の言葉で立ち止まつたルーミアは、走つて行く女を見逃した。

【ルーミア・大人】

「何故だ裕也。何故見逃したんだ? 彼奴はお前の仲間を馬鹿にした女だぞ。」

【裕也】

「なあ、優曇華? 聞きたい事があるんだが。」

【優曇華】

「なによ。」

【裕也】

「はは、怒るなって、謝るから。」

【優曇華】

「たく。で? なんなのよ。」

【裕也】

「ああ、人里の方角はどつちだ。」

【優曇華】

「方角? それならここから北北西につて! もしや!?」

【ルーミア・大人】

「・・・ふむ。」

【裕也】

「そう。あそこに里が見えるし、方角も一緒だ。だからあの女は人里に向かつたって言う事になる。それを妖怪のルーミアが行つたら、攻撃されるかもしれない。だから、待つて貰つたんだ。ルーミア。」

【ルーミア・大人】

「なるほど。だが、如何する？あの女はきっとお前達の事を人里に言うぞ？悪くな。」

【裕也】

「大丈夫。優曇華、いつから人里で薬を売つてる？」

【優曇華】

「え？んく、一年位かな？」

優曇華がそう言うと裕也は少し笑いながら言つた。

【裕也】

「なら大丈夫だ。安心して良いだろう。」

【ルーミア・大人】

「何故だ？」

【裕也】

「一年も優曇華達の薬に世話になつてゐるんだろ？だつたら、違うつて直ぐに分かるはず。だから大丈夫だつて言つたんだ。な！優曇華。」

今度は優曇華を見てニカツと笑つた。それに優曇華は。

【優曇華】

「(どきつ-) べ、別に。そうよね! うん!」

【裕也】

「? まあ、良いか。とにかく、そう言う訳だから待つててくれないか? 代わりに俺
らが言つてくるから。」

【ルーミア・大人】

「分かつた。だが、私もついて行く。」

【裕也】

「何故? きっと、襲われるぞ?」

【ルーミア・大人】

「いや、気になつてな。」

【裕也】

「そうか。よし! 行こう! 人里へ!!」

妖怪の賢者と人里の守り人

【優曇華】

「もうじき人里に着きます。」

【??】

「ちょっと待つて下さる？」

【裕也】

「お前は？」

【紫】

「紫。八雲紫と言います。お見知りおきを。」

【裕也】

「・・・それで？その紫さんが何のようだ？」

【紫】

「いえいえ、ちょっと危険かもしれない相手の下見ですわ。」

【裕也】

「なるほど、それは、ご苦勞様で。俺達は急ぎますので。」

裕也が紫の脇を通り抜けようとしたら、スキマが現れ裕也を飲み込んだ。

【裕也】

「な、に！」

裕也は穴の中に落ちた。

【ルーミア】

「おい、紫、これは如何言う意味だ？私の友をスキマに落として。訳を説明してもらうぞ。」

【紫】

「さつき言いましたわ。危険かもしれない相手の下見つて。」

【ルーミア】

「如何言う意味だ？ただの人間だろ？何を怖がる必要がある？大妖怪・八雲紫。いや、本当の意味を知らない妖怪。」

【紫】

「ふふ、中々ねルーミア。その姿を封印したのは博麗だけど、私もやつておけばよかつたかしら？」

【ルーミア】

「ふう、私はただのんびりとしていたいだけなんだがな。この意味、お前ならわかるよな

？紫。」

【紫】

「安心しなさい。直ぐに済むから。」

【ルーミア】

「分かった。ここで待ってるから早く戻せよ？」紫

【紫】

「勿論。」

紫はそう言うとスキマの中に入つて行つた。

スキマ内部

裕也は沢山の目がある空間にいた。

【裕也】

「ここが、スキマ。いや、光と闇と時空の中間か。」

【裕也】

「勝手に決めないで下さる？人間の身で、神に匹敵する力と能力を持つ裕也君。」

【裕也】

「文句なら永琳に行つてくれないか？俺はただ薬を飲んだだけだ。」

【紫】

「貴方は勘違いをしているわ。」

【裕也】

「勘違い？」

【紫】

「そ、貴方は元から持っていたのよ力を。それを薬で表側に出しただけ。」

【裕也】

「な、に？如何言う事だ。」

【紫】

「貴方、年齢は？」

【裕也】

「は？19歳だが、それが如何した。」

【紫】

「そう。」

裕也は何を言つてるんだ？と思つた。しかし、紫が話したのは目を疑う話だった。

「貴方は、ここのか、住人よ。」

【裕也】

「は？何を言つてるんだ？」

【紫】

「20年前にかなり大きな異変があつたのよ。稗田阿求が書いてる幻想郷縁起にも載つてない程の異変なのよ。」

【裕也】

「その異変他に知つてる人は？」

【紫】

「私と先代巫女の博麗琴光喜（はくれい・ことみ）と源雷光（みなもと・らいこう）だけよ。」

【裕也】

「それを如何して俺に言う？」

【紫】

「言つたでしょ？貴方はここのか住人で危険だつて。」

【裕也】

「俺の何処が危険かを聞く前にその異変の名前は？聞いても良いか？」

【紫】

「別に良いわよ？その異変は時空異変って名づけられたわ。」

【裕也】

「時空異変？」

【紫】

「ええ、一回だけ博麗大結界が破られ幻と実体の境界もあやふやになり、色々な災害が起つたのよ。時空異変はその時に起こつたの。幻と実体の境界が歪み時空の狭間が現れそこに色々な物が現世に落ちて言つたその時に一人の人間が落ちたのよ。・・・その後落ちた人間が琴光喜なのよ。」

【裕也】

「その人と俺が危険だつて言う意味は？」

【紫】

「貴方は先代巫女の子供よ。」

【裕也】

「はあ？何言つてるんだ！俺の名前は桐上裕也、確かにお母さんの顔は知らないが、苗字が違うじゃ無いか！」

【紫】

「・・・・確信して言つてるのよ。」

【裕也】

「証拠はあるのか？俺が琴光喜さんの子供だつて言う証拠。」

【紫】

「貴方の靈力よ。」

【裕也】

「靈力？」

【紫】

「そうよ、貴方の靈力が似ているのよ。」

【裕也】

「似ている靈力何て幾らでもいるじや無いか。」

【紫】

「それだけじや無いわ。貴方の能力もよ。」

【裕也】

「能力？」

【紫】

「そう。琴光喜は不思議な能力を持つていたのよ。」

【裕也】

「不思議な能力?」

【紫】

「そうよ。能力名は、能力を相手に受け継がせる程度の能力よ。」

【裕也】

「それが如何した。」

【紫】

「貴方の能力に自分の妄想を現実にする程度の能力があるわよね。」

【裕也】

「それが如何した。」

【紫】

「持っていたのよ。琴光喜も、その能力を。」

【裕也】

「な、に。だつたら、危険だつて言う証拠は?そもそも、如何して俺が危険何だ?」

【紫】

「貴方の能力よ。」

【裕也】

「能力つて自分の妄想を現実にする程度の能力か?」

【紫】

「そうよ。その能力は自分の靈力が続く限り物や者を出せるのよ。本当は反動があるから心配無いんだけど。今の貴方は反動が無しで使えるのよ。」

【裕也】

「如何言う事だ?それに、何故言つたんだ?言わなきや良かつたのに。」

【紫】

「使つた時に困らないようにな。反動が無いつて言つたでしよう?貴方は永遠亭の薬師の薬を飲んだでしょ?」

【裕也】

「正確には飲まされた、だけどな。」

【紫】

「経緯は如何でも良いの。兎に角貴方は向こう側にいて薄れてた力と靈力が戻つたのよ。しかも、貴方の靈力は先代巫女、つまり、単純靈力なら私より格段上よ。」

【裕也】

「実感が無いがな。」

【紫】

「……まで言えれば分かるわよね？」

【裕也】

「……大体は。」

【紫】

「……で質問です、今元いた場所に帰るとしたら貴方は如何しますか？」

【裕也】

「なん、だと？」

【紫】

「あら？ 戻りたく無いのかしら？ 貴方がいた場所に、貴方が住んでた場所に。」

【裕也】

「知っているのか!? 僕が如何やつて幻想郷に来たかを！」

【紫】

「勿論よ。貴方は時空から来たのよ。」

【裕也】

「時空？」

【紫】

「貴方は死んでいた筈なのよ。車に引かれてね。」

【裕也】

「は？え？な、なに？死んでいた？何言つてるんだ。俺の記憶では、学校から帰つてきて、家にいて、それから！そ、れ、か、ら、？くそ、思い出せない。」

【紫】

「如何してだか分かる？それはね、貴方が迷つた道と違う記憶があるからよ。」

【裕也】

「違う記憶？」

【紫】

「そうよ。本当の記憶は、貴方は学校が終わつて帰る途中に忘れ物をした事を思い出し、学校に戻つた。しかしそこで、信号無視の車が来て貴方を引く・・・苦だつた。」

【裕也】

「・・・それで？」

【紫】

「だが、そとはならなかつた。最初に行つたけど、貴方は先代巫女、琴光喜の子供よ。巫女は何かをする前に死んではならない。そう言う呪いがあるのよ。だから貴方は死なかつた。しかし、元は死んでいた筈なのだから世界は貴方を否定した。そこに時空の狭間が現れ、貴方をこの全てを受け入れる幻想郷に連れて来られたのよ。これが貴方が

幻想郷に来た理由よ。」

【裕也】

「……いや、ちょっと待て、紫、それはおかしい。」

【紫】

「何がかしら？」

【裕也】

「お前はこう言つた筈、「貴方を元いた場所に帰れる」と言つた筈だ、だが、お前の話を聞いていると少し変だ。」

【紫】

「あら？ 何処がかしら？」

【裕也】

「まず始めて、元いた場所に帰れるつて言う事だ。お前の話だと俺は世界に拒まれている筈なのに、どんなに強いと言つても一妖怪のお前にできる訳が無い。それともお前は世界、つまりは、因果から外れている人間を因果に戻す能力でも持つてゐるのか？ 次に二つ目、俺が琴光喜さんの子供だつて言う事だ。聞いた話だと博麗の巫女は代々妖怪退治を家業としている筈だ、琴光喜さんがあつち側に行つたら、幻想郷の元あつた因果が崩れる。だから、あり得ない。今の巫女、博麗靈夢だつけ？ が今の巫女らしいがだとし

たら、合わない事がある。それは、年齢だ。」

「年齢？」

【紫】

「そうだ、お前の話した時空異変は今から20年前。だつたら、それまでは？」

【紫】

「え？」

【裕也】

「靈夢が巫女家業に付くとしても4～5年かかる筈だつたらその間は？しかも、自覚をしたとしても戦い方が分からないと意味はない。それともお前は、靈夢は小さい頃からカンを頼りに戦つて來たとでも？確かに出来なくは無い。だが、自分より強い敵と合つたら？不慮の事故で死んだら？そんな不特定要素がある中でお前が確実性が無い中でやらせる訳が無い。よつて、俺が琴光喜さんの子供だつて言う事はあり得ない。」

【紫】

「それじやあ、貴方の記憶があやふやなのは？」

【裕也】

「99%の嘘と1%の本当。」

【紫】

「なんですか？」

【裕也】

「思考を持つ生き物は不思議な者でね、殆どの嘘に少しの本当を混ぜるとそれが本当に見えて来るんだよ？また、逆も叱り。本当の事に嘘を混ぜると胡散臭くなるんだ。だから、多分前者が正解だろ？つまりは、本当に合つたのは時空異変だけだ！どうだ、間違っているか？」

【紫】

「ふーん。だつたら、貴方の記憶が無い事は？」

【裕也】

「言つたろ？本当の嘘つまり、俺が幻想郷に来た経緯はお前の言つたとおり。正しい、『偶然』だけだな。」

【紫】

「ふう、おめでとう、と言つておこうかしら。案外頭が切れるのね。」

【裕也】

「どうも。それで？俺をここに連れて來た本当の目的は？」

【紫】

「いや、人間が神クラスの靈力を手にいれたから、どんな人間か気になつたから呼んだだけよ。」

【裕也】

「だつたら、もう良いだろ?」

【紫】

「いや、まだよ。言つた筈よ? 貴方は危険だつて。見極めなきやいけないのよ、幻想郷を守る者としてね。」

【裕也】

「だつたら如何する。」

【紫】

「ある武人が言つたわ。拳を交えれば相手がどんなのかわかると。」

【裕也】

「と、言う訳は?」

【紫】

「私と戦いなさいって意味よ。ま、私を殺さない限り出れないから良いんじや無いかしら?」

【裕也】

「如何言う意味だ？」

【紫】

「言葉どうりの意味よ。それじやあ、行くわよ。」

【裕也】

「ま、待て！」

【紫】

「待てと言われて待つ奴は馬鹿よ。」

幻巣「飛光虫ネスト」

紫は手から弾幕を出した。

【裕也】

「く、だから、待てって言つているだろうが！」

避けていた裕也だつたが、裕也の後ろからスキマが現れそこから緑色の弾幕が現れ裕
也に当たつた。

【裕也】

「が、な、に？ 後ろ、から、だと？」

【紫】

「まだまだ行くわよ！」

符の式「八雲卍傘」

紫は持っていた傘を横に投げた。その傘が卍状になつて裕也に飛んで行つた。

【裕也】

「く！」

暴風「雷雲」

風と雷が吹き卍傘を紫に吹き戻した。

【紫】

「やつぱり威力はあつち側が上か。」

紫は素早く避け次のスペルカードを使つた。

境符「色と空の境界」

スキマの中がいきなり空の色見たいに青くなつた。

【裕也】

「な、何だ？ いきなり周りが。」

【紫】

「行け。」

紫がそう言うと青と白の世界に一筋の光が裕也に向かつて行つた。

【裕也】

「！　ぐう！」

一筋の光が裕也の右腕を貫いた。

【裕也】

「つう！・いつてーつて！・またか。」

裕也は7～8本の光の筋が裕也を襲つたが裕也は感一発の所で避けた。

【裕也】

「あつぶな！」

【紫】

「油断大敵よ。」

【裕也】

「！　ぐあ、あぐ！・づう。」

左右からきた光、レーザーが左腕と左足を撃ち抜いた。裕也は立つ事が出来なくなり倒れた。

【紫】

「別に良いわよね、死んでも。だつて死んでいた筈だつたのだから。」

【裕也】

「よく、ねえよ。」

裕也は足をガクガクさせながら立つた。

【紫】

「何がかしら？ 貴方はここに来てまだ間もない筈。」

【裕也】

「それが、どう、した。」

【紫】

「なんですか？」

【裕也】

「永琳は、俺、の傷を、な、治して、くれた。紅樓夢、は、俺をしん、じて、くれた。そして、優曇華は！ 俺を友達だつて言つてくれた！ 優曇華と、約束した！」

【紫】

「約束つて何かしら？」

【裕也】

「世界中の誰とでも友達になつてやるつて！ 無理かもしれないが絶対に諦めないつて言つたんだ！ だから、諦めない絶対に！」

【紫】

「なら私を倒さなきやね。まあ、倒せたら、だけどね。でも、その体で如何するの?」

【裕也】

「手はまだある!・俺の新たな力を見せてやる!」

銃砲 「赤銃花火 (レッドジュウカスター・マイン)」

赤く光る弾丸が不規則な動きをし、爆発しながら紫を襲つた。

【紫】

「な!・これは!・あの兎の技?!いや、違う。でも、如何して!?!」

【裕也】

「俺の、能力に、あつたろ?・仲間の力を借りる程度の能力がな。俺はただそれを使つただけだ。」

【紫】

「でもあれは!・」

【裕也】

「そう、嘘偽りの無い信頼が必要だ。」

【紫】

「・・・・見た所余り信頼はしてない感じだつたけど?・」

【裕也】

「何を見ていたんだ？」

【紫】

「なんですか？」

【裕也】

「絆は時を通り越し時間を超え結ばれる。時間や、時は関係ない。絆は築いたらそこにある物だよ。」

【紫】

「理由にならないわよ？」

【裕也】

「だつたら簡単に。この能力が使えるから信じて貰ってる。これで良いか？」

【紫】

「綺麗事ね。！ つあ！あぐ！」

今まで避けていた紫だつたが油断をし当たってしまった。

【裕也】

「まだ行くぞ！」

豪氣「鬼神大発山」

裕也の腕が赤く染まつた。

【紫】

「何をするつもりかしら？」

【裕也】

「こうするんだ、よ！」

裕也は赤く染まつた手でいきなりスキマを叩きつけた。そうしたらヒビが入つた。

【紫】

「な!? 何をしたの！」

【裕也】

「見たら、分かるだろ？ スキマを、ぶち破つたんだよ。」

【紫】

「な!? そんな事が!?」

【裕也】

「どんな物にも必ず、目、があるよな?」

【紫】

「そうね。」

【裕也】

「だつたら、その”目”を壊せば良い。」

【紫】

「だとしても、如何やつて見つけたのかしら？」

【裕也】

「いや、見つけてはいない。」

【紫】

「だつたら如何して。」

【裕也】

「向こうからやつて来させただけだ。」

【紫】

「なんですつて！」

【裕也】

「さつきのスペルは”目”を見つけ自分の元に持つて来てそれを壊すスペルだ。」

【紫】

「そんな事が!?」

【裕也】

「出来無いとでも？しかも誰が決めた？誰も決めてい無いし、決められてい無い。なら、出来なくは無い、だろ？」

【紫】

「だからって、無茶苦茶ねえ。でも良いのかしら？」

【裕也】

「え？」

【紫】

「だつて、スキマと行つたつてあつちとこつちの狭間よ？スキマは向こう側と幻想郷の間にあるんだから。」

【裕也】

「つまり？」

【紫】

「つまり、このままだと何処に行くか分から無いわよ？」

【裕也】

「あ、や、ヤバイ！紫！早く元の場所に！」

【紫】

「・・・・」

【裕也】

「紫！！」

【紫】

「やーよ。」

【裕也】

「なん、だと？ ふざけるな！ お前の暇に付き合っている暇は無い！」

【紫】

「なら、如何する？ 裕也君。私を殺す？」

【裕也】

「いや、お前がそのつもりなら一緒に行つてやるよ。」

【紫】

「あら？ かつこ良いわね。でも、良いのかしら？ あの二人を頬つておいて？」

【裕也】

「お前を見つけて連れて行つて貰うからな。」

【紫】

「あらあら、凄いかつこ良いわね。でも、時間は戻せ無いわよ？」

【裕也】

「お前に弁償して貰うから。」

裕也は二カツ！ と笑った。

【紫】

「あ・・・・ふ。はあ、私の負けよ。」

【裕也】

「は、え?」

【紫】

「ここも後数分と行つた所ね。」

紫はそう言うと、スキマを開けた。

【裕也】

「これは?」

【紫】

「これに入れば戻れるわよ?」

【裕也】

「お前は如何するんだよ?」

【紫】

「私は境界の妖怪よ? しかも、ここは私が作った場所。安心しなさい。貴方を信じてあげる。さ、行きなさい。」

【裕也】

「でも。」

【紫】

「はあ、仕方が無いわね。これをあげるわよ。」

【裕也】

「これは？」

【紫】

「スペルカードよ。」

紫はそう言うとスペルカード3枚を裕也に渡した。

【裕也】

「そんな物はいらない。それより早くお前も！」

裕也は紫に手を差し出した。

【紫】

「何のつもりかしら？」

【裕也】

「言つた筈だろ！俺はどんな奴でも友達になつてやるつて！戦いが終わつたら、どんな奴でも友達だ！友達だつたら俺は絶対に諦めない！」

【紫】

「自分で作つたから大丈夫だつて言つてゐるでしよう?」

【裕也】

「だとしてもだ。友達になつたからには、一緒に行こうぜ。」

【紫】

「はあゝ分かつたわ、行きましょう。」

【裕也】

「おう。」

裕也達は中に入つた。



【優曇華】

「大丈夫でしようか?」

【ルーミア】

「大丈夫じや無かつたら、あいつに痛い目見せてやるから安心しろ。」

【紫】

「あらあら、怖いわね。」

【裕也】

「心配してくれてありがとう。」

スキマが現れ、紫と裕也が現れた。裕也は「カツ！」と笑ながら言つた。

【優曇華】

「はあ、それで？ 紫、裕也に何の話だつたの？」

【ルーミア】

「大方、力が危険だから私が確かめるー。とか、そんな感じだろ？ 紫。」

【紫】

「あら？ エスパールーミア、かしら？」

【ルーミア】

「ふざけんな、用が済んだならさつさと帰れ。」

【紫】

「おーこわ。それじやあね、裕也君。闇の妖怪に噛まれる前に帰るしますか。それじゃーねー。」

紫はそう言うとスキマに消えて行つた。

【優曇華】

「本当に大丈夫なの？」

【裕也】

「ああ、大丈夫だつたよ。さ！行こうか。長くなつたが人里へ。」

【ルーミア】

「そうだな。」

【裕也】

「でも、本当に行くのか？ルーミア？」

【ルーミア】

「ああ、その点なら大丈夫だ。人間がいるからな。」

【裕也】

「……そうだな。」

裕也達は優曇華の案内で歩いていてしばらくたつたら、大きな門が見えて来てそこに人がたつていた。

【裕也】

「あそこ？」

【優曇華】

「そうです。でも、いつもより厳重になっていますね。」

【ルーミア】

「きっと、さつきの女が何かを言つたんだろ。気にせずに行くぞ。」

【裕也】

「待つて、ルーミア。」

【ルーミア】

「何だ、裕也。」

【裕也】

「ルーミアは闇の妖怪だよな？」

【ルーミア】

「？ ああそりうだが、それが如何した？」

【裕也】

「だつたらしばらく俺の闇として影になつてくれ無いか？」

【ルーミア】

「如何してだ？」

【裕也】

「念のためだよ。お願ひできるか？」

【ルーミア】

「わかつた。友の願いだからな。」

【裕也】

「ありがとう。」

【ルーミア】

「それじゃあ。」

ルーミアはそう言うと裕也の後ろに立ち、裕也の影に溶ける様に消えて行つた。

【優曇華】

「ルーミア!?」

【ルーミア】

「（こ）にいる、静かにしろ。」

ルーミアの声は裕也の影から聞こえて來た。

【裕也】

「すごいな。」

【ルーミア】

「良いから行くぞ。」

【裕也】

「ああ。」

裕也達は門前にやつて來た。 そうしたら門の前にいた人が話しかけて來た。

「ちょっと待て。」
【裕也】

「はい？ 何でしようか？」

【??】

「お前は？」

【裕也】

「あ、始めてまし。俺の名前は裕也って言います。永遠亭にお世話になつてゐる者です。
貴方の名前は？」

【妹紅】

「あん？ 私か？ 私の名前は、藤原妹紅だ。」

【優曇華】

「久しぶりですね。妹紅さん。」

【妹紅】

「おー！ 永遠亭んとこの、兎じやないか。今日は薬か？」

【優曇華】

「ええ。でも、私の名前は優曇華です。きちんと名前で言つてください。」

【妹紅】

「ああ、すまない。所でここいらでルーミアを見なかつたかい?」

【優曇華】

「ルーミアをですか? いいえ、見ていませんが、如何かしたんですか?」

【妹紅】

「実は、ルーミアが女を襲つたらしいんだ。しかもいきなり。」

【優曇華】

「そ、うなんですか? それでその女の人は?」

【妹紅】

「ああ、こつちに。」

妹紅が女の方向に指をやると女はこちらに気づき、悲鳴を上げながら叫んだ。

【女】

「な! 何でここにいるの?! いやー!! わ、私を殺しに来たのね!! は、早くそいつらを殺してよー!!」

【妹紅】

「お、おい、落ち付けよ。な?」

【女】

「落ち付いて言われ無いわよ!! 私を殺しに来たのよ!! 貴方は何で落ち付いていられるのよ!? あなたは人里の守り人でしょ!? 人間の敵を殺しなさいよ!」

【妹紅】

「だーもー! 私は臨時だから、ちがうわ! はあ、だから落ち付けよ、な?」

【女】

「いやー! いやー! 殺して! あいつらを殺しなさいよー!」

【妹紅】

「だーかーらー! 落ち付けって言つているだろうが! 少し黙つてろ!」

「何でそんな事を言うの!? あなたは仮にも人里を守る為にいるんでしょ!? なら私を守りなさいよ!」

【妹紅】

「はあ、あのな、私は人里を“守る”のであって、お前個人は如何だつて良いんだ。しかも、そんなに心配だつたら、人里の中に入つていれば良い。人里で妖怪が人を殺したら八雲紫が何とかするんだろ? だつたら人里の中にいれば安心じや無いのか? それならお前も殺せ殺せーつて言わなくて済むだろ? なのに何でだ?」

【女】

「うつ！そ、それは……！そ、そうだ！こいつらは私を傷つけたのよ！？」

【妹紅】

「なら、逆に聞くが如何して外に出たんだ？中にいれば良い物を？」

【女】

「そ、それは！」

【裕也】

「何か、いけない事をしていたからじやないか？例えば、そこの女は借金をしていて、外で何かを取つて来たら許してやるつて、脅しか何かが合つたから外に出たんじや無いのか？」

【優曇華】

「裕也さん？無茶はし無いでくださいよ。まだ傷は治つていないんですから。」

【裕也】

「分かつてるつて。」

【妹紅】

「傷つて何だ？」

【裕也】

「ああ、こっちの話だ！気にしなくて良い。それよりおい、お前。」

〔女〕

「何よ。」

〔裕也〕

「何で喚き散らしてる?」

〔女〕

「は? な、何言つて。」

〔裕也〕

「おまえ、人間じやないな。」

〔女〕

「な! 何言つてるのよ! 私は人間よ!」

〔裕也〕

「だつたら何で人里に入らない? 何で俺らを殺したがる? そして、何で優曇華を知らない? 他にもあるぞ? 何で外に出た? まだまだあるぞ? さあ、これを如何説明する? 偽物さん。」

〔女〕

「く、は、はは、よく、分かつたな人間よ。 我の名は コトリア魔界を占める女だ。」
コトリアと言つた女は人の皮がはげ、青白い皮膚に覆われた墮天使見たいなカツコを

していた。

【裕也】

「ま、魔界？幻想郷にはそんなのもあるのか。」

【コトリア】

「だが、安心しろまだ時じやない。時がくれば私は、ふふ、はは、はつはは！だがその前にやる事があるからな。そつちを先にしないと行け無いから。厄介になりそうだつたお前を片付けて置きたかったが仕方がない。ここは引こう。だが！次に会う時は最後と思え！はつはつはつはー！」

コトリアはそう言いながら消えて行つた。

【妹紅】

「な、何て靈力だよ。私が一步も動けなかつた。・・・は！と、兎に角この事を慧音に言わ無いと！」

【裕也】

「俺たちも連れて行つてくれ！」

【妹紅】

「だ、だが。」

【裕也】

「俺たちも無関係じやないんだぞ！」

【妹紅】

「わ、わかつた。付いて来てくれ。」

【裕也】

「ああ！ありがとう！よし！行くぞ、優曇華。」

【優曇華】

「え？ は、はい。」

こうして裕也達は人里に入つて行つた。

【裕也】

「コトリアは何の為におれ達を殺そうとしたか。何を片付けようとしたか、分からぬ事だらけだが、仲間の為ならやつてやる！」

裕也はそう心に刻み走り出した。

人里での聞き込み

人里、そこは能力を持たない人間や戦いを嫌う妖怪の住む言わば楽園だ。昔は妖怪の言葉が分からず、誤解を生み出し争っていたが、妖怪の山に住むカツパ達が結集し妖怪の言葉が分かる機械を作つた。人間は妖怪の言葉が分かるようになり、妖怪にも争いを好まない者もいるんだと分かり、一部の妖怪、一部の人間で分かり合い人里は二つに別れた。妖怪を嫌う人里と妖怪と仲良く暮らす人里と。この異変は、稗田阿求の幻想郷縁記にも乗らない一部の人間と妖怪しか知らない、能力を持たない人間が人里で起こした異変を人々は人里異変と言つた。



人里の門を抜けると二つの分かれ道が現れた。

【妹紅】

「こつちだ。」

妹紅はそう言うと、右の道を進んで行つた。

「ちょっと待つて。何で二つの分かれ道があるの？」

【裕也】

「ああ、それはな？カッパが作った妖怪の言葉が分かる機械を開発してな。妖怪と仲良く暮らす事を決めた人達と妖怪が嫌いな人がいてな？それで、人里が二つに別れたんだ。」

【妹紅】

「じゃあ何で左には行かないんだ？」

【妹紅】

「左には妖怪が嫌いな人の里何だ。妖怪、半妖、半靈異質な者は断固拒否をするんだ。右は妖怪と共に暮らす事を決めた人妖の里なんだ。だから私達は左は人里、右は人妖の里と言われているんだ。」

【裕也】

「だつたら、人里の警備は？怪我や病気になつた人がいたら？」

【妹紅】

「ああ、それなら大丈夫だ。人里にも医者はいるからな。それに、外に行く道はあそこし

か無いからな。」

【裕也】

「なるほど。つまり、警備は協力をしている、と言う事だな。」

【妹紅】

「そうでも無いんだ。」

【裕也】

「？　如何言う意味だ？」

【妹紅】

「警備をしているのは、人妖の里の人達しかやつて無いの。」

【裕也】

「何故。」

【妹紅】

「……向こう曰く、妖怪がいるんだから、そっちでやれってさ。」

【裕也】

「……向こう側は能力持ちはいないのか？」

【妹紅】

「いや、居るんだが、動こうとしないんだ。」

【裕也】
「何でまた？」

【妹紅】

「それは、分からぬい。」

【裕也】

「そうか。しかし、道が長いな。まだつかないのか？」

【妹紅】

「もう少しだ。ほら、見えただろ？」

裕也の目に入ったのは、本当に妖怪と人間が仲良く話をしたり、商売をしたり、賑やかな人妖の里だった。

【裕也】

「これは凄いな。」

【優曇華】

「裕也、悪いけど私は薬を配ら無いといけ無いから、ここで。」

【裕也】

「あ、そうか、ならここで一度解散をして、夕方頃にまたここに集合はどうだ？」

【優曇華】

「分かつたわ。それじゃあまた後で。」

優曇華は薬を配りに行つた。

【裕也】

「それじゃあ案内をしてくれるか? 慧音の所に。」

【妹紅】

「分かつたわ。」

妹紅の案内で裕也は慧音がいる寺子屋に行つた。そしてしばらく歩き一つの建物に着いた。

【妹紅】

「ここが寺子屋だ。」

【裕也】

「中々でかいな。しかも、古き木材で作られた建物か。」

【妹紅】

「そうだな。それでは入るぞ。」

【裕也】

「ああ。」

裕也達は中に入った。入つて一番最初に目に入つたのは、学校と言うよりも、自宅と

言つた方が良いんじやないか？と思う間取りだつた。

【裕也】

「なんだか学校よりも、家見たいだな。」

【妹紅】

「ああ、こゝは元々慧音の家だつたんだが、慧音が寺子屋を作りたいと言つてな？それで自分の家を改造したつて訳だ。」

【裕也】

「なるほど。」

【妹紅】

「慧音ー！上がるぞー！」

妹紅がいきなり大きな声を出したら、人の声が聞こえてきた。

【??】

「ああー！上がつてくれー！」

【裕也】

「そんなに大きな声を出して大丈夫なのか？子供がいるんだろう？」

【妹紅】

「ああ、大丈夫だ。今日は休みだからな。」

【裕也】

「そうか。」

妹紅は玄関から入つてすぐの扉を開けた。そこにいたのは、水色の服を着ており、髪が腰まである綺麗な女性だった。

【??】

「珍しいな、お前がここまでくるとは、おや？ そちらの方は？」

【妹紅】

「そいつは今説明をする。実はな ――――」

妹紅は慧音に説明をし始めた。裕也の事、それからコトリアの事も話した。

【??】

「なるほど、そんな事が。おつと、忘れる所だつた。裕也君と言つたな？」

【裕也】

「それが、どうかしたか？」

【??】

「いや、なに。自己紹介だよ。」

【裕也】

「自己紹介？」

【慧音】

「ああ！妹紅から話は聞いてるだろうがケジメとしてな。」

【裕也】

「分かった。俺の名前は桐上裕也だ。今は永遠亭に世話になつてる。」

【慧音】

「私の名は、上白沢慧音だ、よろしく。」

【裕也】

「ああ、よろしく。」

【妹紅】

「それで如何する慧音？」

【慧音】

「そうだな。うーむ。」

【裕也】

「？ 如何してそんなに悩むんだ？」

【慧音】

「この人里の事は聞いたな？」

【裕也】

「ああ、二つに別れているつて。」

【慧音】

「そうなんだよ。しかもこっちの事はコマ程度にしか思っていないみたいでな？中々連携を取れないんだ。」

【妹紅】

「な!? そんな話始めて聞いたぞ！」

【慧音】

「当たり前だ。私も昨日知つたばかりなんだから。」

【裕也】

「誰がそんな事を？」

【慧音】

「寺子屋に来てくれる子供達がな話していたんだって。私に聞いて来たよ。コマつてなんだってね。」

【妹紅】

「ふむ、誰がそんな事を子供達に行つたんだ慧音？何か聞いてるんだろう？」

【慧音】

「私も聞いたさ。だが、分かつたのは、私位の背をしている女性だけなんだ。服装や髪型

はフードに隠れて見えなかつたらしい。」

【妹紅】

「怪しいなそいつ。その話も嘘かもしけ無いぞ?」

【慧音】

「しかし、嘘じやないかもしぬれない。行つて見無いと分からんんだ。」

【妹紅】

「そうだな。さて、如何するか。」

【裕也】

「だつたら、俺が行つてこようか?」

【慧音】

「裕也君がか?」

【裕也】

「ああ、気になるしな。」

【妹紅】

「如何する? 慧音。」

【慧音】

「うーむ。・・・分かつた。よろしく頼む。」

【妹紅】

「良いのか？」

【慧音】

「良いさ、裕也君は妹紅を助けてくれたんだろう？ だつたら、私はそれだけで信用できる。」

【裕也】

「どうしてそれだけで。」

【慧音】

「言つたでしょ？ 妹紅は私の友人だつて。信頼している人を助けたんだもの、私は信用する。」

【裕也】

「……分かつた。俺も本気で慧音を信頼する。だから、安心して任せてくれ。」

【慧音】

「妹紅もそれでいい？」

【妹紅】

「私を信頼されてる慧音が信頼したなら私は断わる理由はないぜ。」

【裕也】

「それじやあ、妹紅。案内をお願い出来るか?」

【妹紅】

「ああ、分かった。それじやあ、慧音、彼奴の件は頼んだ。」

【慧音】

「ああ、コトリアの事か。分かった私の方からも何かないか聞いてくる。」

【妹紅】

「お願ひ。」

【慧音】

「分かつた。あ、そうだ、裕也君。」

【裕也】

「裕也でいい。それから何だ慧音?」

【慧音】

「まだ幻想郷の事はよく知ら無いだろう?だから、人里に行くなら付いでに稗田阿求に会いに行くと良い。あそこには幻想郷縁起と言う幻想郷の歴史が載つてある本があるから、色々分かるだろう。」

【裕也】

「分かった。訪ねてみるよ。ありがとう。」

【慧音】

「ああ、気をつけて行つて来なさい。妹紅も気をつけて。」

【妹紅】

「ああ、分かつてるさ。」

【裕也】

「よし、行くか。」

裕也達は寺子屋を出た。そして、入り口に戻つた。

【裕也】

「此処までで良い。」

【妹紅】

「何故だ。道が分からぬいだろう。」

【裕也】

「道なら大丈夫だ。来た道を戻り分かれ道があつた場所の通つた反対側に行けば良い。それよりも優曇華に伝えておいてくれ無いか?人里に用事で言つてゐるつて。心配するかもしけ無いから、お願ひ出来るか。それから、遅くなつたら、この近くに止まるから帰つて永琳に伝えておいてくれつて事を伝えて欲しい。」

【妹紅】

「・・・・分かつた。気をつけろよ？あそこは妖怪と仲良くした人間も嫌うからな。」

【裕也】

「ああ、分かつた。」

裕也はそう言うと、妹紅と別れ、道を進んで行つた。分かれ道を通つて人里の前に着いた。

【裕也】

「ここが人里か。」

裕也は人里に着いた。そして、中に入ろうとした瞬間。いきなり刃物が裕也の首筋を通り抜けて行つた。

【裕也】

「何だ？たつく、危ないじやないか。なあ、ナイフを投げたお嬢さん。」

裕也はそう言いながら、人里の中に入る女性に言つた。現代風の服装をし、髪が短い女性だつた。

【??】

「妖！如何やつて此処までで着いた！」

【裕也】

「はあ？お前は何を言つてゐるんだ？俺は人間だ。紛れもなくな。」

[??]

「なら証拠を見せろ！」

【裕也】

「分かりましたよ。お嬢さん。」

【鼓動】

「お嬢さん言うな！私には鼓動鳴海（こどうなるみ）と言う名前があるんだ！」

【裕也】

「そうか、そいつは悪かつたな。」

【鼓動】

「私の名前は如何だつて良いの！それより、お前が妖じや無い証拠を見せろつて言つて
いるんだ！」

【裕也】

「やれやれ、幻想郷の女性は皆男勝りなのか？おつと、証拠だつたな。」

【鼓動】

「ああ、そうだ。」

【裕也】

「妖怪は傷を負つても直ぐに治るよな？」

【鼓動】

「それが如何した。」

【裕也】

「だから、こうするんだよ！」

裕也は壁に刺さっていたナイフを抜き、自身の腕に傷を付けた。傷口から、血が溢れ出ていた。

【鼓動】

「な!? お前は馬鹿か！自分で腕を切るなんて！」

【裕也】

「はあ、腕に傷が付いて血が流れているだけだろ？ こんなのは、此処を出たらしょっちゅうだ。それより、これで信じてくれたか？」

【鼓動】

「分かったよ、信じるよ。それで、人里に何のようだ。」

裕也は腕の治療をしながら話した。

【裕也】

「ああ、風の噂でここに、幻想郷中の事を書き記している、稗田阿求がいるつて聞いたんだが。」

【鼓動】

「如何して阿求さんに？」

【裕也】

「俺は、外来人なんだ。紫に連れてこられたな。」

【鼓動】

「貴方も紫様に連れて来て貰つたの。」

【裕也】

「（何だ？ いきなり態度と口調が変わった？ しかも、此処の人達は妖怪を憎んでいる筈。なのに紫様。如何言う事だ？ … 聞いてみるか。）此処の人達は妖怪を憎んでいるって聞いたんだが、如何して紫の事は様つて付けるんだ？」

【鼓動】

「此処にいる人達は外来人が多いのよ。私達が如何して紫様つて付けるか、だつて、こんな素敵なか所に連れて来てくれたんですもの。」

【裕也】

「素敵なか所？」

【鼓動】

「貴方も外来人なら分かるでしよう？ 今の日本は堕落している。地球温暖化、株価の暴

落、イジメ問題、色々な、事が合つたわ。しかも、それに仕事、勉強、重圧もかなり来ていた。そんな所に紫様がここ、幻想郷に連れて来てくれたんですよ！重圧も勉強も、何にも考えなくていい！まさに理想郷！」

【裕也】

「だから、紫の事は様付なんだな。」

【鼓動】

「ええ、そうよ。」

【裕也】

「なら、何で妖怪を嫌うんだ？お前らを連れて來た紫も妖怪何だぞ？それなのに何故？」

【鼓動】

「何故つて妖怪は私達人間を襲うわ。私達人間が減るじやない。」

【裕也】

「・・・お前は、人里の外に出た事があるか？人妖の里に行つた事があるか？」

【鼓動】

「は？行つた事はないわよ。だつて、行つては行けない場所として、規則があるんだもの。」

【裕也】

「規則、だと？」

【鼓動】

「ええ、そうよ。規則一・人里に出ては行け無い。規則二・人妖の里には行かない。規則三・人妖の里の住人には関わってはならない。規則四・争い事を行つてはならない。規則五・むやみに感情を表に出しては行け無い。その他にも沢山。」

【裕也】

「それを提案したのは?」

【鼓動】

「(この)リーダーよ。」

【裕也】

「リーダー?」

【鼓動】

「ええ、二つの里になつた時に纏めるリーダーを決めたのよ。今の規則はそのリーダーが決めたのよ。」

【裕也】

「どうか。だつたら、そのリーダーの所に案内してくれ。」

【鼓動】

「え、何で?」

【裕也】

「ちょっと、用事が出来てな。」

【鼓動】

「会えたとしても貴方じや無理よ。」

【裕也】

「如何してだ?」

【鼓動】

「だつて、貴方弱そうじやない。しかも、リーダーは能力持ちよ、貴方が勝てる訳が無い。」

【裕也】

「どんな能力だ?」

【鼓動】

「私は知ら無いわ。ただ、何故か逆らえないらしいわ。」

【裕也】

「逆らえない?」

【鼓動】

「ええ、何人かの人人がリーダーに挑んだけど、誰一人として攻撃が出来なかつたの。その訳を聞いたたら、リーダーに立ち向かつたら体が動かなくなり、何故か逆らえなくなり、土下座までしたんですつて。」

【裕也】

「一体どんな能力なんだ。・・・・所で、リーダーの名前は?」

【鼓動】

「そういえばまだだつたわね。リーダーの名前は、剣味麟（けんみ・りん）よ。」

【裕也】

「剣味か、変な名前だな。」

【鼓動】

「そう? それより会つて如何するの。」

【裕也】

「二つの里を一つにする。」

【鼓動】

「はあ? あんたなに言つてるの。そんな事出来る訳無いじゃない。」

【裕也】

「だから諦めるのか?」

【鼓動】

「え？」

【裕也】

「出来ないからと言つて諦めるのか？お前は、自由に外に出て見たいと思わなかつたのか？もう一つの人里は、どんな所かつて思わなかつたのか？行つて見たいとは思わなかつたのか？」

【鼓動】

「で、でも。」

【裕也】

「自分を誤魔化すな！俺が聞いてるのはお前の本心だ！」

【鼓動】

「！」

【裕也】

「気になら無いならそれでも良い。だが、そんなんじや駄目だろ？自分に正直に。俺はただ、お前は如何思つているかを聞いているんだ。ただ、それだけ。だから、誤魔化さ無いで正直に答えて。鼓動は気にならないのか？もう一つの人里の事。」

【鼓動】

「・・・・き、 気に。」

【裕也】

「ん？」

【鼓動】

「気になつてゐに決まつてゐじやない！ 私はまだ一度も人里を出た事がない。そりやあ、気になるわよ！ 当然じや無い！ でも！ だけど！ 彼奴がいるから、剣味がいるから無理なのよ！ 何で、出会つて数分の男に説教をされなきやいけないのよ！ わつけわかんない！」

【裕也】

「言えるじやないか。」

【鼓動】

「え？」

【裕也】

「どうだ？ スッキリしただろ？」

【鼓動】

「え、 は、 あ？」

【裕也】

「ははは、言葉に出来ないみたいだね。鼓動、君は死んだ魚の様な目をしていた。つまらなさそうに喋っていた。そして、どうでもいい様な顔をしていた。全てがつまらない様な顔をしていたんだぞ？」

【鼓動】

「・・・・・」

【裕也】

「だけど、今は違う。怒っているけど、さつきまでの顔じやない。何だか生き生きしている。多分此処にいる人達は皆同じ顔をしているだろう。だから、俺は剣味に会つて話をしたいんだ。たとえバトルになつても、たとえ勝てなくとも。」

【鼓動】

「何でそこまで。」

【裕也】

「さあな、ただ、俺がしたいと思ったからやるんだ。自分で決めて自分でやりたいと思つた方をする。まあ、約束もあるけどそれが俺がお節介を焼く理由だ。」

【鼓動】

「あ・・・・・はは、面白いわね。良いわ、案内してあげる。」

【裕也】

「ああ、よろしく頼む。」

リーダーと裕也

【裕也】

「まだか？」

【鼓動】

「もうじきよ。」

鼓動は、スタスターと歩いて行つた。

【鼓動】

「うううよ。」

【裕也】

「これは、凄いな。」

裕也の目に入ったのは和風の大きい屋敷だつた。

【裕也】

「ふむ、ここが剣味の家か。でかいな。」

【鼓動】

「いや、ここは元々阿求さんの屋敷だつたんだ。」

【裕也】

「阿求さん？」

【鼓動】

「ああ、ここは稗田阿求さんと言う人の家だつたんだが、剣味さんが譲つてくれつて言ったそつだ。」

【裕也】

「そうなのか？」

【鼓動】

「ええ。」

【裕也】

「その阿求つて人はこの屋敷を明け渡したのか？それとも、無理矢理に言い寄つたのか？」

【鼓動】

「そこまでは。」

【裕也】

「そう。だつたら、剣味の家に行く前に阿求の家に連れて行つてくれないか？」

鼓動は少し不思議そうな顔をしながらこう答えた。

【鼓動】

「どうして。」

それに裕也は少し考えてから答えた。

【裕也】

「ちょっと確認を。それから、阿求の家に案内してくれたら、もう、案内は要ら無いぞ。道を覚えているから大丈夫。」

【鼓動】

「そう。」

阿求の家は元の屋敷から少し進んだ道を右に進み次に左に進んだ所に合った。家は普通の家より一回り小さい家で人がせいぜい2～3人位しか入れない様な家をしていた。

【裕也】

「凄い違ひだな。」

【鼓動】

「そうね。」

【裕也】

「それじゃあ、鼓動。今まで有難う。ここで、お別れだな。」

【鼓動】

「いいえ？まだ終わりじゃないわよ？」

裕也は少し眉を潜めながら答えた。

【裕也】

「如何言う、意味だ？」

【鼓動】

「それは、私も付いて行くつて意味です。」

【裕也】

「如何してだ？」

素直に驚いた裕也が訳を聞くと鼓動は何かを決意した様な顔をして答えた。

【鼓動】

「貴方が剣味に如何言うかを気になつてね。」

裕也は少し驚いた表情をしたが直ぐに笑ながらこう答えた。

【裕也】

「物好きだな。」

【鼓動】

「褒め言葉として受け取つておくわ。」

【裕也】

「それじゃあ、行くか。」

【鼓動】

「ええ。」

裕也達は備え付けられていた、インターほんを押した。

【裕也】

「すいません！誰かいませんか？」

【??】

「はい？どなたでしようか？」

ガラガラと音をさせながら一人の少女がそこにいた。

【裕也】

「俺は、桐上裕也って言うんだけど。悪いんだけど稗田阿求さんって人はいるかな？いたら、呼んで欲しいんだけど。いいかな？」

裕也は笑顔で答えた。

【阿求】

「あ、は、はい。私が阿求です。」//

阿求は頬を赤らめて答えた。それに鼓動は心の中でこう思った。

【鼓動】

「（もしや、ロリコン！・・・言わ無いでおこう。）」

と思つた鼓動であつた。裕也は少し驚いた表情をして答えた。

【裕也】

「？」
君が？」

【阿求】

「ええ。そうです。」

【裕也】

「君に用があるんだけど、いいかな？」

裕也がそう言うと照れていた顔がキリツとなり、裕也を睨む様に聞いた。

【阿求】

「何の用ですか？」

【裕也】

「・・・」

阿求の問い合わせに裕也は答えなかつた。

【阿求】

「何の用かを聞いているんですよ。もしや、剣味の仲間ですか？」

【鼓動】

「違う！私達は！ゆ、裕也！？」

裕也は剣味の一昧じや無いと、言おうとしたが、裕也が止めた。鼓動は驚いた様子で裕也を見ていた。

【裕也】

「少し、静かに。・・・君は、如何思う？」

【阿求】

「え？」

【裕也】

「君が決めればいい。自分で、こいつはどうちなのかを、決めればいい。」

それに鼓動は激怒して声を荒げながら答えた。

【鼓動】

「あんたは自分が疑われて悔しく無いの！？こんな子供に言われて悔しく無いの！」

裕也は涼しい顔をしながら答えた。

【裕也】

「さあな。」

【鼓動】

「なん、ですって？」

【裕也】

「人間は見た目で判断する。それは変わり様の無い事実だ。そして、認めて貰うのはこれからの行動で決まる。それなのに騒いでも意味無いだろ？だから、俺は聞いているんだ。阿求、もし、俺が仲間だと思うなら玄関を閉めろ。でもそうじや無いなら、俺達を入れてくれ。」

阿求は少し驚き、そして、考えた。阿求は、こう答えた。

【阿求】

「……ふう。酷い人ですね。」

阿求はそう言うと玄関を開けた。それに裕也は、笑ながらこう言つた。

【裕也】

「よく言われるよ。」

【阿求】

「それではどうぞ、中に入つて下さい。」

【裕也】

「ああ。」

中に入ろうとした裕也を鼓動は引き止めこう答えた。

【鼓動】

「裕也、ちょっと待て。」

裕也は喜んでいる顔をしながら答えた。

【裕也】

「名前で呼んでくれたな。しかも、庇つてくれて有難う。」

鼓動は不意打ちを受け頬を赤らめ恥ずかしながら答えた。

【鼓動】

「お、お前が疑わると私も疑われるからな！か、勘違いするなよ！て！そんな事より。」

鼓動は気持ちを落ちつかせ裕也にこう答えた。

【鼓動】

「信じて貰えなかつた時は如何するつもりだつたんだ。」

その言葉に裕也は和やかな笑顔でこう答えた。

【裕也】

「どうも。ただ、そのまま剣味の所に行つてただろうな。」

鼓動は呆れた顔をしながらこう答えた。

【鼓動】

「まあ、いいわ。行きましょう。」

【裕也】

「ああ。」

そうして、裕也と鼓動は阿求に連れられて中に入つた。中は本だらけで、足の踏み場が程んどなかつた。

【裕也】

「これは、凄いな。」

【鼓動】

「きたない。」

【阿求】

「う！そ、そんなはつきり言わなくたつていいじやない。それより、私に何か用ですか？」

阿求は誤魔化す為に早口で言つた。それに裕也はこう答えた。

【裕也】

「单刀直入に聞く。お前は剣味の事を、どう思つている？家を奪われた身として。如何だ？」

【阿求】

「ちょ、直入ですね。あつて間もないのに。」

そんな阿求の事をスルーした。

【裕也】

「それで、如何だ？」

【阿求】

「ふう。まあ、他人の貴方なら大丈夫でしよう。正直に言うと、嫌だな。とは思つていま
す。私の家を奪われましたし。無駄な決まり事をし過ぎる。正直私はあまり好きじや
無いです。」

【裕也】

「それは、住んでいる人達が思つて いる事か？」

【阿求】

「多分 そうです。」

【裕也】

「そうか。・・・ そ う だ、なあ、阿求。」

【阿求】

「なんですか？ 裕也さん。」

【裕也】

「よければ、幻想郷縁起を見せて貰えませんか？」

阿求は少し驚いきながら答えた。

【阿求】

「どこでその事を?」

【裕也】

「寺子屋をしている慧音と言う人に聞いたんだ。」

【阿求】

「慧音さんにですか? それなら貴方に貸しましょう。」

裕也は驚いた。慧音の話を聞いた限りではとても大事な物だと聞いていただけあって驚いた。裕也は貸してくれる訳を阿求に聞いた。

【裕也】

「だが大事な物なんだろ? いいのか。」

【阿求】

「ええ、私は九代目阿礼乙女で稗田家当主。 ですので、今私が書いている物以外の8本あるんですよ。 それらを貸して上げます。」

【裕也】

「本当に良いのか?」

【阿求】

「ええ。裕也さんは何かをするつもりでしようから。それに、本は人に読まれる為に書く物。だから、良いんです。」

【裕也】

「……分かった。ありがたく貸してもらう。」

裕也は本を阿求から貸してもらつた。ついでに本を入れる袋も貰つた。

【阿求】

「直ぐに行くのですか？」

【裕也】

「いや、阿求。剣味の持ち物や、剣味に凄く長く一緒にいた物か人はいるか？ いたなら貸して欲しいんだが。」

阿求は不思議に思いながらこう答えた。

【阿求】

「一応ありますけど。」

阿求は一つの札を取り出した。

【裕也】

「これは？」

【阿求】

「剣味が持つていた物です。剣味に挑んだ人が持ち帰りました。」

【裕也】

「どうか。なら、それを貸してくれないか?」

【阿求】

「どうぞ。しかし、如何するんですか?」

【裕也】

「俺の能力は、色々な声を聞ける程度の能力だ。無機物から、妖怪までな。この能力を使つて剣味を調べる。」

【阿求】

「便利な能力ですね。」

【裕也】

「ああ、それから、静かにしてくれ。集中したいから。」

【阿求】

「はい。」

【鼓動】

「分かった。」

裕也は机に手を乗せて目を瞑った。すると、ピリピリと張つた感じの空気になつた。

【裕也】

「（俺の名前は裕也って言うんだ。お前は？）」

（私は、札と言います。私の言葉が聞こえるのですか？）

【裕也】

「（ああ。俺の能力でな。それで、剣味の能力とかは知っているのか？）

（知っています。ですが。）

札は続きを言おうとしたが、裕也は急いでいたのか、答えを待たずに先に進めた。

【裕也】

「（よければ教えてくれないか？俺はあいつを止めなくてはならないからな。）」

（如何して？貴方は他人。関係ないはずなのに。何で？）

【裕也】

「（さあな。だが、皆があいつ。剣味のせいで困っている。俺の友達もな。だから、剣味を止める。それで、剣味の能力はなんだ。）」

（ふふ。貴方は素直ね。でも、ごめんなさい。）

【裕也】

「（如何言う事だ。）」

（剣味さんは能力は持っていないの。）

【裕也】

「(は? 如何言う意味だ。剣味と戦つた人達はいきなり土下座をしたって聞いたぞ? 何かの能力を持つていてるからじや無いのか?)」

(剣味さんはある機械を使つていてるの。)

【裕也】

「(機械?)」

(そうです。)

【裕也】

「(その機械は何なんだ?)」

(機械の名前は、誘導催眠と言います。)

【裕也】

「(誘導催眠?)」

(催眠術は知っていますか?)

【裕也】

「(ああ、知つている。)」

(その機械は催眠術を発して相手を目が覚めている状態で操るんです。だから、能力を使つていてる様に見えたんでしよう。)

【裕也】

「（そうか。なるほどな。）」

（他には聞きたい事はありませんか？）

【裕也】

「いや、特には。」

（そうですか。それでは、お元気で。）

【裕也】

「（ああ。）」

裕也はゆっくり目を開いた。すると、ピリピリと張り詰めていた空気が普通の空気に戻った。

【裕也】

「鼓動。どれ位の時間が経つたんだ？」

【鼓動】

「約10分～15分って所よ。」

【裕也】

「そうか。」

阿求は結果を聞いてきた。

【阿求】

「如何でしたか、何か分かりましたか?」

【裕也】

「ああ。」

【阿求】

「そうですか。」

阿求がどんな話をしたかを裕也から聞こうとした時、ドンツー！と激しい音と共に一人の男が転がりながらやつてきた。

【村人A】

「阿求様！大変です！」

【阿求】

「何事ですか！」

【村人A】

「は、反乱です。博麗の巫女を味方に付けたこの里の殆どの人が剣味に向かつて行つて

います。」

【裕也】

「何だと!? 阿求！鼓動！行くぞ！」

【阿求】

「うえ！ 私もですか！」

【裕也】

「当たり前だ！ これは、人里の問題！ 仮にも、当主とついている奴が行かなくてどうする！ 戦えなくとも何か出来る筈！ それをただ能力がない。力が無いってだけでそれを理由に言い訳をするな！」

【阿求】

「！ 私は．．． 分かりました！ 行きましょう！」

【裕也】

「よし！ 案内してくれ！」

【村人A】

「わ、分かりました。」

裕也達は、村人の案内で人里の広場についた。そこにいたのは、大量の村人とそれに囲まれている、何故か脇が空いた巫女服をきた少女と、これまた何故か髪に何かの機械を取り付けている男がそこにいた。

【剣味】

「これはこれは、博麗の巫女様じや無いですか。何か御用で？」

【靈夢】

「単刀直入に言うわ。あんたリーダーを辞めなさい。」

睨みながら靈夢は言っているが剣味は余裕の様子でいた。

【剣味】

「嫌ですね。私はこの村人にやつてくれと頼まれたからやつているんです。それを今更。しかも、私が辞めたら誰が人里を仕切ると言うのです？」

【靈夢】

「そんなの知った事じやあ無いわ。私はただ、あんたを懲らしめてリーダーを辞めさせてくれつて頼まれたからやつているだけであつて、後の事は知ら無いわよ。」

【剣味】

「おやおや、何とも自分勝手な。大方お金に目が眩んだんでしょう？」

【靈夢】

「ぐ！ 痛い所を付くわね。」

【剣味】

「ふふ、やはりそうでしたか。ならばこちらはその5倍出しましよう。それで、私の味方になりますんか？」

【靈夢】

「あら？ 中々話がわかるじや無いの。でも、遠慮しておくわ。私はそんなに安い女じやないの。」

【剣味】

「おやおや、それは残念ですね。それなら、私の操り人形にして上げます！」

剣味が懐から取り出したボタンを押そうとした時、大きな声が聞こえてきた。

【裕也】

「ちょっと待つた!!」

裕也は村人を搔き分けて靈夢達の場所に向かった。勿論、鼓動と阿求も一緒だ。

【剣味】

「おや、貴方方は、阿求さんと鼓動さんじやありませんか。それと、そこの男。貴方の名前は？ 見かけない顔ですが？」

【裕也】

「俺の名前は如何だつていい。それより、お前はさつき言つたよな？ 私が辞めたら誰がリーダーをするんだつて。」

【剣味】

「ええ、言いましたよ？ 貴方は何か当てがあるのですか？」

【裕也】

「いや、ない。」

【剣味】

「だつたら私がリーダーでも良いではありませんか？」

【裕也】

「それも違う！そもそも何故リーダー何て決める必要がある！この人里は誰かに決めてもらわなければ、外にも出られないと言うのか！違うだろ!?人間は自分で考えて、自分で行動する。そして、自分で決める。何でその当たり前な行動を他人に任す必要があるんだ！お前たちはリーダーが今日は一口も食べるなと言つたらそれに従うのか？違うだろ！今日子供を産めと言われたら直ぐに出来るのか？違うだろ！リーダーになつて貰うつて事は自分で考えて行動する可能性を捨てているとおんなじだ！だから、自分達が決めたにも関わらず、自分達が住みづらくなつたら、リーダーのせいにして、そして、潰す。そんなのはお前等のエゴだ！違うつて言うなら異論をだせ！無かつたら、心に止めろ。そして、心に刻め！お前等のせいで剣味はこんな風になつてしまつたと！そして、これからは変わると誓え！だつて、人里も人妖の里も一つなんだから。」

村人は裕也の言葉に言い返す事が出来なかつた。一人を除いて。

【剣味】

「ふざけんなよ。ふつざけんなよ!!何だよ今更！もう遅いよ！ああ！ムカつくムカつく

「ムカつく！もう良い、こんな里はもう崩れる。」
剣味はそう言うと、催眠装置のボタンを押した。すると、靈夢がいきなり里を壊し始めた。

【靈夢】

「なん、なの。から、だが、勝手に。」

【裕也】

「皆逃げろ!! 精霊は今操られている! 何をするか分からぬ! 僕が引き付けるだから、お前等は逃げろ!」

裕也の言葉に村人は一斉に逃げ出した。

【裕也】

「阿求! お前は皆をもう一つの人里に誘導してくれ! 鼓動! お前は、もう一つの人里に付いたらこの事を慧音と妹紅に伝えろ! それまでは何とか持ちこたえる!」

【阿求】

「……分かりました! 信じていますからね?」

【裕也】

「ああ、そつちを頼む。」

【鼓動】

「氣をつけるよ？」

裕也は笑ながら答えた。

【裕也】

「ああ！勿論だ！だが、早めに頼む。」

鼓動と阿求はそれぞれの役目をなす為に走つて行つた。一人残された裕也は笑ながら答えた。

【裕也】

「あーくそ！巫女様が相手か。こりやあ、少し本気を出さなきやな。」

★

もう一つの人里。寺子屋内部

慧音はコトリアの事を必死に調べていた。そんな時物凄い勢いで妹紅が寺子屋に入つて行つた。

【妹紅】

「慧音！大変だ！」

【慧音】

「如何した妹紅？」

【妹紅】

「人里の連中が大勢でやつてきたんだ！」

【慧音】

「何だと!?」

妹紅は慧音を連れて入り口に行つた。そこには大量の人が群がつていて、凄い状況だつた。

【慧音】

「一体これは。」

戸惑う慧音に一つの声が聞こえてきた。

【阿求】

「慧音さん。こっちです。」

少し空いている場所をみると阿求がそこにいた。慧音と妹紅は訳を聞く為に阿求の元へ行つた。

【慧音】

「阿求殿！如何してここに？」

【鼓動】

「私が説明するわ！」

【慧音】

「彼女は？」

【阿求】

「鼓動さんと言います。」

【鼓動】

「今はそんな事を言つて いる場合じやないの！私の話を聞いて！」



鼓動説明中・・・



【慧音】

「なるほど、話は大体分かつた。妹紅！裕也君の所に言つてくれ。私は皆の誘導する。」

【妹紅】

「分かつた！それじゃあまた後でね。慧音。」

【慧音】

「ああ！妹紅もな。」

妹紅は空を飛び全力で飛んだ。一刻も早く裕也の所に行く為に。

「newpage」

【妹紅】

「何だ、これは。」

妹紅は驚愕した。家は焼け地面が剥き出しになっていたのだから。呆然としている妹紅の耳にズドン！と大きな爆発の音が聞こえた。妹紅は、はっ！と自分の役目を思い出し、爆発のあつた場所に飛んで行つた。そこで見たのは、裕也がボロボロの姿で靈夢の前にたつていた光景だつた。

【裕也】

「はあ、はあ、はあ、ん？ああ、妹紅。きててくれたか。」

【妹紅】

「靈夢！お前一体何を！」

【靈夢】

「にげ、て。」

【靈符】

「夢想封印 散」

札と陰陽玉が散会し、裕也と妹紅に向かつて襲つてきた。

裕也

「く！こつちだ！」

暴風
「雷雲」

嵐の様な風が吹き荒れ、靈夢のスペルカードを全て巻き上げ雷で技を潰した。

妹紅

すげ！」

妹紅は裕也のスペルカードに暫し心を奪われた。何故なら透明な風に雷が反射して幻想的な物だったからだ。

裕也

妹紅！油断をするな！」

裕也の怒涛に妹紅の意識は戻された。だが、直ぐ目の前に針が妹紅の足に当たつた。

妹紅

「づう！く！私とした事が。」

裕也

妹紅！大丈夫か！

妹紅

「大丈夫だ。」

妹紅はそう言うと、足に刺さっていた針が抜け傷口が塞がつていつた。

【裕也】

「よし！妹紅！こつちに！」

【妹紅】

「！」
分かつた。」

【裕也】

「よし！もう一回だ！」

暴風
【雷雲】

裕也がスペルカードを使うと裕也達に風が包み込んだ。

【妹紅】

「な！こんな事をしたら!?」

雷が襲うと妹紅が言おうとしたら、雷が裕也達を避けていた。

【妹紅】

「これは、一体？」

【裕也】

「このスペルカードは本来この為に使う為に作ったんだ。」

【妹紅】

「だつて、さつきは。」

【裕也】

「このスペルカードは攻防両方で使えるんだ。」

【妹紅】

「良く考えたな。」

【裕也】

「それより、靈夢の足止めは出来るか？倒さなくて良いから、それと、なるべく傷つけない様にしてくれ。靈夢は操られているだけなんだ。」
裕也の言葉に妹紅は少し悩んだがこう答えた。

【妹紅】

「……わかつた。任せておけ。」

【裕也】

「ありがとう。さあ！行くぞ！」



【剣味】

「靈夢！何をしているんですか！早く破りなさい！」

【靈夢】

「く、そ。」

靈符 「夢想封印 集」

周りの陰陽玉が一ヶ所に集まり、大きな陰陽玉が裕也のスペルカードに向かつて襲つてきた。すると、靈夢のスペルカードが裕也のスペルカードを相殺した。

不死 「火の鳥 — 鳳翼天翔」

裕也のスペルカードが相殺された瞬間に火に包まれた妹紅が空を飛び、太陽を背に靈夢に向かつて蹴りを食らわせた。しかし、靈夢はその蹴りを受け流した。

【妹紅】

「ち！ 筈したか。」

【剣味】

「なにしている！ さつさとし止めなさい！」

妹紅は裕也から離れて行つた。靈夢は妹紅を追う為に靈夢も離れて行つた。

【裕也】

「今だ！ 終わるのはお前だ！ 妹紅！ お前の力、借りるぞ！」

拳技 「青の鳥 — 鳳凰襲来拳」

裕也の拳が青い炎に包まれ、せいけんづきを剣味に繰り出した。すると、青い鳥が剣

味を包み込み剣味の体は吹つ飛んだ。

【剣味】

「ぐがああああ！」

剣味は瓦礫に当たり止まつた。バリンと音と共に機械が止まつた。



裕也達から少し離れていた妹紅達の戦いも終わりに近づいていた。

【妹紅】

「はあ、はあ、中々やるな靈夢！本気で行くぞ！」

【靈夢】

「！（体が動く！さて、妹紅には仕返しをしなくちゃね。）」

妹紅が放つた弾幕を避けながら靈夢は妹紅の後ろに張り付いた。

【妹紅】

「く！しまつた！は、話せ！」

妹紅がそう言うと靈夢はもつと強く妹紅を締め付けていた。その靈夢の顔はニヤニヤしていた。

【靈夢】

「や、だ・落ちろや！妹紅！」

【妹紅】

「ちょ！ま！靈夢！ま、まで、早まるな！あ、ああああ！」

靈夢は回転しながら地面に近づきつく瞬間に手を離した。妹紅は回転しながら地面に激突した。

【妹紅】

「ぐ！いたた。おい！靈夢！お前弾幕で戦えよ！何だよさつきのは！」

【靈夢】

「いや〜ゴメンゴメン。何か悔しくて、つい。」

【妹紅】

「ついつてお前な。はあ、話せるつて事は向こう側は終わつたつて意味か。」

【靈夢】

「そうね。行きましょうか。」

【妹紅】

「ああ。」

妹紅達は、裕也のいた場所に戻つて行つた。

【妹紅】

「おーい。裕也ー！」

【裕也】

「ん？妹紅か。それに、靈夢だっけ？無事だつたんだな。」

【靈夢】

「礼は言わないわよ。」

【裕也】

「いいさ、別に。お礼を言つてもらう為にやつたわけじや無いからな。」

【靈夢】

「あつそ。」

【妹紅】

「それで？剣味は？」

【裕也】

「あそこだ。」

瓦礫にボロボロになつてゐる剣味の姿があつた。

【靈夢】

「死んでるの？」

【裕也】

「いや、死んでいない。そろそろ起きたらどうだ。剣味。」

【剣味】

「げほ、げほ。はあ、はあ。くそ！おい！誰か、誰かいないのか！おい！」

【靈夢】

「さーてど。私をこき使つた仕返しをしないとね。」

靈夢は嬉しそうな顔をしながら手を鳴らし剣味に近づいた。

【剣味】

「ひ！だ、誰か！た、助け、助けて！ま、まだ、死に、死にたくない！」

裕也はニヤッと笑ながら靈夢に向かつてこう言つた。

【裕也】

「うわー神社の巫女つてそんな事をするんだー。これは、博麗神社に行かない方がいいなー。」

裕也はかなりの棒読みで答えた。

【靈夢】

「あんですつて？」

靈夢の怒りに目もくれず棒読みをしながら、続けた。

【裕也】

「あーでも剣味の事を見逃したなら、格が上がつて神社に人がくるかもなー。あー残念だ残念だ。まあ一博麗の巫女様は”心が狭い”らしいから、無理だよなー。あー本当に残念だ。」

靈夢は歯を噛み締めながら答えた。

【靈夢】

「わかつたわよ？私は優しいからこいつの事を見逃すわよ？でも、少し、弾幕勝負をしたい気分なんだけど？相手をしてくれないかしら？そこの貴方。」

【裕也】

「ああ。この話が終わつたら、いくらでも相手をしてやるから少し黙つてくれ。」

靈夢は拳を降るわけながら黙つた。

【妹紅】

「まあまあ。所で裕也？お前はどの顔が本物だ？お前は感情が変わりすぎる。」

【裕也】

「どれも、等しく俺だ。だが、敷いて言うなら、今しゃべっているこの顔が本物だな。」

【妹紅】

「そうか。」

【裕也】

「さて、剣味。」

剣味は肩をビクツとしながら、顔を上げた。

【裕也】

「お前を殺す事は直ぐに出来る。」

【剣味】

「ひ！」

【裕也】

「だが、しかし、これからは心を入れ替えて二つの人里の為に頑張るなら、殺さないでやる。さあ、如何する？」

剣味は驚いた表情をしながら、裕也に向かつてこう答えた。

【剣味】

「あれだけの事をした俺の事を許すというのですか!?」

【裕也】

「ああ。俺は閻魔でも聖人でもないただの人間だ。人間に人間は裁け無いし、そんなつもりも無い。俺はお前が心を入れ替えて働いてくれればいい。」

【剣味】

「あ、有難うございます。有難うございます。」

剣味は泣きながら裕也にお礼を行つた。

【裕也】

「さてと。靈夢、妹紅。手伝つてくれ。」

【靈夢】

「あによ。」

【妹紅】

「何だ?」

裕也はニヤッと笑ながらとんでもない事を言つた。

【裕也】

「人里と人妖の里を一つにする。」

【三人】

「「はあ?」」



裕也達は、人里の中心にあるもう一つの人里を閉ざして いる壁の前にいた。

【靈夢】

「しかし、あんたも凄い事を考へるわね。」

【妹紅】

「そうだな。約5年続いた壁を壊すって言うんだからな。」

そう。裕也が言つた人里を一つにすると言つた事は、人里にある壁を壊す事だつた。

【裕也】

「いいか？行くぞ！」

【靈夢】

「はあーこうなつたら最後までやつてやろうじや無いの！」

【妹紅】

「よし！ やるか！」

冰心 「針棘の暴風雷雲」

宝具 「陰陽鬼神玉」

蓬萊 「凱風快晴 一フジヤママヴオルケイノー」

三人のスペルカードが合わさり大きな音を立てて壁が崩れ去つた。

【裕也】

「よし！ 成功だ！」

【靈夢】

「はあゝ。」

妹紅

「これからが大変だ。」

裕也達が下に降りると村人から罵声やら、悲しみを当てられた。

「なんごとをしてくれたんだ！」

「」の「」の「」の「」の「」

「私の家が！」

「如何してくれんんだ！」

弁償しろ!

妹紅は訳を言おうとした時に裕也が止めた。靈夢は少し驚いたが見守る事にした。

裕也は声を張り上げながらこう答えた。

裕也

「如何もすいませんでした——！」

いきなりの謝罪に村人は戸惑っていた。

裕世

「だが！この現状は俺だけが悪いのか！いや違う！」

その言葉にまだ戸惑いながらも村人は答えた。

「自分の責任を俺たちに押し付けるな！」

「そうだそだ！」

「お前も剣味と同じだ！」

「そうだ！剣味と同じだ！」

裕也はその言葉にニヤッと笑ながら見えない様に顔を隠した。

【裕也】

「・・・・」

「如何した！言い返せないんだろ！」

「家を返せ！」

「これも、全て剣味のせいだ！」

その言葉を言つた瞬間また、いきなり声を張り上げながらこう答えた。

【裕也】

「剣味のせいだと？ふざけるな！剣味を選んだのはお前達だ！剣味をここまで追い詰めたのは俺か？いや違うお前達だ！それを何だ！自分達が悪いのに関わらず、それを認め

もしないで、ただ、誰かを悪者にしてそれを攻める貴様等の方がよっぽど最低だ！どうだ！違うか！違うやつは出てこい！俺が貴様等の言葉なんて俺が言葉で切つてやる！」

裕也がそう言うと周りはざわざわとし始めた。そんなのはお構いなしと言う様に続

けた。

【裕也】

「だが、良く考えてみろ！これはチャンス何だ！お前達は妖怪をよく知らない！だが！これを気に知る事が出来る！しかも、優秀な医師や道具屋がやってきてもつと賑やかになる！それに、警備ももう一つになつたんだから、そこも協力をすれば良い！確かに家は壊れた。だが！皆で協力をすれば元通りになる！悪い事ばかりじや無いだろ！？それとも、やだか、新しい事に挑戦したく無いのか

！もし、それらがやだつたら。全ては俺と剣味の責任だ。」

裕也は優しい顔をして答えた。

【裕也】

「俺と剣味を気の済むまで殴ればいい。お前もそれでいいな？」

剣味は覚悟を決めた顔で答えた。

【剣味】

「はい！私の責任でもあるので覚悟は出来ています。」

【裕也】

「だが、これだけは覚えていてくれ。お前達が剣味を選んだつて事を。でも、許してくれるなら、拍手をしてくれ。」

村人に沈黙が流れた。しばらく沈黙だったが。慧音が初めに拍手をして、阿求、村人とだんだんと拍手が大きくなり数分後には労いの言葉が飛び交った。

「頑張ったな！」

「気持ちが晴れたわ。有難う！」

「はつきりと言つて悪かつた！」

「剣味も済まなかつた！」

「よつ！ 結婚してくれ！」

そう言つた瞬間少しの沈黙が流れた。何故なら男だったからだ。

「じ、冗談だ！ 頑張つた！」

【裕也】

「良かつたな。剣味。」

【剣味】

「はい！ 有難うございます！」

皆で笑つていた所に靈夢が裕也に向かつてこう言つた。

【靈夢】

「良い所悪いんだけど、忘れていないわよね？」

【裕也】

「ああ、勿論だ。」

裕也はキリッとしながら答えた。

【裕也】

「だけど、戦うのは外だ。」

【靈夢】

「勿論。」

裕也と靈夢は里の外に移動をした。村人達は、見物をしに裕也達の後を追つた。

【靈夢】

「なにこれ。」

裕也達が外に出ると、そこには先回りをしていた村人が沢山いた。

【裕也】

「はは、良いじや無いか。」

【靈夢】

「はあ〜。これは不思議な異変になつたわね。」

【裕也】

「異変？ そうだな。革命と言う異変だな。」

【靈夢】

「革命ね。はあ、本当に変な異変になつたわ。遊び、自分の力を見せる為、月から隠れる為、聖人を助け出す為。色々な異変に関わっているけど、これ程にやりずらい異変は始めてよ。」

【裕也】

「まあ、な。応援されているしな。ん？ そう言えば、これは何の異変になるんだ？」

【霊夢】

「さあね。でも、この異変に名前を付けるなら、人里で起きた異変。人里異変と言つた所かしらね。」

【裕也】

「と言う訳は、俺がラスボスか？」

【霊夢】

「そななるんじや無い？」

【裕也】

「そなか。ルーミア！」

裕也がそう言うと裕也の影が変わりそこからEXルーミアが現れた。

【ルーミア】

「む？ やつとか。ふう。言いたい事は分かつていてる。離れてろと言いたいんだろ？」

【裕也】

「良くわかつたな。」

【ルーミア】

「当たり前だ。お前と一緒にいたんだぞ？ それは分かるさ。」

【裕也】

「そうか。ありがとう。さて、待たせたな靈夢。」

【靈夢】

「色々と言いたい事はあるけど、本気で殺つて良いのね？」

【裕也】

「……何か字が違う気が。」

裕也は反論を使用とした、靈夢に邪魔された。

【靈夢】

「氣のせいよ。」

【裕也】

「……そうだな。それじゃあ、やるか。皆待ってるからな。」

村人は思い思いの応援をした。

「巫女さん頑張れ！」

「にいちゃん！がんばんな！」

「二人とも頑張れ！」

【霊夢】

「何だかね。こんなに応援何てされた事無いわよ。」

【裕也】

「まあ、たまにはこう言う異変があつたつて良いんじや無いのか？」

霊夢は笑ながら答えた。

【霊夢】

「そうね。そう言う異変があつても良いわね。それじゃあ、行くわよ。」

【裕也】

「ああ、こっちも行くぞ！」

こうして、人里異変最後の勝負。霊夢ＶＳ裕也、主人公と主人公の対決が始まった。

人里異変最後の戦い

【靈夢】

「行くわよ裕也！」

【裕也】

「こい、靈夢。」

靈夢はそう言うと札を取り出し自分の靈力を纏わせ裕也に向けて投げた。

【裕也】

「・・・・」

裕也は無言で空を飛びながら靈力が纏っている札を取つた。それも全て。これには靈夢も驚いた。

【靈夢】

「な！何ですって!?」

【裕也】

「返すよ！」

裕也はそう言うと靈夢の札に自分の靈力を靈夢がした見たいにして、投げ返した。

「?」

靈夢は驚いた。自分では避けていた筈なのに、札が靈夢を追つかけて来た。

【靈夢】

「すーーーは！」

靈夢はそれを気合で吹き飛ばした。

【裕也】

「次行くぞ！」

銃砲「赤銃花火（レッドジュウカスター・マイン）」

裕也の周りに赤色の弾丸が現れ不規則な動きをしながら靈夢を襲つた。

【靈夢】

「これはあの兎の！いや、違う。アレンジね。だつたら。」

靈夢はスペルカードを取り出し唱えた。

靈符「夢想妙珠」

七色の丸い玉が裕也の放つた方向の上に放たれた。

【裕也】

「何を。」

【靈夢】

「見ていいなさい。」

【裕也】

「な、に？」

裕也は信じられない顔をした。何故なら裕也の弾丸が靈夢の放つた玉に吸い寄せられたからだ。

【靈夢】

「やつぱりね。」

靈夢は納得した顔をした。裕也は靈夢に質問した。

【裕也】

「如何言う事だ。」

【靈夢】

「貴方のスペルカードでしょ？ 貴方が良く知っている筈よ？」

【裕也】

「何故分かつた？」

【靈夢】

「あれが強い靈力に引き寄せ攻撃をするつて事？それとも、靈力を持つていな者には絶対に攻撃が当たらないつて事？」

裕也は溜息を付きながら答えた。

【裕也】

「はあ。まさか一発で気づくなんて。何が原因だ？」

靈夢は笑ながら答えた。

【靈夢】

「勘よ。」

裕也は素直に驚いた。

【裕也】

「勘でつて。なら、これならどうだ。」

暗雲「暗黒遊戯（ブラツクゲーム）」

靈夢ね周りに暗闇が立ち込め靈夢は闇に覆われた。靈夢は少し驚いたが直ぐに観察をした。

【靈夢】

「落ち着くのよ私。よく、観察をして、見極める。勘を持つと鋭く。そして、全身に纏わせるのよ。」

靈夢は気を貼り付け精神を集中させた。そんな靈夢に、裕也は。

【裕也】

「よし。次だ。」

スペルカードを取り出し唱えた。

歴史「自己像幻視（ドツペルゲンガー）」

裕也がそう言うと、裕也が二人に分かれた。靈夢は自身の靈力を外に放出して闇を払つた。

【靈夢】

「だー！ もー！ 神經を集中？ そんな面倒くさい事なんてしてられるかー！ さあ！ 裕也！ つてあれ？」

靈夢は驚いた。何故なら気がついたら裕也が二人いたんだ。それは驚きもする。だが、靈夢は直ぐに持ち直した。

【靈夢】

「はー。フラン見たいな事をしないでよね。たく、面倒くさい。」

二人の裕也が声を揃えて答えた。

【裕也】

「まだだ。」

【靈夢】

「なん、ですつて？」

靈夢はまさかと言つた顔をした。

【裕也】

「もう一度だ！」

歴史 「「自己像幻視（ドッペルゲンガー）」」

二人の裕也がもう一度スペルカードを使うと裕也の体が四人になつた。それに靈夢は溜息を付いた。

【靈夢】

「はあ～。これじやあ、本当にフランのフォーオブアカインド見たいじやないのよ。」

四人の裕也は靈夢を囮んだ。

【裕也】

「「「行くよ靈夢！」」」

裕也達はそう言うとスペルカードを取り出し四方向から放つた。

血付 「針棘の山」

暴風 「雷雲」

銃砲「赤銃花火（レッドジュウカスター・マイン）」

冰心「針棘の暴風雷雲」

凄く誰もが見惚れる程に美しい弾幕の嵐が靈夢に向かい発射された。靈夢は必死に避けていた。それに村人達は、近くでやつていた魚を焼いているミステイアの屋台と妹紅がやつてる焼き鳥屋の物を食べながら見物をしていた。



【ミステイア】

「さーあ！安いよ安いよ！向こうの焼き鳥屋何か食べてないでこっちの魚料理の方が美味しいよー！」

【妹紅】

「なーに！行つてんだい！私が作つた焼き鳥の方が美味しいよー！向こうの魚より美味しいよー！」

「ここはここで、別の対決が行われていた。それに混ざり天狗の射命丸 文がいた。

【射命丸】

「いや、暇つぶしに見たら、二つの里の住人が一緒になつていて、しかも、こんなに美味しい物を食べれるなんて最高ですね。しかし、フランさんと同じスペルカード？を使いまつさえ靈夢さんをここまで追い詰めるなんて今回の異変は凄いですね。これは

記事のしがいがありますよー！それにしても、この異変の首謀者は本当に強いですねう。ま、私は見て行きますか。」

射命丸は幸せな気分で見ていた。



その頃霊夢は裕也のスペルカードを避けながら自分もスペルカードを出して相殺して行つた。

靈符「夢想封印」

夢符「封魔陣」

靈符「夢想封印 散」

靈符「夢想封印 集」

夢符「封魔陣」

これらのスペルカードを使いやく全ての弾幕を相殺した。
霊夢は少し疲れた様子をしていた。

【霊夢】

「はあ、はあ、たく。あんたの靈力は無限なの裕也？」
それに裕也はこう答えた。

【裕也】

「紫位の靈力があるからな。」

それに靈夢は。

【靈夢】

「あんた本当に人間？」

裕也はこう答えた。

【裕也】

「いや、靈夢も人間のカデゴリーにいれてもいいか迷うよ。」

靈夢はニヤリと笑ながら答えた。

【靈夢】

「褒め言葉として受け取つておくわ。」

【裕也】

「それはどうも。」

裕也もニヤリと笑ながら答えた。靈夢は自身の靈力を最大までにあげていた。

【靈夢】

「これで、決める。」

裕也は少しだけ恐怖を感じた。だがそれと同時に裕也は笑つた。

【裕也】

「なら、俺も出し惜しみはしねえ。本気の本気で行くぜ。」

裕也はいきなり口調が変わり靈力が跳ね上がった。靈夢は今までに感じた事のない感覚に襲われた。それは一般的に言うと怖いと言う感覚だつた。何故なら、靈夢はこんな気持ちになつたのは紫との勝負以来だつたからだ。

【靈夢】

「でも、やるしかない！」

裕也は声を張り上げた。

【裕也】

「行くぜ!!」

靈夢も声を張り上げた。

【靈夢】

「私も行くわよ！」

二人の緊迫とした空気に近くにいた村人達は誰しもが息を飲んだ。一人は叫びながら自分が出せる最大の技、弾幕を放つた。

【裕也】

「はああああ！」

境界「全可能性の弾幕」

【靈夢】

「いっけえええええ！」

ラストワード「夢想天生」

裕也の周りにスキマが開き。パラレルワールド世界の色々な弾幕が靈夢に向かって放たれた。

靈夢は体が金色になり靈夢の周りに陰陽玉7つが現れ裕也に向かつて突っ込んで行つた。靈夢に襲いかかる弾幕を避けたり自身に当たりながら距離を詰めて行つた。それに、裕也は凄く驚いた。

【裕也】

「んな!?」

陰陽玉が残り一つ無敵状態も解けたが裕也の目の前にたどり着いた。

【靈夢】

「これで・・・最後だあああああ!!!」

陰陽玉を纏わせている靈夢の拳が入る瞬間裕也はスペルカードを取り出し唱えた。

【裕也】

「舐めるなああああ!!!」

拳技「青の鳥——鳳凰襲来拳——」

靈夢の最後の拳がに当たる直前にスペルカードを唱え青い炎を纏わせた拳で返した。

【裕也】

「はああああああ!!!」

【靈夢】

「やああああああ!!!」

二人の最後の技がぶつかり大爆発を起こした。靈夢と裕也はそれぞれ反対方向に吹き飛ばされた。

【裕也】

「ぐあああああ!!!」

【靈夢】

「きやああああ!!!」

そして二人同時に地面に叩きつけられた。その時に凄い砂埃が起こり二人の姿が見えなかつた。

【村人】

「ど、どつちだ。」

「わかんねえよ。」

【妹紅】

「二人とも！ ?け、慧音！」

妹紅は一人のそばに寄ろうとしたが慧音に止められた。

【慧音】

「妹紅、これは二人の真剣勝負。邪魔をしては駄目だ。」

【妹紅】

「・・・・分かった。」

【慧音】

「ほら見てみなさい。砂埃が晴れて来た。」

慧音の言う通りに砂埃が晴れてきた。晴れた先にいたのは・・・・裕也だつた。

【裕也】

「かつは。ぜえ、ぜえ。」

裕也は叫んだ。

【裕也】

「も、妹紅！ 霊夢を永遠亭に！ それから、そこにいる、優曇華！ て、手を貸してくれ！ 自分じや歩けないんだ。」

優曇華は心配した様子で裕也に近寄った。

【優曇華】

「む、無茶し過ぎです！ 霊夢さんに勝負を挑むなんて！」

裕也は耳を抑えた。

【裕也】

「わ、わる、かつた、さ。だが、なま、はん、か、な、覚悟じや、だめ、だつ、たんだ。」

裕也は途切れ途切れに喋っていた。靈夢は意識はあるが体が一ミリも動かなかつた。

【靈夢】

「つあ！ はあ、はあ、はあゝ。完敗だわ。あーこんな気持ちになつたのはいつ振りかし

ら

靈夢は満足そうな顔をしながらそう答えた。

こうして、人里全土に多大な革命を起こした異変は解決した。射命丸はこの事を記事に使用としたが、紫に止められた少し改変した新聞を出す事になつた。それに文は泣きながら帰つていつた。優曇華と妹紅は二人を永遠亭に連れて行く事にした。だが、裕也と靈夢は永遠亭に着く前に二人とも気絶をしてしまつた。裕也目を覚ましたのはあれから3日後だ。

★

3日後永遠亭・・・



裕也は夢を見ていた。その夢は自分が作った薬でいろんな人達が死んで行くと言う物だ。裕也は一人の人間を治療していた。

【裕也】

「頼む！もどつてきてくれ！頼む！」

しかし、その人が目を開ける事は無かつた。

【裕也】

「くっそおおおお！！」

裕也は叫んだ。自分の未熟さに自分の犯してしまった罪に。その後も裕也は探した。そして、瀕死の男の人を裕也は見つけた。今度こそと思い裕也は男に近寄った。

【裕也】

「おい！しつかりしろ！大丈夫だ！絶対に助けてやるからな！」

裕也は治療を始めた。しかし、始めて数分で異変が起つた。それは、死んで行つた人達の怨念が耳元で囁いたのだ。

【何でそいつだけ】

【私も長く生きたかった】

【殺せ、殺してしまえ】

【そうだ。俺達を見捨てた様に】

裕也はその言葉を無視して男の治療に専念した。

【裕也】

「頼む！死なないでくれ！お願ひだから、死ぬな！」

裕也の祈りも届かず男はある言葉をの越して死んで行つたその言葉は。

【人、殺し。娘を、返、せ。】



【裕也】

「うわあああああ！」

裕也は布団で眠つていた。

【裕也】

「はあー、はあー、はあー、かつは！はあ～ゆ、夢か。」

裕也は首を横に向けた。そこにいたのは優曇華だつた。裕也の叫び声に驚いたのか
部屋の隅にいた。

【優曇華】

「な、何ですか！いきなり！」

優曇華は警戒をしていた。裕也は謝り、今日はいつなのかを聞いた。

【裕也】

「すまない。驚かすつもりは無かつたんだ。それで今日は何日だ？」

優曇華は裕也の布団の横に座り裕也の質問に答えた。

【優曇華】

「十四日よ。」

【裕也】

「そうか。あれから3日も。靈夢は？」

その裕也の質問に優曇華は答えた。

【優曇華】

「靈夢は貴方が覚める二日前に目を覚まして神社に戻つて行つたわ。」

【裕也】

「靈夢は何か言つていたか。」

【優曇華】

「今度は私が勝つ。ですって。」

裕也は靈夢は負けず嫌いなんじやないのかと思つた。優曇華は思い出した様に声を上げた。

【優曇華】

「あー！ 思い出した！」

裕也はビクッと驚いた。

【裕也】

「な、何だいきなり。」

【優曇華】

「師匠に裕也が目を覚ましたら報告するよう言わっていたんだつた！」

優曇華はドタドタと急ぎ足で裕也の部屋を抜けていった。

【裕也】

「騒がしい奴だ。ふう。さて、そこにいるんだろう？」

裕也はつぶやいた。誰もいない筈の空間に。

【裕也】

「わかつてゐから出てこいよ。ルーミア、紫。」

裕也がそう言うと、スキマが開き、そこからルーミアと紫が現れた。

【紫】

「あら？ 良くわかつたわね。気配は完全に消して いた筈なのに。」

それにルーミアはこう答えた。

【ルーミア】

「多分お前のせいだ紫。」

【紫】

「何言つてんの。ルーミア、この私がヘマをするとでも？」

紫は裕也に聞いた。すると裕也は紫にこう答えた。

【裕也】

「いや、お前のせいだから。」

【紫】

「え？・・・ゆかりちゃんわつかんな〜い☆」

紫は急にぶりつ子見たいな口調をして誤魔化した。裕也はそれを無視して聞いた。

【裕也】

「どうでもいい。そんな事より何の用だ？」

その言葉に紫はがつくしと肩を落としたが直ぐに真剣な顔に戻った。

【紫】

「ルーミアが裕也君について行きたいと言うのよ。」

【裕也】

「ルーミアが？ そうなのか？」

裕也はルーミアに聞いた。返ってきた答えは。

【ルーミア】

「お前といれば楽しめそうだからな。」

【紫】

「どの事だけどどう?」

裕也は少し考えたてこう答えた。

【裕也】

「分かった。一人より二人の方がいいからな。これから宜しくな。」

【ルーミア】

「ああ、宜しく。」

ルーミアはそう言うと裕也の影の中に入つて行つた。紫は何かを思い出したようにこう答えた。

【紫】

「あ、そうだ。裕也君これを渡しておくわ。」

紫が渡したのは、スペルカード3枚と一つの新聞だつた。

【裕也】

「新聞? 幻想郷にも新聞があるんだな。それから、これはスペルカード? 新聞はまだ分かるが、如何してスペルカードも?」

裕也は疑問に思い紫に聞いた。それに紫は。

【紫】

「新聞は必要でしょ？スペルカードは労いよ。」

【裕也】

「労い？」

【紫】

「そうよ。これから貴方には幻想郷を変える程の異変や幻想郷に貢献した時に労いとして何かあげる。」

裕也はクスクス笑つた。

【裕也】

「はは、つまりは幻想郷の為にそして、紫の為にこの力を使え、そうしたら褒美として何かやる。こう言う意味だろ、紫。違うか？ そうでなきや大妖怪のお前が一人間にここまでする筈が無いからな。」

紫はこう答えた。

【紫】

「貴方はそう思つているの？ 私の事を。」

それに裕也は笑ながら答えた。

【裕也】

「あつはははははー！」

【紫】

「え？」

涙目になつていた紫に裕也は笑つた。

【裕也】

「最初に言つたろ？仲間は絶対に疑わない、そして絶対に何があつても助ける。そして落ち込んでいるなら慰める。しかし、紫にも泣くつて言う事があるんだな。」

紫は顔を赤くしながらスキマを開き裕也をスキマの中に落とし絶叫コースを盥回しにして、そして裕也を布団に戻した。裕也は、髪がボサボサで服はボロボロになつていた。

【裕也】

「くつか、あつは、き、きつつー。な、なにするんだよー・紫。」

【紫】

「ふ、ふん。知らない！」

紫はそう言うとスキマの中に消えていった。

【裕也】

「はあー。そういえば永琳まだなのか？流石に長過ぎるだろ。」

【永琳】

「ごめんなさいね。」

永琳はそう言うと襖の向こうから現れた。

【裕也】

「遅かつたな。如何したんだ？」

【永琳】

「ちよつとね。それより酷い姿ね。服もボロボロだし、何かあつたの？」

裕也は苦笑いをしながら答えた。

【裕也】

「いや、少し妖怪の賢者さんを弄つたら、少し。それより如何なんだ？」

裕也は自身の体に付いて聞いた。

【永琳】

「ええ、靈力はまだ完全じや無いけど、体力は元通りだから生活する面では大丈夫よ。」

【裕也】

「どうか。じゃあ新聞でも見ますか。」

【永琳】

「見る前に少し良いかしら？」

裕也は何だろうと思いついたかのように目を輝かせた。

【裕也】

「？　如何した？」

永琳はこう答えた。

【永琳】

「今夜宴会があるから必ず参加しなさいと靈夢から言われているんだけど。行く？」

【裕也】

「いや、俺はやす。」

裕也が休むと言おうとした時に襖が吹き飛び、白黒の服をきた魔女見たいな人が現れた。永琳は溜息をつきながら答えた。

【永琳】

「はあ～弁償してくれるんでしょうね。魔理沙。」

【魔理沙】

「いや～ツケで。」

永琳は何かを思いついたかのように目を輝かせた。

【永琳】

「ツケはいいわその代わりに実験体になつて貰うわよ。」

魔理沙は涼しい顔をして答えた。

【魔理沙】

「それは遠慮しておくぜ！それよりお前が裕也か？」

魔理沙は裕也を指差しそう答えた。裕也は疑問そうな顔をしながらこう答えた。

【裕也】

「そうだが、お前は？」

【魔理沙】

「私の名前は霧雨魔理沙つてんだ！つーわけで付いてきて貰うぜ！」

裕也の手をとり魔理沙は片手で箒を持ち、丸四角い物を箒に付けてスペルカードを取り出し唱えた。

恋符「マスタースパーク」

魔理沙がそう言うと箒から、大量の星が部屋に降り注ぎ魔理沙と裕也は凄い速さで永遠亭を出ていった。永琳は。

【永琳】

「・・・・如何しましようかしら。」

裕也の部屋は跡形も無くなっていた。

【永琳】

「優曇華！」

永琳はだるそうに優曇華を呼んだ。

【優曇華】

「はーい。つて何ですかこれ!?」

優曇華は驚いた。何故なら一部屋無くなっていたからだ。

【永琳】

「優曇華、私は博麗神社での宴会に行つてくるわ。優曇華は片付けを。」

【優曇華】

「あ、はい。」

永琳はそう言うと博麗神社に向かつた。

【永琳】

「大丈夫かしら裕也君。」

★

その頃の裕也は。



【裕也】

「うおわあああああ！は、H A ! N A ! S E !」

【魔理沙】

「だが断る！」

魔理沙は聞く気が無いらしく、止まる事無く裕也は超スピードで揺らされていた。

【魔理沙】

「いや～気持ちがいい！これが最高にハイって奴か！ヒイヤツハ！」

【裕也】

「ダメだこいつ何とかしないと。つてそれどころじゃない！えーい！」

裕也は自身に弾幕を当てその爆風を利用して魔理沙から離れた。

【裕也】

「かつはー！」

【魔理沙】

「な！？お前は馬鹿か！つ！」

魔理沙は裕也に近寄ろうとしたが、裕也が魔理沙に向かい弾幕を放つた魔理沙はとつさに避け回避をした。

「お前、ふざけるなよ。」

裕也は靈夢の時以上の殺氣と靈力を出し魔理沙にその殺氣と靈力を放つた。

【魔理沙】

「う！かつは！い、息が。」

魔理沙は当たりに纏わり付いて息が出来ない様子だった。裕也はしまつた！と言う顔をして直ぐに閉まつた。

【裕也】

「悪い。紫の時と同じ話し方をしてしまつたな。だが、お前がいきなり連れて行くからだ。如何言うつもりだ。」

【魔理沙】

「はあ、はあ、はあ、たく。お前は本当に外来人なのか？今まで見てきたが、お前のような靈力を持つ奴なんて見た事無いぜ。幽香と同じぐらいじゃないのか？」

【裕也】

「幽香？」

【魔理沙】

「ああ、太陽の畠つて言われている場所にいる奴さ。」

裕也はつまらなそうに答えた。

【裕也】

「そうか。だが俺はいかないぞ宴会には。」

【魔理沙】

「そんな訳にはいかないんだ。異変を解決をしたなら宴会をして水に流す。これが異変解決時の幻想郷でのルールだ。」

裕也は少し驚いた。

【裕也】

「……一つだけ質問する。その異変で大切な人が殺されて全てをめちゃくちゃにした奴を巫女が倒すとする。その過程で、魔理沙、お前の大切な物や人を殺されても、そいつと一緒に宴会をするのか？ そいつが楽しそうにしていて、憎しみが湧かないのか？ お前はそんな奴がいても仕方がない、しようがない。これもルール何だと決める事が出来るのか？ どうだ？ しかも魔理沙、お前は俺が放つた殺氣で怖気付いて動けなかつたよな？ それで、大丈夫なのか？ 宴会をしていて。大丈夫なのか？」

裕也は魔理沙にきつい言葉を投げかけた。それに魔理沙は。

【魔理沙】

「わた、しは……。」

裕也は魔理沙を小馬鹿にした感じの言葉でこう答えた。

【裕也】

「お前は馬鹿か？」

【魔理沙】

「は？え？」

魔理沙は思考が付いていかなかつた。裕也は言葉を続けた。

【裕也】

「確かにそんな事になつたら宴会なんてする氣にも起きないだろう。しかし、そうならない為の努力をしていて、それを異変で試し、身につけ、経験を積んで、そんな事にならないようにして、解決をする。そして、その労いとして、宴会があるんだろ？スペルカードルールは誰もが死なないようにする為に作つたルールだ。だから、気を付けなきや行けない。遊び見たいな事になつてているけど、本当の異変は遊びじゃなく、本当に死ぬ。だからと言つて遊びでも油断はしてはならない。何故なら、遊びで死ぬ事もあるのだから。」

魔理沙は心に刻み込んでいた。言葉の一つ一つをその意味を。

【裕也】

「悪かつたな初対面で変な事を言つてしまつて。そのお詫びに宴会に参加する。」

裕也はそう言うと魔理沙と共に博麗神社に行つた。裕也はその時にこう言つた。

【裕也】

「本当に済まなかつた。」

魔理沙はその言葉を聞いた瞬間に何故か会つたばかりの裕也を信頼の出来る奴と直感した。

★

裕也達は博麗神社に着く頃にはもう宴会が始まつていた。博麗神社は妖怪や人間で溢れかえつっていた。

【萃香】

「れ～い～む～お酒～。」

【靈夢】

「だーもー！向こう側に沢山あるでしょー！だーかーらーむーこーうーにーいーけー！」

萃香は靈夢に抱きつき離さなかつた。靈夢は裕也達を見つけた。

【靈夢】

「魔理沙、ご苦労様。」

【魔理沙】

「・・・・」

【靈夢】

「魔理沙？」

魔理沙は何かを考えている様子で靈夢の言葉が届いていないようだつた。靈夢は抱きついている萃香の角を持ち、魔理沙に向かつて投げた。

【萃香】

「靈夢？ ど、如何した？ いたいで？」

【靈夢】

「ふつとベや！」

【萃香】

「ぎやあ！」

【魔理沙】

「ふゞー・だああああ！」

魔理沙は変な声を出しながら萃香と共に吹つ飛んだ。魔理沙と萃香は直ぐに立ち上がり靈夢に詰め寄つた。

【萃香】

「れ〜い〜む〜いたいで。」

【魔理沙】

「そうだぜ！ 霊夢！ いきなり何するんだよ！」

【靈夢】

「はあ～。萃香、はいお酒よ。これ持つてどつかに行きなさい。」

萃香は酒を貰うと何処かに去つて行つた。靈夢は魔理沙に聞いてみた。

【靈夢】

「何があつたの魔理沙。」

魔理沙は言おうか迷つてゐるみたいだつた。

【裕也】

「俺が言うか？ 元はと言えば俺が責任なんだからな。」

【魔理沙】

「いや、私が言う。靈夢。実は裕也の話で。」

★

魔理沙説明中・・・

★

【魔理沙】

「て、事があつたんだ。」

【靈夢】

「そう。その時如何するか、か。それで？そんなくだらない事で悩んでいるの？」

「え？」

【魔理沙】

「靈夢はそう答えた。それに魔理沙は反論をした。

【魔理沙】

「なにいつてんだよ！くだらないだつて!? 大切な事だろ！」

【靈夢】

「魔理沙、あんた一体如何したのよ。あんたらしくもない。」

【魔理沙】

「私らしく無いだと？」

【靈夢】

「ええ、そうよ。あんたは何も考えずにただ単に突っ走つて周りをはつちやかめつちやかにして迷惑をして、そして何も言わずに去つて行く。それが魔理沙、貴方よ。」

【魔理沙】

「ひ、ひでー。」

靈夢は懐かしむ見たいに答えた。

【靈夢】

「でも、どんな事にも真剣に取り込んで、そして何事にも全力で当たる。そして些細な事は気にしない。それが本当の魔理沙でしょ？そんな事を考へるなんて魔理沙らしく無いわよ。」

【魔理沙】

「靈夢。」

魔理沙は靈夢の言葉に感動していた。

【裕也】

「靈夢、何か声が大きくなるような物無いか？」

【靈夢】

「ん？ これがあるわよ。」

靈夢はメガホンを裕也に渡した。

【裕也】

「メガホンか。まあ、いいか。」

裕也はメガホンを口にし喋つた。

【裕也】

「あーあー。どうも！ 外来人の裕也です。質問を受け付けるので、どしどしきて下さい！」

裕也はそう言うとメガホンを靈夢に返した。その時直ぐにきたのは、翼を生やした幼き少女、レミリアだつた。

【レミリア】

「質問、良いかしら？」

裕也は首だけを向けた。

【裕也】

「何かな？」

裕也はニコリと笑ながらレミリアに答えた。

【レミリア】

「あんた本当に靈夢を倒したの？そんなに強そ�うと思わないんだけど。」

裕也は首を横に降つた。

【裕也】

「いや、俺は何もしてないんだが。俺はただ、拾つた装置で操つていただけだから。まあ、その事で靈夢さんに夢想封印を打ち込まれましたが。」

裕也は恥ずかしそうにそう答えた。

【レミリア】

「そうなの靈夢？」

レミリアは靈夢に聞いた。靈夢は本当の事を言おうとしたが、裕也が口で言うなと伝えたから口裏を合わせる事にした。

【靈夢】

「……そうよ。」

【レミリア】

「ふーん。ま、そういう事にして上げるわ。ま、暇があれば来なさい。裕也。」
レミリアはそう言うと去つていった。次に来たのは旧地獄、今の地靈殿にいるさとりだつた。

【さとり】

「少しいいですか？」

【裕也】

「はい、何でしようか？」

裕也は笑顔で答えた。

【さとり】

「質問です。貴方は何者ですか？」

【裕也】

「……一応人間だ。」

(ふむ。そう言う事は何か疑つてゐるな。まあ、いいか。)

【さとり】

「……そうですか。なら、次です。靈夢さんを追い詰めた事は本当ですか？」

【裕也】

「いや、さつきも言いましたが自分は何も。」

(さつきレミリアとの話を聞いていた筈。なのにそう言うと言う訳は、心でも読めるのか？ そうだとしたら、隠しても無駄か？ もし聞こえていたなら片目をとじてくれ。)

さとりは右目を閉じた。

【裕也】

「そうか。」

(なら、俺が追い詰めた。だが、あまり広げないでくれ。博麗の巫女は負けてはならない。だからな。頼めるか？ いいなら握手をしてくれ。それが出来ないなら、去つてくれ)

【裕也】

「しばらくここにいるから行く事があるかもしねないから、その時は宜しく。」

裕也はそう言うと手を前に出した。さとりはその手を取りこう答えた。

【さとり】

「ええ、こちらこそ。」

さとりはそう言うと去つていった。次に来たのは妖夢と幽々子だった。

【妖夢】

「勝負しなさい！」

【幽々子】

「こゝら。いきなりなに言つてんの妖夢。唐突すぎるでしょ。」

幽々子は妖夢を軽く叩いた。

【妖夢】

「あて。幽々子様、何するんですか？」

妖夢は頭を抑えた。

【裕也】

「何かようですか？」

【幽々子】

「ごめんなさいね。いきなり。いやね？ 妖夢が靈夢を追い詰めた何て信じないって
言つてね。確かめるつてね。」

【裕也】

「はあ、そうですか。それでどうかな？俺は。」

妖夢はしばらく裕也を見てこう答えた。

【妖夢】

「弱そう。本当に靈夢さんを、瀕死まで追い詰めたんですか？」

裕也はニヤリと笑ながら答えた。

【裕也】

「だつたら戦つてみるか？」

【靈夢】

「ちよ、ちよつと。」

【妖夢】

「わかりました。そつちの方が手つ取り早いですね。」

【裕也】

「いくぞ！」

裕也は妖夢に走つていつたが、妖夢は木刀で裕也の頭を叩いた。裕也はすつ転び頭を地面にぶつけた。

【裕也】

「つづう。ま、参つた。」

【妖夢】

「は？いや、え？」

妖夢は戸惑っていた。何故なら簡単に決着がついてしまったからだ。

【妖夢】

「貴方は本当に靈夢さんを追い詰めたんですか？」

裕也は頭を抱えながら答えた。

【裕也】

「だから、俺は違うって。どうして何だ？」

【妖夢】

「新聞です。」

【裕也】

「新聞？」

【妖夢】

「これです。」

新聞にはこう書かれてあつた。

人里で起きた異変！主犯格は外来人か！？

人里に異変が起こつた。その異変は人を操り悪さをすると言う物だ。何とその主犯格は外来人との事だ。その異変を解決しに来た博麗の巫女により解決したが、博麗の巫

女は外来人との勝負で永遠亭に入院する程の傷を負わしたようだ。その過程で別れたいた二つの人里が一つになつた。その外来人の意図がわからないが、この事を追求して行きたいと思う。

皐月（さつき）の月13日 文々。新聞記者 射命丸 文

【裕也】

「なんじやこりや。」

【妖夢】

「だから新聞です。この外来人は貴方でしょ？」

妖夢はそう言つた。それに裕也は反論した。

【裕也】

「いや、それは俺だつて断言出来ないでしよう？」

【妖夢】

「そ、そうですね。失礼します。」

妖夢はそう言つて去つて行つた。

【幽々子】

「妖夢は騙せても私は騙されないわよ。貴方は紫以上の靈力を持つてゐるわね。」

裕也は溜息を付きながら答えた。

【裕也】

「何で分かつた。」

【幽々子】

「靈力が変わったからね。そりやあ分かるわよ。」

【裕也】

「それで? 如何するつもりなんだ?」

幽々子は笑ながら答えた。

【幽々子】

「ふふ、別に。何もしないわよ。でも、いざれは戦つて見たいわね。良いかしら?」

裕也はも笑ながらこう答えた。

【裕也】

「ああ、いざれはな。」

【幽々子】

「それじやあね。裕也君。」

【裕也】

「ああ、幽々子さんもな。」

幽々子はそう言つて去つて行つた。次に現れたのはマスゴミの文と白狼天狗の権が

来た。

【柾】

「どうも、ここにちは。始めてまして、白狼天狗の柾と言います。」

柾はそう言うと頭を下げた。裕也も丁寧に挨拶をした。

【裕也】

「丁寧な挨拶をどうも。俺の名前は桐上裕也と言います。以後お見知りおきを。」

【柾】

「あ！こちらこそ。私達は妖怪の山と言う山にいるので是非来て見て下さい。」

【裕也】

「ええ、いずれ。」

【柾】

「それでは、私はこれで。文さんも早めに上がつて下さいね。」

【文】

「分かつてますよ。柾。」

柾は去つて行つたがマスゴミは残つていた。

【文】

「どうも！清く正しい射命丸文と言います！早速インタビューをしたいんですが？宣し

いでしようか?」

【裕也】

「ええ、いいですよ。」

裕也は二つ返事でOKを出した。それに今まで黙っていた靈夢が反対した。

【靈夢】

「私は反対。文貴方は嘘の記事をいつも書いているじゃない。」

【文】

「あやややや!そんな事はありませんよ靈夢さん。」

【裕也】

「大丈夫だ。」

【靈夢】

「裕也がいいなら私は別に。」

【文】

「それでは早速。まず始めに、貴方が異変を起こしたのは本当ですか?」

【裕也】

「何でそれを聞く?お前もその場にいた筈だろ?」

【文】

「あや？ 気づいていたんですか？」

【裕也】

「ああ、まあな。で？ 何で聞くんだ？」

【文】

「最初から見てないんですよ。だから、そこら編を教えて貰いたいんですよ。」

【裕也】

「そうか、なら答える。俺じやない。異変を起こしたのは人里の何の能力持つてない一般市民だ。」

マスゴミはニヤリと笑った。

【文】

「へーそうですか。それは如何やつて起こした異変何ですか？」

【裕也】

「これ以上は言えない。何故ならその人にも秘密があるんでな。それをマスコミにめちゃくちゃにして欲しくないからな。だから、言わない。」

【文】

「ふむ。そうですか。わかりました。それでは話を変えて、貴方の名前は何ですか？」

【裕也】

「俺の名前は桐上裕也。一応住処は永遠亭を使わせて貰っている。」

【文】

「ほう。永遠亭を。それでは。」

文が続きを言おうとしたら、永琳が、来た。

【永琳】

「文、外して貰つて良いかしら?」

文は一瞬考えて。

【文】

「ふむ。わかりました。私はもう少し向こうで飲んでいますから。それでは!また後
で。」

文は去つていった。

【裕也】

「それで、何の用だ永琳。」

【永琳】

「いやね? 魔理沙のスペルカードで貴方の部屋無くなつたのよ。」

裕也は信じられない用な表現をした。

【裕也】

「は？ だつたら俺の住む家は？」

【永琳】

「・・・・強く生きて。」

永琳はそれだけ言つて去つていつた。

【裕也】

「あ！ おい！ 永琳！」

永琳は何かを思い出したように戻つてきた。

【永琳】

「あ！ そうだ。裕也君。家が決まつたら宜しく。紅樓夢に言つておくから。」

永琳はそれだけ言つて去つて行つた。

【裕也】

「俺はこれから如何したら。」

【天子】

「ま！ 元気出しなさいよ！」

いきなり裕也に話しかけて来たのは、天界不良天人、比那名居 天子だつた。

【裕也】

「ウガー！ かせ！」

裕也は天子が持つていた瓶を取り一気飲みをした。

【天子】

「あ！それは。」

【裕也】

「ふは〜。へ？これ、酒か？ヒツク。」

【靈夢】

「裕也？」

【裕也】

「だつははははー萃香！鬼酒を持つてこいや！！」

裕也は萃香の場所に行き乱入して萃香の酒を奪い飲み干した、

【萃香】

「お！裕也〜いけるじやないか！勇儀！酒だ！」

【勇儀】

「おう！にいちやんいけるじやないか！しかも、中々強いと見た。にいちやん名前は？」

【裕也】

「裕也だ！勇儀！俺も勝負して見たいな！」

【勇儀】

「でも、私達が怖くないのかい？」

それに裕也は笑ながら答えた。

【裕也】

「あつはははは！怖いさ！だがな、怖がつていてはいつまでもそいつの良いとこがわからぬじやないか！鬼は人を襲うと言われているが、殺しはしない。なら、そいつはただ単に、楽しく、強さを求めていたんじやないかと俺は思うぜ。だから、殺しはしない。人間は失敗して成長する。だから殺さない。だから、怖いが、怖くない。だろ？」

【勇儀】

「ああ、そうだな。よーし！持つともつてこい！」

その宴会は明け方まで続く事になつた。裕也はとりあえず靈夢の家に止めて貰う事にした。

★

その頃永遠亭では。

【永琳】

「あら？ここに置いてあつた薬は？おかしいわね？優曇華！私の部屋に入つた？」

【優曇華】

「いいえ？ 入っていませんけど。」

【永琳】

「そう。」

所変わつて、永遠亭の外一人の兎と人間がいた。

【人間】

「例の物は。」

【う詐欺】

「これうさ。」

兎は瓶を出して男に渡した。

【人間】

「これさえあれば。 ああ、はいお金。」

【う詐欺】

「毎度あり。」

二人はそれだけ言うと自分達の場所に帰つて行つた。

後にこれが、幻想郷の崩壊の危機になる程の異変になるとはその時は誰も知る余地は無かつた。

第一部 第最終章・龍脈異変

龍神復活

宴会の日・・・・・・

妖怪の泉に一人の男がいた。男は粉末状の薬見たいな物を持ってつぶやいていた。

【男】

「コレさえあれば彼奴らを。」

男が薬を飲もうとした瞬間、白狼天狗の犬走樺が男に向かって怒鳴り上げた。

【樺】

「貴様！何をしている！」

【男】

「うわ!?」

男は驚きその薬ごと泉落ちた。

【樺】

「な!?お前大丈夫か!」

樺は直ぐに男を引き上げた、そして怒った。

【男】

「げほ、ごほ。はあ、はあ。」

【樺】

「たく。貴方ここが何処だかわかっているんですか!」

【男】

「ち!」

男は舌打ちをして去つて行つた。樺は他の場所に行か無いように男を追つかけて行つた。勿論薬は泉に溶けてなくなつていた。泉には誰もいなくなつた。その瞬間泉が光り輝いた。そこから一人の少年が現れた。

【少年】

「ここが今の幻想郷か。結界も制度が落ちて来ているな。今の巫女は何をしているんだ?
?・?・?情報が少な過ぎるな。しばらく人間の振りでもして情報を頭に入れるか。」

少年はそういいながら消えて行つた。

★

博麗神社・宴会から12日目

「なあ、靈夢。」
【裕也】

「なに?」

靈夢はけだるそうに答えた。

【裕也】

「幻想郷の雨つてこんなに長いのか?」

【靈夢】

「さーねー。きっとどつかの馬鹿天子が天氣でも弄つてゐるんでしょ、気にしない方がいいわよ。」

やつぱりけだるそうに靈夢は答えた。

【裕也】

「天子? ああ、天人の。そいつも能力持ちなのか?」

【靈夢】

「ええ、確か何だつたつけな?」

靈夢が思い出そうとした時にいきなり声が聞こえた。その声は比那名居 天子だつた。

【天子】

「大地を操る程度の能力よ。でも、非想の剣を手に入れて気質を見極める程度の能力が追加したのよ。忘れ無いでよね。」

【靈夢】

「あら、天子じやないの。どうしたの？」

【天子】

「と、そうだ！ 異変よ靈夢！ 天界にも雨やら嵐が来てるのよ！ 五月蠅くて眠れ無いのよ。」

靈夢はどうでもいい様な飽きた顔をした。

【靈夢】

「はあ～？ 何言つてんのよ。あんたが操つているんでしょ？」

それに天子は怒りながら答えた。

【天子】

「今回は私じゃないわよ！ そんなに疑つてんなら後でいくらでも相手になるわよ！ だから早く異変を解決しなさいよ！」

【靈夢】

「あんたは異変異変つて騒いでいるけど被害にあつてないんでしょ？ なら気にすること

無いんじやないの?」

と、靈夢がいい終わつた瞬間に神社に雷と嵐が同時に起こり靈夢、裕也、天子の三人は外に吹き飛ばされ地面に叩きつけられた。そして、靈夢が起き上がってみた光景は。

【靈夢】

「な、ななな、なんじやこりやややや!!」

外装や内装そして骨組みまで無くなつた神社だつた。裕也は靈夢を慰めた。

【裕也】

「まあ、元気だせ。」

すると靈夢はいきなり怒鳴り上げた。

【靈夢】

「裕也!・この異変の奴を見つけてぶつ飛ばすわよ!・」

【裕也】

「ちよつと待て靈夢。」

靈夢は腕を引っ張つたが裕也はその腕をほどいた。

【靈夢】

「あに!・何か文句があんの!・」

【裕也】

「お前は暴力団かなんかか？少し落ち付け。」

裕也は靈夢をなだめた。しかし靈夢は頭に血が上っているらしく、裕也の言葉を無視して何処かに行つてしまつた。

【裕也】

「あ、はあ。天子、少しいいか？」

ボーッとしていた天子だつたが裕也が言葉をかけると反応した。

【天子】

「あ、な、何かしら！」

天子は立ち上がり恥ずかしそうに答えた。裕也は疑問言おうとしたら、一人の女性が降りて來た。

【衣玖】

「総督様！大変です！博麗の巫女はいますか！」

怒鳴りながら天子のもとに近づいた。

【天子】

「あら、衣玖じやない。どうしたのよ？靈夢なら出て行つたけど。」

【衣玖】

「なんて事だ。私がもう少し早く來ていれば！」

衣玖はかなり慌てているようだつた。

【天子】

「一体如何したのよ？貴女がそんなに焦るなんて珍しい。私にも分かるように説明しなさい。」

【衣玖】

「は、はい。実は、天界が無くなりました。」

天子は信じられ無い顔をした。

【天子】

「な、んで、すつて？衣玖！詳しく述べなさい！今すぐ！」

天子は衣玖の胸ぐらを掴み上げた。

【衣玖】

「ぐ、が。そ、総督、妹、さ、ま。」

衣玖は苦しそうに呟いた。しかし天子は手を離さなかつた。天子は泣いていた。

【天子】

「あんたを信じてたのに！私より凄くて！私を大切に思つていたあんたを信じてたのに！あんたなら天界を守れると信じてたのに！なんで！如何してだ！答えろ！衣玖！」

衣玖はうなだれて・・・苦しそうに、涙を流して、小さな声で・・・謝つていた。

【衣玖】

「すみ、ませ、ん。天、子、さ、ま。」

衣玖が謝っていたが天子は頭に血が上っているらしく、聞こえて無い様子だった。静かに聞いていた裕也であつたが、衣玖のその言葉を聞いても何も感じようとしない天子の肩を掴み、おもつきり殴つた。その衝撃により、天子が掴んでいた衣玖の胸ぐらにある手が解き衣玖はその場に苦しそうに倒れ、天子は数m吹き飛ばされた。

【天子】

「つたいわね！何すんのよ！」

天子は怒鳴り上げながら答えた。それに裕也は静かに、そして、確かに聞こえる声で喋つてた。

【裕也】

「衣玖を見てみろ。」

【天子】

「あによ！ 一体!! あ。」

【衣玖】

「げぼ、ごほ、はあ、はあ。」

天子は自分を慕つてくれていた大事な友達を怒りで我を忘れ傷付けてしまった事に

後悔をした。だが、素直に謝れなかつた。自分の中にあるちっぽけなプライドが邪魔をしたのだ。

【天子】

「ふ、ふん。守れなかつた奴がいけないのよ！」

天子はそつぽを向きながらそう答えた。これには裕也も切れたらしく裕也は怒鳴り上げた。

【裕也】

「ふざけるのも大概にしろよ!! クソ天子!! 守れなかつた奴が悪いだ!? 何だその言い方は！ こいつは一生懸命に戦つたんだぞ!! 見てなくても分かる！ あいつを見ていいだな！ 貴様はずつと一緒にいるのにそんだ事も分からぬのか！ あいつをよく見てみろ！」

天子は裕也の靈力に少し恐怖を覚え震えたが、裕也が言つた様に衣玖を見てみた。そしたら傷だらけで服もボロボロだつた。・・・・見てて痛々しい程に。それを見て心が痛み出したが、それでも、やっぱりプライドが邪魔をした。

【天子】

「そ、それがどうしたのよ。守れなかつた負け犬にはお似合いの格好よ。」

裕也はギリリと歯ぎしりをした。その時に声が聞こえた。

(崩して。)

【裕也】

「あ、な、何だ？どつから。」

裕也は神経を集中させた。そうしたら天子の方から声が聞こえた。
 （誰か打ち碎いて。私のプライドを。そして謝れる勇気を。誰か！）

【裕也】

「そう、か。これは天子の思いか。なら、叶えてやる。」

天子は馬鹿にした言葉を並べた。

【天子】

「如何したのかしら？私の靈力に怖さでも感じた？人間の分際で私に楯突くなんて早い
 のよ。」

裕也は覚悟を決めた。天人と戦う覚悟を。そして謝らせる方法を。

【裕也】

「天子、俺と勝負しろ！」

【天子】

「はあ～？何であんたと勝負しなくちゃいけないのよ！」

【裕也】

「本当はありがとうって言いたいんだろ？謝りたいんだろ？でも、プライドが邪魔をし

て出来ないんだろう？だつたら勝負でお前のプライドを打ち碎いてやるよ！」

天子は心でありがとうと言いながらこう答えた。

【天子】

「ふん！できる物ならやつて見なさいよ。人間！」

【裕也】

「だが少しだけ待つてくれ。」

天子は飽きた顔をした。

【天子】

「はあ～？」

【裕也】

「衣玖を安全な場所に連れて行かないと駄目だろ。」

そう言うと衣玖を抱きかかえ天子に後ろを向け近くにある木々に衣玖をおいた。衣
玖は弱々しくこう言つた。

【衣玖】

「天子、様を、よろ、しく、お願ひ、します。」

衣玖はそれだけを言うと気絶した。

★

【天子】

「もういいかしら？」

衣玖を木々に休ました裕也は天子の元に行つた。

【裕也】

「行くぞ。」

【天子】

「ふ、きな。え？きや！」

裕也がそう言つた瞬間天子は地面に倒れていた。

【天子】

「な、何しなの！？」

天子は驚きながら裕也に聞いた。

【裕也】

「簡単な話だ。靈力を足と手に纏わせ高速で移動をしただけだ。次、行くぞ？」

【天子】

「く！舐めないで！」

要石「天地開闢プレス」

天子は非想の剣を付きながらスペルを唱えた。すると、地面が浮かび上がり要石の形

になり裕也を襲つた。因みにここまで時間5秒。

【裕也】

「甘い！」

拳技「青の鳥——鳳凰襲来拳——」

裕也の拳に青い炎が纏いそれが火の鳥となつて天子の技もろとも天子を吹き飛ばした。

【天子】

「が！ぐ！」

天子は直ぐに立ち上がりうとするが裕也の追い討ちが襲つた。

【裕也】

「まだだ！」

血付「針棘の山」

針と棘で出来た山が動けない天子に襲いかかつた。勿論天子はよける事が出来ずに全て食らつた。

【天子】

「かつは！」

天子は一瞬意識が飛びそうになつたが氣合で意識をとどめた。天子は苦しみながら

立ち上がつた。

【天子】

「天人を、舐め、ないでよね！」

乾坤 「荒々しくも母なる大地よ」

天子がそのスペルを使うと裕也の周りの地面が形を変え、四角い箱のような物になり裕也はその中に閉じ込められた。そしてそのすぐ後に天子は非想の剣を四角い箱の真ん中に突き立てた。

【裕也】

「があああ！」

裕也は大きい悲鳴を上げた。

【天子】

「は、はは、あつははははは！人間が私に敵う訳がないのよ！」

天子は少し涙を流しながら答えた。しかし裕也を閉じ込めている剣が刺さった四角い箱がいきなり揺れ始めた。

【天子】

「？ なに？」

【裕也】

「少しは、素直になつたんじやないか?」

裕也の声が聞こえたと思つたら四角い箱の上に立つていた。

【天子】

「な! どうして!」

【裕也】

「スペルカードのおかげだよ。」

裕也がそう言うと四角い箱のような物は崩れ去つた。天子は疑問をそのまま裕也に聞いた。

【天子】

「スペルカード?」

裕也は説明がしずらそうに頭を搔きながら答えた。

【裕也】

「見せた方が早いな。」

裕也はそう言うとスペルカードを取り出し唱えた。

歴史「自己像幻視（ドツペルゲンガー）」

そう言うと裕也が二人になつたその一人が答えた。

【裕也】

「こう言う事さ、分かったか？」

天子は笑っていた。今度は嬉しそうに。

【天子】

「あははは！あんたは面白いね。」

【裕也】

「約束は忘れるなよ？」

【天子】

「約束？何だっけ？」

裕也はニヤリと笑いながら答えた。

【裕也】

「おいおい忘れたのか？衣玖に謝るつて言つてたじやないか。」

【天子】

「ああ！言つてたわね。すっかり忘れてたわ。」

天子は笑いながら答えた。

【裕也】

「それじゃあ本気で行くぜ？」

【天子】

「来なさい！」

二人の裕也はスペルカードを使つた。

歴史「自己像幻視（ドツペルゲンガー）」

すると二人だつた裕也が四人になつた。それに天子は凄く驚いた。

【天子】

「な、何よそれ。反則じやない。」

裕也は笑つた。

【裕也】

「行つたじやないか。本氣で行くつて。」

その言葉に天子も笑つた。

【天子】

「ははははは！ そうだな！ 私も本氣で行くよ！」

【裕也×4】

「行くぜ！」

血付「針棘の山」

暴風「雷雲」

銃砲「赤銃花火（レッドジュウカスター・マイン）」

冰心「針棘の暴風雷雲」

〔天子〕

「天人を！舐めるなよ！」

全人類の非想天

裕也と天子は最大の靈力でぶつけあい七色の大爆発がおこつた。裕也は踏ん張つたが天子は耐え切れず吹き飛ばされ木にぶつかり止まつた。

〔裕也〕

「づうつ。があ。」

〔天子〕

「つ・・・・・あ・・・・・」

裕也は少しふらつきながら天子の元に言つてスペルカードを唱えた。

治癒「結界治癒力」

そう言うとオレンジ色の三角結界が現れその中にいる天子は傷が治つていった。しばらく結界が張つてあつたが、天子の傷が治ると同時にパリンッ！と、消えて無くなつた。そしてそのすぐ後に天子は目が覚めた。

〔天子〕

「う、あ。くう。あー負けた負けた。」

天子は笑いながら答えた。

【裕也】

「どうだ今の気持ちは。」

【天子】

「清々しいわね。」

【裕也】

「それじやあ俺が勝つたからしつかりやれよ？ いつでも相手をしてやるかな。」

天子は恥ずかしそうにしていた。天子は衣玖のところに歩いて行つた。そこには傷がまだあつたが、さつきより元気になつっていた。

【衣玖】

「総督妹様、あの、す」

衣玖が謝ろうとした瞬間先に天子が謝つた。

【天子】

「衣玖！ごめん！」

【衣玖】

「そ、総督妹様！？」

衣玖は驚いた。いつもは謝らなくワガママで自己中の天子が自分で謝つたのだ。だ

から衣玖は驚いた。

【天子】

「え、こんな私だけど付いて来てくれるかしら。衣玖。」

衣玖は感動しながら涙を流しながら答えていた。

【衣玖】

「ええ、私は、一生付いて行きますよ。総督様。」

【天子】

「ありがとうございます衣玖。これからもよろしく。」

天子はそう言いながら手を差し出した。衣玖はその手を握り返した。言葉をくわれながら。

【衣玖】

「こちらこそよろしくお願ひします。」

衣玖の見せたその顔は笑顔だった。

調査と運命

上空・元天界

靈夢は天界に来ていたのだが目の前の風景に言葉を飲んだ。

【靈夢】

「なに、これ。」

靈夢の前には”天界”だつた物があつた、と言うのも判断材料が空を飛んだまま立ち尽くしている天人達がいるだけだつたからだ。靈夢はその中の一人に話を聞いた。

【靈夢】

「何があつたの！」

天人の一人が力無く静かに語り始めた。

★

その話によるといきなり一人の少年がいきなり現れ、破壊して行つたのだと言う事だ。靈夢は少し信じられなかつたが今の現状で嘘を付く必要が無いのは明白、なので信じる事にした。

【靈夢】

「成る程ね。」

「さて、どこに行こうかしら。．．．とりあえず紅魔館かしら。」

【靈夢】

「さて、どこに行こうかしら。．．．とりあえず紅魔館かしら。」
靈夢は怖い顔をしながら紅魔館に向かつた。



紅魔館・レミリアの部屋

レミリアは何かを悟つた様な顔をしながらつぶやいた。

【レミリア】

「時期に来るわね．．．咲夜。」

指を鳴らしながら名前を呼ぶレミリア、すると10秒もしない内に一人の少女が現れた。

【咲夜】

「何で御座いましょうか。」

【レミリア】

「時期に靈夢がここにやつて来るわ。靈夢が来たらここに案内をしてね？それから、攻

撃して来たら迎撃しなさい。付いでに美鈴も起こしておきなさい。」

【咲夜】

「分かりました、レミリアお嬢様。」

咲夜はそう言うとさつき見たいに消えた。後に残つたのはレミリアだけであつた。そのレミリアは紅茶を飲みながらつぶやいた。

【レミリア】

「ふう。今日は荒れそうね。」

そう言うレミリアの顔は少し微笑んでいた。

★

紅魔館・正門前

大きな葉を傘にして門の前には紅美鈴がいた。

【美鈴】

「・・・・・」

警備？をしている美鈴の所に咲夜がやつて來た。

【咲夜】

「美鈴、おきなさい。」

【美鈴】

「・・・・・」

【咲夜】

「美鈴？」

咲夜は返事が無かつた美鈴の傘を取つた。そして美鈴の顔を見た咲夜は何かに気づいた。

【美鈴】

「・・・・ZZZ」

【咲夜】

「こいつ、寝てやがる。・・・」

幻符「殺人ドール」

大量のナイフが生産され美鈴に向かつて向かつて行つた。

【美鈴】

「！」

美鈴は避けようとしたが咲夜はまたスペルカードを使った。

幻世「ザ・ワールド」

時が止まつた。世界に静寂が流れ、咲夜しか動く者は無い。

【咲夜】

「さて。」

咲夜は逃げようとしていた美鈴をナイフのある位置に置いた。

【咲夜】

「そして時は動き出す。」

【美鈴】

「え？・・・

ぎやああああああ
!!!」

美鈴は串刺しになつた。しかし美鈴は妖怪なので、直ぐに傷が治つた。

【美鈴】

「あいたたた。いきなり何するんですか咲夜さん！」

美鈴はそう良いながら立つた。

【咲夜】

「！ 貴女がもたもたしているから來たじやない。」

【美鈴】

「え？」

美鈴は咲夜の言葉に目を丸くした。何故なら機嫌が悪い靈夢がいたからだ。

【咲夜】

「この紅魔館に用かしら靈夢？」
靈夢は静かに答えた。

【靈夢】

「レミリアを出しなさい。」

【咲夜】

「理由を言いなさい。理由も無しにお嬢様の所には近づけさせる訳にはいか無いのよ。」

靈夢はめんどくさそうに答えた。

【靈夢】

「はあ、分かつたわよ。レミリアに会いたい理由はこの降り続いている雨に関してよ。
さあ、答えたわよ？通させて貰うわ。」

靈夢は殺氣を立てながらそう答えた。二人は金縛りにあつた見たいに動けたかった。
そして、一言だけ咲夜がつぶやいた。

【咲夜】

「どうぞ。」

靈夢は何も言わずに紅魔館の中に入つて行つた。

【美鈴】

「凄い殺氣でしたね、動けませんでしたよ。」

【咲夜】

「美鈴、あの靈夢に戦つて勝てていたと思う。」

【美鈴】

「……殺してもいいなら、ですね。私はそんな事したくありませんし、やる気もないですよ、咲夜さん。」

この時の美鈴を見て咲夜はもしかしたら私が一番弱いんじやないかと感じた。



紅魔館・レミリアの部屋

【レミリア】

「時期に来るわね。」

レミリアがそう言つた瞬間扉が吹き飛び博麗靈夢が現れた。

【靈夢】

「少しいいかしら？」

【レミリア】

「あら、何か用かしら？」

【靈夢】

「あんた、この雨や天界が無くなつた理由、分かる？ 分からなかつたらあんたの能力を使

いたいんだけど。」

レミリアは溜息を付いた。

【レミリア】

「私は完璧超人じや無いのよ？そんな事出来る訳無いじゃない。それから、雨や天界の事は知らないわよ。」

靈夢は溜息をつきながらレミリアに質問した。

【靈夢】

「それじゃあ、未来は分かる？」

レミリアは靈夢を睨み付けながら靈夢に質問した。

【レミリア】

「……それを、知つて如何するの？」

【靈夢】

「それに背く。」

レミリアは笑いながら答えた。

【レミリア】

「ふふ。いいわ、教えてあげる。貴女はもうじき動けないほどの攻撃を受けるわ。そして、この異変を解決するのは、ボロボロになつた貴女と貴女よりボロボロな男よ。私が

ら言えるのはここまでよ。」

靈夢はレミリアの話を聞き少し考えながらこう答えた。

【靈夢】

「ふーん。そう。でも、何とかなるでしよう。それじゃあ、失礼するわ。」

靈夢は帰ろうとしたがレミリアが止めた。

【レミリア】

「ちょっと待つて。」

【靈夢】

「ん? 何?」

【レミリア】

「あの人間。裕也と言ったかしら、あの子をなるべく早く連れて来てくれない?」

靈夢はこう答えた。

【靈夢】

「・・・分かつたわ。お礼に連れて来てあげる。直ぐにとは言わないけど。」

【レミリア】

「分かつたわ、それで良い。でも、早くお願ひね。」

靈夢は手を上げひらひらさせて、去つて行つた。レミリアは冷えた紅茶を口に付けな

がらつぶやいた。

【レミリア】

「裕也に会わないと・・・。」



霧の湖

【裕也】

「とりあえず来て見たが霧が濃いな。」

裕也は霧の湖に来ていた。と言うのも、衣玖に聞いたからだ。あの後直ぐに衣玖に話を聞いた。それによると。

初めに天界を壊したのは少年。

そこからトントン拍子に崩れた。

その少年の特徴は金と銀色の髪と白色の服を着ている。

レミリアなら何かを知っているかも知れない。

との事を聞いた。それで裕也は霧の湖にあると言う紅魔館に向かっている所だ。

【裕也】

「前が見え無い。ヤバイな。」

裕也はとりあえず歩いて見たその時一人の妖精が現れた。

【チルノ】

「この湖に何の様だ。」

そこに現れたのは威圧感とカリスマ性を持つた最も青く、そして、冷たい目を持つた妖精であつた。裕也は気を引き締めながら話した。

【裕也】

「お前の名前は？」

その妖精は静かに答えた。

【チルノ】

「氷妖精のチルノだ。それで？この湖に何の様だ。」

【裕也】

「俺は紅魔館に行きたいだけだ。ここに何かをする為にきた訳じやない。」

裕也とチルノが話をしていた時に一人の妖精がまた現れた。

【大妖精】

「チルノちゃん！いつものチルノちゃんに戻つて！」

その妖精はチルノの青に対して緑色だつた。裕也は心の中で急展開過ぎると思つた。

【裕也】

「お前は？」

【大妖精】

「私の名前は大妖精と言います。お願ひします！チルノちゃんを元に戻して下さい！」

大妖精は大分混乱している様で裕也が悪者見たいな言い方をしていた。チルノはそれに対しこう答えた。

【チルノ】

「大妖精。私は普通だ。そんなひどい事は言わ無いでくれ。」

【裕也】

「そう言っているが。」

【大妖精】

「いつものチルノちゃんじゃないもん！この雨が降つて来てからだもん！絶対に変だよ！」

【裕也】

「なるほどな。チルノ、俺と戦つて見ないか？」

チルノは驚いた顔をした。

【チルノ】

「私と勝負か。・・・いいだろう。暇潰しにしてやる。」

【裕也】

「大妖精、下がつていてくれ。」

【大妖精】

「わ、分かりました。きっと、チルノちゃんはこの雨にやられただけなんです。だから。」

裕也は大妖精の頭の上に手を乗せなでた。

【裕也】

「安心しろ、少し手荒くなるかも知れないがな。」

裕也は笑顔で答えた。大妖精は裕也の本気の表情を見て、この人なら大丈夫と信頼の表情を見せながらこう答えた。

【大妖精】

「はい！」

大妖精は下がつた。

【チルノ】

「言つたからには私を楽しませろよ？」

【裕也】

「こい！」

裕也は身構えた。チルノはスペルカードを使つた。

水鏡「水鏡氷河」

裕也の周りに鏡が現れ裕也を囲み鏡の中から大きい氷が裕也に向かつて全方位に降り注ぎ周りの空気が急激に下がり始めた。裕也は直ぐ反応しスペルカードを使った。

豪氣「鬼神大発山」

裕也は迫つてくる大きい氷を避けながら目を瞑り赤くなつた拳と周りに意識を集中させた。すると目を瞑つていた筈なのに、光が見えて来た。裕也は手をその光に当て自身の前まで近付け、その目に向かつて赤くなつた拳を振り下ろした。すると、パリン！と音がしてチルノの水鏡氷河が崩れ去つた。

【チルノ】

「・・・中々やるな。」

チルノは少し眉を歪ませたが直ぐに表情を引き締めた。

【裕也】

「この程度か。」

裕也はチルノを睨みながら答えた。それにチルノは、笑いながら答えた。

【チルノ】

「はは！いや、すまない。少し舐めていた様だ。今度は本気で行くぞ！」

【裕也】

「！ させるか！」

チルノはスペルカードを出そうとしたが、裕也がいち早く気付き先制した。

【裕也】

「こつちも行くぞ！ ミックススペル！」

そう言いながら裕也は二つスペルカードを出しそれを合わし使った。すると、そこから新たなスペルが現れた。裕也は二つのスペルをキヤンセルし新たに出て来たスペルカードを使つた。

風拳 「鳳凰襲雷雲」

拳に風が纏わり付きチルノに向かい発射した。チルノはスペルカードを使うのを辞め、裕也の拳から放たれた吹き荒れる風をチルノは必死になつて避けた。

【裕也】

「まだだ！」

【チルノ】

なつた。

「なんだ？ 止んだのか？ なら。」

チルノはニヤツと笑いスペルカードを使つた。

霧 「惑わす幻想の霧」

裕也の周りに見えない程の霧が立ち込めた。

【チルノ】

「どうだ！これで周りが見え無いだろう！」

【裕也】

「甘い！」

裕也は纏つていた風の鎧を一気に解き放ち霧を吹き飛ばした。
これにはチルノも驚いた。

【裕也】

「驚いている暇は無いぞ！せやあ！」

裕也はチルノとの距離を一気に縮めチルノの腹に手を当て、おもつきり押し付けた。
すると、裕也の手から青い炎の龍が現れチルノを包み込み湖の中に落ちて行つた。

【裕也】

「やばい。やり過ぎたか？」

【大妖精】

「チ、チルノちゃーん！」

大妖精はチルノの落ちた所に近付いた。湖がブクブクと泡を出していたが大妖精が

その場所に

付いた瞬間ザバツ！と大きな水飛沫を上げチルノが現れた。

【チルノ】

「つたいわね！何すんだこの馬鹿！」

【大妖精】

「チルノちゃん！元に戻ったんだね！」

チルノは目を丸くした。

【チルノ】

「あ、あれ？ 大ちゃん？ 如何してここに？ それより、あれ？ 確かあたいは森の中にいた
筈。」

大妖精はチルノを抱き締めた。

【大妖精】

「そんなのはどうでもいいよ！ 私はチルノちゃんが元に戻ったんだから。」

裕也は微笑みながらこう答えた。

【裕也】

「大妖精、よかつたな。」

【大妖精】

「はい！」

チルノは裕也が近づくと声を上げた。

【チルノ】

「あー！お前はあたいを吹き飛ばした奴だな！さいきよーのあたいに挑む何て命しらすな！」

【裕也】

「しらす？・・・もしかして、命知らずじやないか？」

チルノは顔を赤くしながら誤魔化した。

【チルノ】

「よ、妖精はこうゆうのよー！」

【裕也】

「ゆうじやなくて、この場合は、こう言うのよーだ。」

【チルノ】

「う、うるさいーうるさいーす、少し間違えただけだもん！」

チルノは叫びながら裕也に向かつて弾幕を放つた。

【裕也】

「・・・ぐ！」

裕也はその弾幕を避けようとはしなかった。裕也の身体は弾幕を浴び、湖に落ちた。

「へ？」

【大妖精】

「え？」

チルノと大妖精は驚いた、何故ならさつきまでチルノ以上の靈力を出していたからだ。靈力は相手の強さに関わる。靈力が強ければ強い程その相手は強く、弱ければ弱い、さつきまでの裕也は完全にチルノより靈力が上だつたから二人は驚いた。湖に落ちた裕也は、湖から上がりチルノ達を呼んだ。チルノ達は裕也の元に向かつた。そしてチルノは裕也に質問をした。

【裕也】

「ふう。」

【チルノ】

「あんた、手を抜いたわね。」

【裕也】

「何故、そう思う。」

【チルノ】

「あたいが打つた弾幕をあんたが自ら当たりに行つた様に思つたから。」

【裕也】

「そうだ。」

【チルノ】

「なんでもわざと負けたの？」

裕也はチルノの言葉に真剣な顔をして答えた。

【裕也】

「これは噂だが妖精は頭が弱いらしい。」

【チルノ】

「？」

チルノは裕也の言つている事が分からず首を傾げた。裕也はチルノにも分かる様に説明した。

【裕也】

「つまり、妖精は皆馬鹿つて事だ。」

【チルノ】

「馬鹿つて言う奴が馬鹿なんだぞ！」

チルノはムキー！と手を上に上げ裕也を威嚇した。裕也はチルノに向かい微笑みな

がらこう答えた。

【裕也】

「でも、馬鹿つて凄い事なんだぞ？」

〔チルノ〕

「？」

裕也

「馬鹿は確かに厄介だ。理解しないし、馬鹿みたいに自分より強い敵に向かつて いるし、相手の事を理解しない。でも、その汚れの無い瞳と疑わない心。だから皆信用するし、付いてもくる。だから、自信を持つて良い。」

チルノはその言葉に心が暖かくなつて行く感覚がした。チルノは顔を赤くしながらこう答えた。

【チルノ】

「あ、ありがとう。」

〔裕也〕

「いや、いいさ。それじゃあ、俺は紅魔館に行くから。」

ナルノ

「またね！」

【大妖精】

「また来て下さい！」

裕也は一人の妖精に別れを告げ、紅魔館に向かつて行つた。



紅魔館・門前

裕也は門の前に付いた。そこにいたのは一人で何かをつぶやいている中国だった。

【美鈴】

「ううう、居眠りが出来無い。寝たら一年食事を抜かれる。頑張れ私！今日だけだ！」

裕也は声をかけて見る事にした。

【裕也】

「済まないが、ここにレミリアって奴がいると思うんだが？」

【美鈴】

「！ どなたですか？」

美鈴は直ぐに裕也に向かつて殺氣を放つた。

【裕也】

「俺はレミリアに会いに来た。」

【美鈴】

「ほう、そうですか……どの様な用件でいらしたのですか？」

【裕也】

「この降り続いている雨に付いての事を聞きに来た。」

【美鈴】

「……貴方、強いですね。」

【裕也】

「いや弱い。妖精に負ける位の力しかない。」

【美鈴】

「そうですか。」

【裕也】

「！」

美鈴はいきなり裕也の目の前に立ち、拳を振るつて來た。裕也はとっさに受け流し、カウンターを美鈴に決めた。美鈴はそれを防ぎ裕也との距離を離した。

【美鈴】

「強いじやあ、ありませんか。」

【裕也】

「何のつもりだ。」

裕也は殺氣を出しながら答えた。

【美鈴】

「いや、この雨で暇をしていましてね。少し、相手をしてもらえませんか?」

【裕也】

「・・・・相手をしたら、レミリアに取り付いで貰えるのか?」

【美鈴】

「いいですよ。私に勝てたら、ですけどね。」

美鈴は静かに中国拳法の構えをした。

【裕也】

「仕方ないか。格闘はありなのか?」

【美鈴】

「どちらでも。」

裕也は少し考え、美鈴に挑戦しに來た。

【裕也】

「なら、格闘も有りで。」

美鈴は笑つた。

【美鈴】

「はは。いいですよ。受けて立ちます！」

【裕也】

「こつちから行くぞ！」

裕也は美鈴との距離を縮め弾幕を周囲に展開した。すると、美鈴に数発、美鈴の周りの地面に数発当たり土埃が立ち込めた。美鈴は自分にやつて来た弾幕を気を纏わせた拳で弾いた。

【美鈴】

「やりますね。」

【裕也】

「まだだ！」

裕也は土埃を利用し美鈴の懷に飛び込みスペルカードを使つた。

拳技「青の鳥——鳳凰襲来拳——」

美鈴はよける事が出来ずに直撃した。裕也から出た青い炎を纏つた龍が美鈴を包み込み次に凄い風圧が美鈴を襲い美鈴は後方に吹き飛ばされた。

【美鈴】

「はっ！」

美鈴は靈撃でダメージを最小限にとどめた。

【裕也】

「な!?」

【美鈴】

「今度はこつちから行きます！」

彩符「極彩颶風」

赤、黄色、緑、白と色々な種類の弾幕が風を受け不規則な動きをしながら裕也に向かつて行つた。

【裕也】

「く！」

裕也は風に煽れながら何とか弾幕を避けていた。

【美鈴】

「まだまだ行きますよ！」

美鈴は弾幕の台風が終わる直前にスペルカードを使った。

幻符「華想夢葛」

美鈴は弾幕でカーテン見たいな物を4つ作り裕也の周りに展開した。すると、いきなりカーテンで出来た弾幕がパリン！と割れ、碎け散った欠片が裕也を襲つた。

【裕也】

「な!?く！」

暴風「雷雲」

裕也は台風を自分の周りに出し、攻撃を防いだ。

「中々。」

【美鈴】

「く！」

【裕也】

「それでは行きます・・・よ！」

美鈴は足に力を込めるごとに反動を使い裕也との距離を縮めた。そう、美鈴は肉弾戦を挑んで来たのだ。

【裕也】

「待つてたぜ！この時を。」

【美鈴】

「なに!?」

裕也はスペルカードを取り出し美鈴の胸当たりに押し当てながら唱えた。

幻想「夢想電炎撃」

炎に包まれた電が炎の夢想封印見たいな感じになり零距離の美鈴に当たり吹っ飛ばし門を壊し庭に入つた辺りでようやく止まつた。

【美鈴】

「!!?!

美鈴は言葉に鳴らない悲鳴を上げながら氣を失つた。

【裕也】

「やば、やり過ぎたか？」

裕也は美鈴の元に駆け寄つた。美鈴は気絶をしていた。

【裕也】

「ふう。」

治癒 「結界治癒力」

三角の結界が美鈴の周りに展開し、美鈴の傷を癒し始めた。しばらくすると美鈴の傷は治り、目を覚ました。

【裕也】

「大丈夫か？」

【美鈴】

「ええ。しかし、強いですね。何か形でも習つていたんですか？」

「いや、特には。でも、ここに来てから戦う事が多くなつたからその時に覚えたから、形
は無いな。」

【美鈴】

「そうですか。」

【裕也】

「案内はしてくれるな？」

【美鈴】

「わかりました。しばらくお待ち下さい。」

美鈴が咲夜を探しに行こうとした瞬間。

【咲夜】

「その必要は無いわ。」

その言葉と共に咲夜が姿を表した。

【裕也】

「あんたは？」

【咲夜】

「始めて、私の名前は十六夜咲夜と申します。レミリアお嬢様の命令で貴方をお迎

えに参りました。」

裕也は咲夜の言葉に答えず美鈴に声をかけた。

【裕也】

「美鈴、もう大丈夫か?」

【美鈴】

「え、あ、は、はい。大丈夫です。」

【裕也】

「そうか、それじやあ。」

歴史「自己像幻視（ドツペルゲンガ）」

裕也が一人に分裂した。美鈴はそれに驚いた。

【美鈴】

「なーーこれは一体。」

【裕也】

「もう一人の自分を出した。」

【美鈴】

「と、言いますと?」

【裕也】

「分かりやすく言うと、数分前の自分を出した。因みに、力から靈力まで数分前の俺と同じだ。」

【美鈴】

「す、すごいですね。」

【裕也】

「どんな事でも頼めよ？門の整備とかな。」

【美鈴】

「え？あ！」

美鈴の目の前にはボロボロになつた庭と門があつた。

【美鈴】

「あははは。はあ。それではお借りしますね。」

裕也が返事をしようとしたら、咲夜が少し怒り口調で話して來た。

【咲夜】

「あなた！失礼でしよう！人が案内をすると言つてゐるのに無視をするなんて。」

裕也は咲夜の言葉にこう答えた。

【裕也】

「ナイフを隠し持つてゐる人には言われたく無いな。」

【咲夜】

「な！」

咲夜は驚いた。何故なら少し見ただけでナイフを持っていた事が分かったからだ。

【裕也】

「まあ、用心に持つているつて言うなら別にいいが、数百本持つているのは用心じやなくて、いつでも殺る事が出来るから従えとの意味とも取れる。俺は臆病者でね。怖くて一緒に行け無い。だから、ナイフを減らしてくれ無いか？」

【咲夜】

「はあ、わかりました。しばらくお待ちを。」

咲夜はそう言うと直ぐに消え、裕也が瞬きをした瞬間にまた現れた。

【咲夜】

「これで良いですか？」

【裕也】

「ありがとう。」

裕也達は中に入つて行つた。

★

紅魔館・地下部屋

【フラン】

「かゞごーめ、かゞごーめ、かゞごのなゝかのとゝりいわゝ、いゝつーいゝつーでゝあーう、よゝあゝけゝのゝばんに、つゝるとかゞめが、すゝべつた、後ろのしょゝめんだゝれ？」

フランは歌を歌つていた。

一人で静かに。

誰かを待つみたいに。

【フラン】

「面白そゝな人間が來たわね。ふふ、あいつはどうするのかな？いや、私が奪おう。そつちの方が面白そゝだからね♪」

フランは扉の前にあつた結界を破り外に出た。

【フラン】

「パチュが來るかしら？まあ関係無いわね。もし、邪魔をするなら、ふふ。楽しみ♪」

フランは胸を踊らせながら外に出た。

★

紅魔館・ヴァル魔法図書館

【パチュリー】

「むきゅ？これは。」

パチュリィはいつもの通りに本を読んでいた。そんなパチュリィは結界が破られた事を地下部屋にある魔方陣で、知つた。

【パチュリィ】

「はあ～。またなの？」

パチュリィは溜息を付いたと思つたら直ぐにキリツとし、小悪魔に命令をした。

【パチュリィ】

「私がある程度防ぐからこあは、レミイに伝えて。」

【こあ】

「わ、わかりました！」

小悪魔はパタパタと羽をバタつかせ、ヴワル魔法図書館を後にした。その時丁度フランがパチュリィの前にやつて來た。

【フラン】

「あは♪パチュリィ、そこを通させて貰うよ☆」

【パチュリィ】

「少し付き合つて貰うわよ？」

パチュリィはそう言うと戦闘体制に付いた。

【フラン】

「ふーん。やるんだ♪別に良いけど・・・・・・タノシマセテヨ?」

【パチュリ】

「こあ、早く来てね。」

ズドン!と、大きい音がヴワル魔法図書館に鳴り響いた。



紅魔館・レミリアの部屋

こんこん、とドアを叩く音がレミリアの耳に伝わった。次に聞こえて来たのは、咲夜の声だった。

【咲夜】

「お嬢様、裕也様をお連れしました。」

レミリアはようやく來たかと安堵の表情を浮かべたが直ぐにカリスマ満点の顔に戻り、こう答えた。

【咲夜】

「失礼します。」

【裕也】

「お前がレミリアか?」

【咲夜】

「こらー! 失礼でしよう!」

【レミリア】

「ふふ。別に良いわよ。咲夜、しばらく一人にしてくれ無い?」

咲夜は少し不服な顔をしたが自分の主の命令だから渋々従つた。

【裕也】

「さて、俺に何の用だ?」

【レミリア】

「実は。」

レミリアが説明をしようとしたら壁が崩れそこからフランが姿を現した。

【フラン】

「みーつけた♪」

【レミリア】

「な!? どうして貴女がここに!」

【裕也】

「? お前は。」

!?

裕也はいきなり蹲つた。フランの感情、心の声が急に聞こえて来たのだ。

(みつけたみつけたみつけたみつけた強い人間面白そうな人間みつけた、ミツケタ。)

「ぐ、いきなりかよつ！」

【レミリア】

「ど、どうしたの!? 大丈夫！」

レミリアは心配そうに裕也の元に向かつた。

【裕也】

「だ、大丈夫だ。」

裕也は汗だくで全然大丈夫そうに見えなかつた。レミリアはどうしてここにいるかをフランに聞く事にした。

【レミリア】

「フラン。貴女、何でここにいるのかしら? 早く自分の元に戻りなさい。」

その言葉にフランは邪魔そうな顔をしながらこう答えた。

【フラン】

「五月蠅いな、邪魔するなら……コロスヨ? オ姉様」

レミリアは辛そうな顔を一瞬だけ見せたが、直ぐに凜とした表情に戻しフランにこう言つた。

【レミリア】

「戻ら無いなら……痛い目にあつてから戻るかしら？」

レミリアがフランに立ち向かおうとした時、裕也によつて止められた。

【レミリア】

「な、何を。」

【裕也】

「お前が俺を読んだ理由、分かつたぜ。」

【レミリア】

「え？」

【裕也】

「フランの狂氣をどうにかして欲しい、だろ？」

【レミリア】

「!? どうしてその事を！」

【裕也】

「俺の能力に色々な声が聞ける程度の能力があつてな。フランの心の声とお前の悲しそうな顔を見れば分かる。これでもに戦場を生き抜いた身な者だからな、そんぐらい分かる。ここは、俺に任せてくれ無いか？」

レミリアは一瞬考えたが裕也の真剣な表情に折れた。

【レミリア】

「分かった。宜しく頼むわ。」

裕也は二カツと笑いながら答えた。

【裕也】

「おう。勿論だ！・・・さて。」

裕也は気合いを引き締めフランの元に行つた。

【フラン】

「始めて♪私はフランドール！貴方は？」

【裕也】

「裕也だ。」

【フラン】

「じゃあ裕也お兄ちゃんだね♪」

【裕也】

「（ふむ。）フラン。御託は良いからかかつて来い。」

【フラン】

「あははは♪良いの？本気を出して。」

【裕也】

「ああ、こい。（優曇華、妹紅、力、貸して貰うぞ！）

裕也は目を瞑り一つのスペルカードを取り出し唱えた。

友情「信頼の力」

裕也がそう唱え目を開けると裕也の髪が白色になり目が赤く光輝いた。まるで女性の様な気品とカリスマが溢れていた。

【裕也】

「さあ、始めようか。お前の狂氣を封印してやる。」

裕也はフランの狂氣を治す戦いが始まった。

運命と裕也

紅魔館・レミリアの部屋

【裕也】

「行くぞ。」

裕也が手を翳すと炎が現れ、それを丸めフランに投げた。

【フラン】

「無駄だよ♪」

フランは片手を炎の前に出し、こう言つた。

【フラン】

「きゅつとしてドカーン♪」

フランがそう言いながら片手を握つた。すると炎が消滅した。裕也はその隙を見て近くに近寄りフランの頭を持ち、床に強く叩き付けた。すると床が抜け、裕也達は下に落ちていつた。

【レミリア】

「裕也、フラン、無事で。」



紅魔館・フランの地下部屋

レミリアの部屋からフランの地下部屋までフランの頭を床に叩き付けながら付いた。裕也はフランの地下部屋の天上に穴を開け、床に着く前にフランを蹴り飛ばした。フランはそれだけの攻撃を受けながら無傷だった。

〔フラン〕

「へへ、中々やるね。これは楽しめそう♪」

〔裕也〕

「やつぱり無傷だつたか。だが、これで良い。まずは、レミリアからフランを離すのが先決だつたからな。」

裕也は気を引き締めた。

〔フラン〕

「今度は私から行くよ♪」

禁忌「クランベリートラップ」

大量の赤みがかつた青色の弾幕が裕也を襲う。

【裕也】

「よし。」

裕也は赤い目で全ての弾幕を見た。すると弾幕は近くの弾幕に当たつて行き消滅した。

【フラン】

「凄い凄い。如何やつたかは知らないけど凄いね、裕也お兄ちゃんは。じゃあ、これはどうかな？」

禁弾「スター・ボウブレイク」

上が赤、下が紫、周りが青色の濃い弾幕が裕也に向かつて放たれた。

【裕也】

「ふう。行くぞ！」

裕也はそう言うと全身に炎を纏わせ、フランのスペルを正面から向かつていった。

【裕也】

「やあ！」

裕也は弾幕が当たるか当たらないかの所で、纏つていた炎を片腕に集中し、一気に解き放つた。フランの弾幕は裕也の炎の塊が飲み込んで行き、消えた。

【フラン】

「へー凄い。これで二つ目だよ。じゃあ、次に行くよ♪」

禁弾 「カタディオプトリック」

黄色の弾幕が大量に放たれ、床や壁に当たりその弾幕が反射し不規則な動きをしながら裕也を取り囲むようにして、反射した。

【裕也】

「ぐー！」

裕也はもう一回自分の体を炎に包ませて、弾幕を防いでいた。

【フラン】

「あはは♪頑張る頑張るね♪いつまでタエレルカシラ」

【裕也】

「ぐー！」

裕也は耐えていた。

【フラン】

「へー。まだ耐えるんだ。なら、これはド才？」

禁忌 「恋の迷路」

濃い密度の弾幕が囲いのようになり裕也を囲んで行つた。しかし裕也はさつきの弾幕。禁弾 「カタディオプトリック」 を避けていてそれどころでは、無かつた。

【裕也】

「これは、ヤバイか！くそ！仕方ないか。」

裕也は自ら弾幕に当たりに行つた。

【裕也】

「があああああ！！！」

裕也はその弾幕に当たり吹き飛ばされ、壁に体を叩き付けられた。

【裕也】

「かはっ！」

裕也はその場に倒れこんだ。

【フラン】

「アハハハ♪ここまで良くやつたね。褒めてあげるよ♪でも、もうお終い見たいだね。
それじやあ、死んじやえ♪」

フランは止めた弾幕を裕也に向かつて放つた。

【裕也】

「!? ごほ！かつ、は」

裕也はその弾幕を受け、崩れた瓦礫の下敷きになつた。フランは少し悲しい表情をした。

【フラン】

「貴方も、駄目だった。私の狂気を治した人はいたけど、皆、帰っちゃった。その度にまた、蝕まれる。無理なのかな？外に出て見たい。力を操りたい。皆と、遊びたいよ。」

フランは泣いていた。フラン自身、狂いたくて狂つた訳じやない。皆がそう望んだから、皆がそう決め付けたから、フランは狂気に蝕まれていた。フランはそれを認めるしか無かつた。嫌われたく無いから、邪魔者になりたく無かつたから。しかし、皆が決め付け、望んだ事になつてもやっぱり邪魔者扱いを受けている。

【フラン】

「やつぱり、私は生きていちゃ駄目なのかな？でも、何でだろ？今までそんなに考え無かつたのに、裕也お兄ちゃんと戦つて見てもしかしたら、ひょっとしたらって、期待しちゃつた。でも、それは、私の勘違い。」

「違う。」

【フラン】

「え？今、誰が。」

「狂気は治せる。絶対に！」

【フラン】

「!? まさか！」

フランは瓦礫に埋まっている場所を見た。

【裕也】

「うおおおおおおおお!!」

「フエニックス再誕」

その声が聞こえた時、瓦礫からフェニックスのような形をした炎の真ん中に裕也がいた。その姿は本当に不死鳥なんじや無いから思える程、綺麗だった。

【ラン】

「うわー綺麗。」

フランは余りにも美し過ぎて見惚れていた。

【裕也】

「フラン！ 今度は、こっちから行くぞ！」

再誕「淨化と再生」

裕也はスペルカードを使つた。するとフエニックスの形をした炎が太陽のように暖かく、そして神々しく光輝いた。

【ラン】

フランは狂つたかのように笑つた。

〔フ
ラン〕

「凄い！凄いや！ワタシモ本気でイカナキヤシツレイダ！こつちも！全力でイクヨ！」

QED—495年の波紋

全ての終わりと495年の思いを波紋と言う広がつて行く輪つかに込めそれらを一ヶ所に纏めそして、解き放つた。フランの全ての力と想いを最後の弾幕に乗せて。

〔裕也〕

「だあああああああ
!!!」

〔フ
ラン〕

—アハハハハ!! シネエ!

二人の弾幕、いや、想いがぶつかり合つた。その瞬間紅魔館に地震見たいな振動が鳴り響いた。



紅魔館
· 門

【美鈴】

「うわ、うわ、な、何だこの靈力と地震。」

【裕也】

「大丈夫ですか！・美鈴さん。」

【美鈴】

「あ、はい！（妹様。）



紅魔館・廊下

【咲夜】

「なーーこれは!?早くお嬢様の所に行かないと！」

咲夜は掃除を辞めレミリアの元に向かつた。



紅魔館・レミリアの部屋

【レミリア】

「!? この靈力は！フラン。」

レミリアはフランと裕也の無事を祈つていた。



紅魔館・フランの地下部屋

【裕也】

「どうした！ フラン！ お前の狂気はそんな物か！」

【フラン】

「アハハハハ！ アツハハハハは、げぼ、げええ！」

フランは血を吐き出した。

【フラン】

「な」に『ごれ、げほ、ごぼ！』

【裕也】

「な、何だ！ 一体！」

裕也は混乱していた。フランがいきなり吐いたからだ。弾幕はまだ続いている。だから靈力の問題じや無い。裕也は考えた。

【裕也】

「？ まさか！」

裕也は一つの可能性を考えた。それは、フラン自身が皆が、つまり幻想郷が決めたフランは“気に触れている”をはね返そうとしている可能性！

【裕也】

「それなら、納得だ！」

幻想郷は全てを受け入れる人の想いも、どんな殺人鬼でも、そして、人が決めた事も。いつかは知ら無いがフランは狂氣が当たり前。それが皆の、幻想郷当然になつてしまつた。だから幻想郷はその決まりを受け入れた。当たり前だ、皆がそう”決めた”からだ。だからフランは狂氣、気に触れていなければならない。でも、フランは自らその決まりを跳ね除けようとしている。だからそれが体に負担をかけている。裕也はそう確信していた。

【裕也】

「やばい！早くフランを何とかしないと！フランが死ぬ！くそ！どうする。 . . . !
そうだ！一か八かだ！」

【フラン】

「があああ！頭があああああ！痛い痛い痛い痛い痛い痛い誰か誰か誰か誰か誰か誰か助けて助けて助けて助けて助けてもうやだ普通が良い褒められたい狂氣を治したい外に遊びたい頭を撫でて貰いたいあああああああ!!!!」

フランは苦しみの余り、うずくまつた。

【裕也】

「フラン！こっちを見ろ！」

フランは顔が上げる事が出来なかつたから、首を裕也の方に向けた。

〔裕也〕

「痛いが我慢しろよ！ づああああ！」

裕也は495年の波紋を破り、フェニックスの姿のままフランの腹をおもつきり殴りそのまま上に上がった。

【フラン】

「ごめえ！」

フランはさつきよりも酷い嗚咽を吐きながら裕也の目を見た。

【フ
ラン】

「裕也、お兄ちゃん。有難う。」

【裕也】

〔二〇〇九〕

裕也はぐんぐん上に上がつて行き紅魔館を過ぎてもまだ上に上がつていった。

その様子は幻想郷に住む全ての人間、妖怪、地下にいる妖怪全てがその姿、靈力を感じ取っていた。



紅魔館・レミリアの部屋

【レミリア】

「あれは！ 裕也なの！ フラン。」

レミリアは嬉しそうな顔をしていた。

【レミリア】

「狂気なんてどうでもいいわよね。」

★

紅魔館・門

【美鈴】

「これは、凄い。それに、何だろう。妹様の狂気何て屁でも無い感じがして来ますね。そう。誰だつてあるんですから。」

★

紅魔館・レミリアの部屋前

咲夜は窓を見ていた。

【咲夜】

「これ、は？ あれを見ていると心が静まつて行く。狂気何てどうでも良くなつて行く。」

★

魔法の森・魔理沙の家

【魔理沙】

「なんだぜこの靈力は！」

魔理沙はそう感じ外に出で見た。すると大きい綺麗な炎の鳥が上に上がつて行く様子が見えた。

【魔理沙】

「何だぜあれは。何か気持ちが安らぐ。狂氣何てどうだつて良い。」



魔法の森・アリスの家

アリスは少し荒れていた。良いアイデアと人形が思いつかなかつたからだ。そんなアリスは、尋常じや無い靈力を感じ外に出た。

【アリス】

「綺麗。 . . . 少し休みますか。」

アリスは思い付かなくたつてゆつくりして行けば良いと、その姿を見ているとそう感じた。



地靈殿・繁華街

【勇儀】

「……へー。あたしより強いかな？いや、本気を出して互角か、押し負ける位かな？」
兎に角、地上には面白そうな人間がいるじや無いか。ここに来てくれないかなー。」

勇儀は杯をクイッと口に運びながらつぶやいた。



マヨヒガ・庭

【橙】

「藍しやま・藍しやま・見て下さい！」

【藍】

「ああ、凄いな橙。紫様。」

【紫】

「ええ、確かに凄いわね。幻想郷の常識を変えるなんて。そんな事私だつて出来ないのにね。」

【藍】

「そうですね。」

【紫】

「これで、あの子から狂気は無くなつたし、思いもしないでしようね。」
紫は素直に驚いていた。何故なら常識を覆したからだ。

【紫】

「一回合わなくてはならなくなつたわ。裕也君。」



???.
???

【少年】

「ほう。私と同等の力かな?ふふ。面白い。情報も揃つて來た。会いに行くかな。でも、その前に、ようこそ、博麗の巫女よ。」

【靈夢】

「あんたが、この異変の主犯格ね。探したわよ?」

【少年】

「よく、ここが分かつたな。」

【靈夢】

「感よ。」

【少年】

「感、ね。青いな。され、博麗の巫女よ。お前はまだ私と戦うのは早い。私に勝ちたいならせめて神に近し人間を連れて來い。それなら、いい勝負が出来るだろう。」

【靈夢】

「なに？その言い方だと私じゃ貴方に勝てないって言つてる見たいじゃない。」

【少年】

「そう言つている。博麗の巫女よ。」

【靈夢】

「博麗の巫女博麗の巫女つて！私の名前は博麗靈夢よ！」

【少年】

「ふん。やると言うのか？よかろう。相手をしてやる。」

【靈夢】

「舐めるな！」

【少年】

「ふっ！」

【靈夢】

「？」

ズドン！と大きな音が鳴り響いた。

★

上空・大空

【裕也】

「フラン。フラン。」

【フラン】

「んむ？ ここわ～。」

【裕也】

「下を見て見ろ。」

【フラン】

「ん～？ わは～！ 綺麗。」

フランが見た風景は幻想郷を上空から見た姿だった。その風景は幻想郷の姿をそのまま表して行き、とても綺麗だった。

【裕也】

「下におりるぞ。」

【フラン】

「え～まだ見ていたいよ～。」

【裕也】

「また今度見せてやるから、それで良いだろ？」

【フラン】

「分かった。」

【裕也】

「うし！それじゃあ一氣に行くから捕まつてろ。」

【フラン】

「うん♪」

★
フランは裕也を抱きしめるように捕まつた。裕也はそれを見ると一氣に下に降りた。その途中で、周りの炎が途切れた。裕也はフランが雨に当たらないように庇い、紅魔館に戻つた。

紅魔館・レミリアの部屋

【レミリア】

「フラン。」

【フラン】

「・・・・」

フランは裕也の後ろに隠れた。

【裕也】

「フラン。レミリアはフランと向き合おうとしている。お前も自分自身とレミリアに向き合え。」

フランは裕也の言葉を聞き、前に出て來た。

【フラン】

「あの、お姉様。その。」

レミリアはフランを抱き締めた。フランは戸惑っていた。

【フラン】

「え！あつと！え？お姉様？」

レミリアは優しくフランに話しかけた。

【レミリア】

「ごめんね。貴女の事を考えないで自分が怖いから、守りたいからって閉じ込めて。それを貴女に説明しなくて、ごめんね。これからは、自由で良いから分からなかつたら私が教えるから、外には無理だけどそれ意外なら何とかするから、私を、許してくれる？ フラン。」

そう言うレミリアの言葉は震えていた。

【フラン】

「これ、からは、自由で良いんだね？」

【レミリア】

「うん。」

「じゃあさ、一つ約束して？」

【レミリア】

「なに？」

【フラン】

「何十年、何百年、かかつても能力を自由に操れるようにするから、そうしたら、外に出で良い。」

【レミリア】

「フラン。」

【フラン】

「私、頑張るから。それで、迷惑をかけるかもしれないけど、でも！頑張るから！」

フランはレミリアの目を真っ直ぐ見つめた。それは、何があつても頑張ると言う覚悟と勇気が宿っていた。

【レミリア】

「分かったわ。」

【フラン】

「ほ、本当！」

【レミリア】

「ただし！ 私からも条件を出すわ。」

【フラン】

「う、うん！」

フランは少し緊張をした様子だつた。

【レミリア】

「能力を自由に操れる練習をする時は私を必ず呼ぶこと。これが条件よ。」

【フラン】

「え？・どう言う意味？」

レミリアは恥ずかしそうに話した。

【レミリア】

「だから、私も手伝うわよ。」

フランはその言葉を聞いた瞬間レミリアを強く抱き締めた。

【フラン】

「ありがとう！ お姉様！」

【レミリア】

「ちょー！ フラン！ 首！ 首しまつてるから！」

【フラン】

「あー・ゞ」めんこめん！えへへ。」

【裕也】

「フラン、レミリア、よかつたな。」

【フラン】

「うん！」

【レミリア】

「ありがとう。裕也。」

【裕也】

「いいさ。それで、話していいか？」

【レミリア】

「そうだつたわね。それでなにかしら。」

【裕也】

「この異変に付いて何かレミリアなら分かるかもしないと聞いてな？それで、話に来たんだ。」

【レミリア】

「悪いけど分からぬいわ。」

【裕也】

「そうか。」

【レミリア】

「永遠亭。」

【裕也】

「え？」

【レミリア】

「永遠亭に行つて見て。そこから動き出すから。」

裕也は悩んだが直ぐに決めた。

【裕也】

「分かった。ありがとうな。」

裕也は紅魔館を出ようとした。

【フラン】

「またね。」

【裕也】

「ああ。」

裕也は門に向かつて歩いた。裕也が見えなくなつてからレミリアはフランに話しか

けた。

【レミリア】

「行かなくてよかつたの、フラン。」

【フラン】

「うん。約束したもん。」

【レミリア】

「そう。」

レミリアは裕也に感謝した。狂気をなくしてくれてありがとうど。



紅魔館・門

【美鈴】

「ふう。ようやく終わつた。ありがとうございます。」

【裕也】

「いや、別にいい。それじやあな。」

裕也（分身）は消えた。その時紅魔館の中から本物が現れた。

【美鈴】

「あれ？ 帰るんですか？」

【裕也】

「ああ。またな。」

【美鈴】

「はい。気を付けて。」

【裕也】

「ああ。」

裕也は紅魔館を後にし永遠亭に向かつた。

暴走靈夢と裕也

迷いの竹林

【裕也】

「この先か。ん？あそこにいるのは、妹紅か？」

竹林に歩いていたのは妹紅だった。

【裕也】

「おーい。妹紅ー。」

【妹紅】

「ん？なんだ裕也じやないか、どうしたこんな所で？」

【裕也】

「永遠亭に向かう途中なんだ。そう言うお前はどうしてここにいるんだ？」

【妹紅】

「私か？私はこの迷いの竹林の案内係をやっているんだ。」

【裕也】

「それは丁度いいな。妹紅、連れて行つてくれ。」

【妹紅】

「それはいいが、どうしてだ？みた所怪我をしている訳でも、怪我人を背負つている訳でも無いのになんでだ？」

裕也は妹紅にこれまでの経緯を教えた。

【妹紅】

「なる程な、あの時に感じたのはお前の仕業か。」

【裕也】

「気持ちが安らいだあれだな？だつたら多分それは俺だ。俺のスペルカードの、再誕「淨化と再生」は、相手の心を癒し怒りや悲しみ、そして狂気を封印する為に作つたスペルカードだからな。多分、俺の漏れ出した靈力がスペルカードで増幅され、幻想郷中に広がつて行き、心を癒したんだろ。」

【妹紅】

「あ、相変わらず凄いな。」

【裕也】

「そうか？まあ、そう言う訳だから頼む。」

【妹紅】

「ああ、分かつた。」

妹紅は裕也を迷いの竹林に案内した。



迷いの竹林・永遠亭門前

【裕也】

「案内ありがとう。」

【妹紅】

「いいさ、この位。それじゃあね。」

【裕也】

「ああ。」

妹紅はそう言うと迷いの竹林にもどつて行つた。

【裕也】

「さて、行くか。」

裕也が進もうとしたその瞬間、ズドン！と、大きい音が永遠亭の中から聞こえて來た。

【裕也】

「なんだ！向こう側か！」

裕也は永遠亭の中に入つて行つた。



永遠亭・廊下

【裕也】

「これは、酷いな。」

裕也の目の前に映つたのは、ボロボロになつた永遠亭と大量の怪我した兎達だ。その中に红楼夢がいた。

【裕也】

「!? 紅樓夢！ どうした！ 大丈夫か！」

裕也は近くにいた兎達を红楼夢の場所に集めスペルカードを唱えた。

治癒「結界治癒力」

傷を治す結界が红楼夢の周りに展開した。暫くすると红楼夢は目が覚めた。

【红楼夢】

「う、く。あ？」

【裕也】

「気が付いたか？」

【红楼夢】

「裕也、さん？」

紅樓夢は辛そうに答えた。

【裕也】

「久しぶりだな。 紅樓夢。」

裕也は笑ながら答えた。それに紅樓夢は嬉しそうにこう答えた。

【紅樓夢】

「お久しぶりです。 裕也さん。」

【裕也】

「ああ。早速で悪いが何が合つたんだ？」

【紅樓夢】

「実は。」

時間は靈夢が運ばれた時に戻る。



永遠亭・診療所

【永琳】

「これは酷いわね。 優曇華！直ぐに薬を持って来て！」

【優曇華】

「は、はい！分かりました！」

優曇華は慌てて薬を取りに行つた。

【永琳】

「く、すごい熱だ！怪我も酷いし、一体何が合つたんだ！靈夢。」

【靈夢】

「はあ、はあ、はあ、く！は、あ！はあ、はあ、うつ！はあ、はあ、はあ。」
靈夢は苦しそうにしていたが、何かを呟やいたかと思ったら、いきなり立ち上がり永琳に攻撃をして來た。

【永琳】

「な!?靈夢！貴女何を！」

【靈夢】

「つあ！はあ、はあ、うつく！」

靈夢は苦しそうに息を吐いているだけで、答えようとしない。

【紅樓夢】

「一体どうしたんですかこれは!?」

【永琳】

「紅樓夢!?来ちゃダメ！」

【紅樓夢】

「え？」

靈符 「夢想封印」

【紅樓夢】

「かはつ！あああああ！」

紅樓夢は靈夢の技を受け吹き飛ばされた。

【紅樓夢】

「う、あ、靈夢、さん。」

紅樓夢は気絶した。



永遠亭・廊下

【紅樓夢】

「これで全部です。」

【裕也】

「そうか。ありがとう。」

裕也は歩き出した。

【紅樓夢】

「ど、どこに行くんですか！」

【裕也】

「決まってるだろ。靈夢のとこだよ。」

紅樓夢は反対した。

【紅樓夢】

「だ、駄目です！・危険です！・それにこの怪我人をほつて置くんですか！」

裕也は怒り口調で話した。

【裕也】

「俺だつてな！みてやりてえよ！でもな！靈夢をほつといたらもつと大変な事になる！だから行かなきや行けないんだよ！」

その言葉に紅樓夢は怒った。

【紅樓夢】

「だつたら私が行きます！貴方はここで怪我人を見ていて下さい！」

裕也は溜息を吐きながら答えた。

【裕也】

「はう。あなの？いいか？俺はお前なら大丈夫と思つてここを任せすつて言つているんだ。」

裕也のその言葉に紅樓夢はポカンとした顔をした。

【紅樓夢】

「え？」

裕也は笑顔で紅樓夢に話した。

【裕也】

「お前はずつと永琳の元で勉強をしていた筈だ、 そ娘娘？」

【紅樓夢】

「はい。」

【裕也】

「なら、俺より大量の知識が入っている筈だ。所詮俺は付け焼刃の治療しか出来ない。でも、信用出来ない奴に任せるつもりはない。だが、お前なら信頼出来る。だって、大切な仲間だから。な！ 紅樓夢。」

裕也は今まで無いような笑顔で紅樓夢に向かい笑いかけた。

【紅樓夢】

「あ、 はい！ 分かりました！ ここは任せて下さい！」

【裕也】

「ああ！」

裕也は中に進んで行つた。爆発がする場所に向かう為に。 裕也が言つた後、 紅樓夢は

嬉しそうにしていた。

【紅樓夢】

「えへへ。大切な仲間かく。よし！頑張ろう！」

紅樓夢は嬉しそうに笑っていた。



永遠亭・中庭

【永琳】

「く！一体どうしたの！靈夢！」

靈夢は苦しそうに呻いているだけで何も答えない。

【輝夜】

「永琳！靈夢を止める事だけに集中して！」

【永琳】

「わ、分かりました！」

練丹「水銀の海」

青緑色の無数の弾が縦横無尽に靈夢に襲いかかる。

【靈夢】

「・・・」

宝具「陰陽鬼神玉」

陰陽玉の形をした巨大な氣弾を発射し永琳の技を相殺して行つた。

【永琳】

「な！がつは！」

永琳は一瞬驚いた。しかし、その為に隙が出来てしまつた。靈夢はその隙を見逃さなかつた。靈夢は直ぐに永琳の懷に潜り込み重い拳を振るつた、永琳はガード出来ずに吹き飛ばされた。

【輝夜】

「永琳！く！靈夢！覺悟は出来ているんでしようね！」

靈夢は何も答えない。そんな所に裕也がやつて來た。

【裕也】

「一体、どうしたんだこれは？」

【輝夜】

「裕也君！どうしてここに!?」

【裕也】

「説明は後で。下がつていってくれ。靈夢の相手は俺がする。」

【輝夜】

「私は永琳の仇を取らないと行けないの。貴方こそ下がりなさい、裕也君。」

【裕也】

「その怪我でどう立ち向かうつもりだ？しかも靈力も下がっている。そんな状態じゃあ邪魔になるだけだ。」

【輝夜】

「つ！…どうして！」

【裕也】

「まあ、これでも結構幻想郷にいるからな。それ位は分かるようになる。」

輝夜は驚いていたが、自分は確かに邪魔になる。そう感じ、裕也に靈夢の事を任せた。それを見て裕也はありがとう、と言った。輝夜は裕也に全てを任せた事にした。

【裕也】

「さて、始めるか。そこにいるんだろう？靈夢を操っている奴は。」

裕也がそう言うといきなり靈夢が笑だした。

【靈夢】

「はつはつはつは…よく分かつたな？人間！」

【裕也】

「…」

「いつが靈夢の体からだと、靈夢は力なく倒れた。裕也は倒れた靈夢を安全な場所に連れて行つて、相手の前に出た。

【裕也】

「お前は誰だ。」

裕也は相手を睨みながら答えた。

【星矢】

「俺の名前は鬼神星矢。鬼と妖精のハーフさ。」

【裕也】

「その鬼神がどうして靈夢に取り次いていたんだ。」

【星矢】

「貴様に会う為だよ。桐上裕也。」

裕也は眉を上げた。

【裕也】

「なに? どう言う意見だ。」

星矢は裕也を睨みながら答えた。

【星矢】

「龍神様がお前に興味を持つてな、だから貴様を連れて行く。」

【裕也】

「勝手に決めるな。俺はお前に付いて行く理由が無い。行くとしても自分で出向く。場所を教えてくれ。」

裕也がそう言うと星矢はあらか様に怒った。

【星矢】

「ふざけるな！この俺様が来てやつたんだぞ！しかも、龍神様の命令で！貴様はそれを何だと思っている！」

【裕也】

「ただの馬鹿。」

裕也は星矢を挑発した。星矢は怒りで顔が真っ赤になっていた。

【星矢】

「貴様！俺だけではなく龍神様まで馬鹿にしていると言う事が分からないのか！」怒りながら言っている星矢に対して平然としていた。

【裕也】

「ああ、分からないな。」

【星矢】

「もー怒つたぞ！」

星矢はそう言うと裕也に向かつて飛び付いたが、裕也はそれを軽く避けた。すると星矢は笑っていた。

【星矢】

「ははは！ 避けたな！ そこのお前！ 体を借りるぞ！」

星矢が言つた先にいたのは優曇華だつた。星矢は体が液体見たいな形になり優曇華に向かつて飛び付いた。

【優曇華】

「え？ や！ ちょ！」

【裕也】

「な!? 優曇華！ どうしてここに!?」

裕也は全力で優曇華の元に急いだが、間に合わなかつた。星矢は液体のまま優曇華の口から優曇華の中に入つた。優曇華は抵抗をしたが暫くすると動かなくなつた。

【裕也】

「星矢！ 優曇華をどうした！」

優曇華（星矢）は笑ながら説明した。

【優曇華（星矢）】

「はつははは！俺の能力はな？相手の体を乗つ取り自分の力として使う程度の能力なんだよ！つまりもうこいつは俺なんだよ！」

優曇華（星矢）はまだ笑っていた。裕也は笑っていた優曇華（星矢）に弾幕を当てた。

【優曇華（星矢）】

「あが！き、貴様！こいつはお前の仲間だろ！攻撃なんかしていいのか！」

【裕也】

「黙れ下衆め。」

裕也は今まで無い程の殺気を放ち低い声で喋った。優曇華（星矢）は背筋に寒気を感じ数歩下がった。

【裕也】

「優曇華の体で下衆な笑いを辞めろ。」

【優曇華（星矢）】

「ひ、ひひ。だがどうする？俺は優曇華の体の中に入っているんだぞ？どう取り出す。」

【裕也】

「確かに俺一人の力じや無理だが、仲間の力を使えば貴様を優曇華から出す事が出来る。」

【優曇華（星矢）】

「なに?」

【裕也】

「優曇華! フラン! 力を貸してもらうよ!」

友情「信頼の力」

裕也がスペルカードを使つた。すると裕也の体が変わつていつた。目は赤くなり背は縮んで背中に羽が生えた。その羽は黄色、赤、黒、白の綺麗な宝石が付いている美しい羽だつた。因みに何故か仲間の力を借りるとカリスマになる。

【裕也】

「さあ、行くぞ。」

【優曇華（星矢）】

「く! 犯めるな!」

優曇華（星矢）は弾幕を放つた。しかし弾幕は裕也とは反対方向に飛んでいた。

【裕也】

「どうした? そんな程度か? なら、こつちから行くぞ!」

裕也は弾幕を放ちながら優曇華（星矢）に近づいた。

【優曇華（星矢）】

「う、うわああ! 来るな! 来るなああ!」

優曇華（星矢）はデタラメに弾幕を放つた。しかし当たる筈はなく全て外れた。

【裕也】

「かなり痛いだろうが我慢してくれよ！はああああ！」

裕也は弾幕を片手に溜めて優曇華（星矢）の目の前で放つた。普通なら吹き飛ばされているだろうが、裕也は放つたすぐ後に手を持ち吹き飛ばされ無いようにした。

【優曇華（星矢）】

「がは！」

【裕也】

「俺の目を見ろ！」

優曇華（星矢）は油断をし目を見てしまった。その目は赤く、全てが赤い世界になり、目の前がぐるぐる回つていて立っているのがやつとの状況だつた。だが、それだけではなく。吐き気と神経がちぎれたんじや無いかと思う位の痛みが優曇華（星矢）に走つた。

【優曇華（星矢）】

「があああああ！ぐつがああ！あああ。あがああああ！ががが、ぐがあああ！」

【裕也】

「どうする？出て行かないと苦しみがまして行くぞ？」

優曇華から液体が出て行き、その液体が形を作つて行き星矢が現れた。

【星矢】

「な、なんて奴だ、仲間に向かってあんな事をするなんて。」
驚いている星矢に対し、裕也はあっけらかんとしていた。

【裕也】

「なに行つてんだ？」

【星矢】

「なに？」

【裕也】

「大丈夫か？優曇華。」

優曇華は頭を軽く降りながら立ち上がった。

【優曇華】

「くーう。あー大丈夫です。」

【星矢】

「な!?何故だ！何故平気なんだ！俺は確かに激痛を感じたんだぞ！それなのに何故！」

【裕也】

「説明をしてやるよ。まず始めに優曇華の能力、狂氣を操る程度の能力でお前を見つけて、そして次にフランの能力、ありとあらゆるもの破壊する程度の能力でお前の能力

の相手の体を乗っ取り自分の力として使う程度の能力を破壊しただけだ。だから中に入つていただけで激痛が感じたんだ。」

【星矢】

「だがそれだとおかしい！なんで狂気を操るなのに俺を見つけられたんだ！」

【裕也】

「俺は優曇華の能力。狂気を操る程度の能力は、狂気の波長を見つけそれを操るって意味だと感じている。つまり、狂気だけしか操れないはおかしいんだよ。だから、俺は優曇華の本当の能力は波長を操る程度の能力だと思っている。しかし、波長と言つてもなんの波長を操るのか分からぬ。だから、一番分かりやすい能力。狂気を操る程度の能力になつたんだと思う。つまり、能力は考え方で応用が出来るつて事だ。後は簡単。妖怪つて言つても根本的な所は人間と似てゐるんだよ。だから、優曇華の波長に余計な波長を見つけたら星矢の能力をフランの能力で消せばお前にだけ苦しみが渡るつて訳だ。」

【星矢】

「くそ！他！他にはいないのか！」

星矢は他に乗り移れる相手がいないが探したが裕也と優曇華以外に誰もいなかつた。

【裕也】

「お前なあ、借りにも鬼だろ？鬼は正々堂々を好み人を試す。それが鬼な筈だ。それなのに、貴様は卑怯な手ばつかし使いやがつて。ふざけるな！」

裕也が怒鳴り上げた。すると裕也の姿が元に戻った。

【星矢】

「はは！貴様も靈力が切れた見たいだな！これなら俺でも勝てる！」

裕也は星矢に気づかれないように笑い。こう答えた。

【裕也】

「な！く！しまつた！」

優曇華は裕也の元に近寄った。

【優曇華】

「大丈夫ですか！」

近寄つて来た優曇華に裕也は小声で話した。

【裕也】

《優曇華。小声で話せ。》

【優曇華】

《え、あ、はい。》

【裕也】

『よし。あいつが油断をしているうちに優曇華、お前があいつを倒すんだ。』

【優曇華】

『何言つているんですか。なんで私が。』

【裕也】

『永琳も輝夜も今は動けない。靈夢は怪我と靈力の消費が半端ない。俺は殆ど使い果たした。後はお前しかいないんだよ。優曇華。ここはお前の家だろ？だつたらやつてやれ。』

【優曇華】

『．．．はい！』

【裕也】

「よし、やるぞ！」

【優曇華】

「はい！」

裕也と優曇華は二人がけで星矢に弾幕を放つた。

【星矢】

「舐めるな！」

星矢は避けながら裕也達に向かつて弾幕を放つた。裕也達はそれを避けた。

【裕也】

「優曇華！力を溜めておけよ！弾幕は全部俺が引き受ける！」

【優曇華】

「はい！」

【星矢】

「は！弱つた人間とひ弱な兎が俺様に叶う訳無いんだつよ！」

【裕也】

「な！ぐう！」

星矢は裕也の弾幕を避けながら近付き、裕也の腹をおもつきり殴つた。裕也は小さく呻いた。しかし裕也は笑っていた。

【星矢】

「何がおかしい！」

【裕也】

「全然聞かないな。お前は本当に鬼の血が流れているのか？」

【星矢】

「何だと！」

星矢は明らかに怒っていた。

【裕也】

「拳つて言うのは、腹を締め腰を落とし、拳を前に出す事だ！」

裕也の拳が星矢の腹におもつきり直撃をし星矢は吹っ飛んだ。

【裕也】

「追い討ちだ！食らつとけ！」

拳技「青の鳥——鳳凰襲来拳——」

裕也の拳が青い龍のようになり吹つ飛んだ星矢の背後に回り込み背中から放った。星矢は青い龍に包み込まれながら優曇華の元に飛んでいった。

【優曇華】

「あ、凄い。私が終わつた所によし！私は、出来る！行きます！」

優曇華はそう言うと目の赤みがまし赤より紅くなつた。その上で優曇華はスペルカードを唱えた。

「幻朧月睨（ルナティックレツドアイズ）

優曇華は星矢の目を見た。星矢は優曇華の目を見てしまつた。優曇華は星矢を避けた。

【優曇華】

「さあ、狂いなさい。幻の狂氣（ルナティック）の中で。



【星矢】

「ぐーー、ここは、どこだ！」

星矢は気が付いたら赤い月が照らされているだけの何も無い場所にいた。

【星矢】

「裕也！ 裕也！ 何処にいやがる！ 出て来い！」

星矢は叫ぶも出てこなかつた。

星矢は怖くなり叫びまくつた。

【星矢】

「おい！ 誰かいないのか！ おい！ 龍神様！ 龍神様！ この際裕也でも構わない！ 誰か！ 誰か！ いないのか！」

星矢の叫びは木霊したが誰も答えなかつた。その代わり月が近付いて來た。

【星矢】

「な!? 月が！ く！ 消えろ消えろ消えろおおおお！」

星矢は月に向かい弾幕を何回も放つたが、月は消えも壊れもせずに星矢に向かつて行つた。

【星矢】

「うわああああ！来るなあああ！があはつ！」

★
星矢は強い衝撃を受け吹っ飛んで行つた。

星矢が優曇華のスペルカードを食らつた辺り。

【星矢】

「ぐー、ここは、どこだ！」

【星矢】

「裕也！裕也！何処にいやがる！出て来い！」

裕也は優曇華に星矢はどうしたか聞いた。優曇華はこう答えた。

【優曇華】

「星矢は幻覚を見ています。」

【裕也】

「幻覚？」

【優曇華】

「そうです。さつきのスペルカードは、相手に強い幻覚を見せ自身で見つけない限りは何をしても絶対に幻覚から目覚めません。」

【裕也】

「そうなのか。」

裕也は少し寂しそうに呟やいた。

【星矢】

「おい！誰かいないのか！おい！龍神様！龍神様！この際裕也でも構わない！誰か！誰か！いないのか！」

星矢はなおも叫んでいた。

【優曇華】

「ふん！いい気味だわ。今まで私や靈夢さんを利用した罰が当たつたのよ。」

優曇華の言葉を聞いた裕也は何かを決心した感じに優曇華に向かって喋つた。

【裕也】

「なあ、あいつを許さないか。」

裕也の言葉に優曇華はかなり驚いた。

【優曇華】

「何言つてるんですか！裕也！あいつは私や靈夢さん、そして師匠や姫様を傷つけたんですよ！そんな人を許せる訳無いです！」

【裕也】

「それでもだ。じゃあ聞くが、人や妖怪を裁けるのは閻魔か聖人か妖怪の賢者辺りだろ？」人には裁く事は出来ない。でも、怒りや悲しみ、苦しみはある。殺したくも、憎みたくもある。だけど、それだけじゃ駄目なんだ。生き物は罪を犯す。しかし、その罪を許す気持ちも大切なんだよ。またやつたら戦い分からせればいい。俺はどんなに悪人も、悪者でも、罪を犯した人間でも、許す事が大切なんだ。」

【優曇華】

「矛盾してます！」

【裕也】

「矛盾だと？」

【優曇華】

「そうです！魔理沙さんから聞きました。異変で大切な人が殺されて全てをめちゃくちゃにした奴を巫女が倒すとする。その過程で、大切な物や人を殺されても、そいつが楽しそうにしていて、憎しみが湧かないのか？そんな奴がいても仕方がない、しようがない。これもルール何だと決める事が出来るのか？つて言っていたそうじゃないですか！これは今言つた事と矛盾していませんか！」

裕也は溜息を尽きながらこう答えた。

【裕也】

「確かに矛盾しているな。でも、俺は矛盾しても言いと思つていいんだ。」

【優曇華】

「どう言う意味ですか。」

【裕也】

「矛盾があると言う事はそれだけの考え方があると言う訳だ。つまり、答えは一つじやないと言う訳だ。だから、矛盾があるんだ。だからあいつを許せ。」

【優曇華】

「・・・分かりました。納得はしませんが、許します。」

【裕也】

「サンキュー。じゃあ最後に殴り飛ばすぞ。」

優曇華はポカンとしていたが嬉しそうに笑つた。

【優曇華】

「はい！」

優曇華と裕也は殴る為に星矢に近付いた。それが星矢には月が近付いて来たように感じた。

【星矢】

「な?!月が!く!消えろ消えろ消えろ消えろおおおお!」

星矢は二人に向かつて弾幕を何回も放つたが、二人はそれを避けながら星矢に向かつて行つた。

【三人】

「吹つ飛んでけ！」

【星矢】

「うわああああ！来るなあああ！がつは！」

星矢は一人の拳しを食らい吹つ飛んだ。

【優曇華】

「やりましたね。」

永遠亭は壊滅状態と言つても過言じやない状態になつていた。裕也も優曇華もボロボロだつた。

【裕也】

「……ああ、そうだな。そして、そこでずつと見ていた紫。用があるんだろ？出て来いよ。」

【紫】

「よく、分かつたわね。裕也君。」

【裕也】

「お前はかなり靈力が強いからな、直ぐに分かる。まあ、隠しても紫の胡散臭い氣があるから直ぐに分かるがな。」

【紫】

「あら？ いい女の氣、と、言つて欲しい物だわ。」

【裕也】

「・・・優曇華、皆の治療を頼む。」

優曇華はきょとんとした表情をしたが裕也に従う事にした。

【優曇華】

「分かりました。」

優曇華はそう言うと靈夢達が横になつている場所に行つた。

【裕也】

「で？俺に何の用だ。もしかして、異変の主犯格が誰だか分かつたとか？」

【紫】

「ええ、そうよ。」

裕也は冗談で言つたつもりなのに本当に当たつたので少し驚いた。

【紫】

「それだけじゃないけどね。裕也君。貴方、妖怪になるつもりない？」

【裕也】

「は？ それはどう言う意味だ紫。」

【紫】

「貴方の能力、力、靈力、思考、どれを取つても人間を凌駕しているのよ。」

【裕也】

「だから人間を辞めて妖怪になれって意味か？」

【紫】

「ええ、そうよ。貴方は既に人間でありながら人間を辞めているのよ。つまり貴方は人間でありながら既に神の領域にいるのよ。」

【裕也】

「関係ないな。」

【紫】

「え？」

【裕也】

「俺は妖怪になるつもりも神になるつもりも無い。俺は最後まで人間として生きて、人間として死ぬ。だから妖怪になるつもりはない。」

紫は少し啞然としていたが頬を緩め笑っていた。

【紫】

「ふふ。貴方らしいわね。まあ、いいわ。それで場所だけど、妖怪の山にある滝に行つて見なさい。そこにいる筈だから。」

【裕也】

「分かった。ありがとうな。」

【紫】

「まー。今回は手伝う事は出来ないけど、呼んでくれれば私が起きている時限定だけどね

★

紫はそう言うとスキマの中に入つて行つた。

【裕也】

「さて、優曇華の元に行くか。」

裕也は治療をしている優曇華の元に向かつた。

★

優曇華は少しでも綺麗な布や絹、水やお湯、台などをかき集め靈夢達をそこに乗せた。
勿論星矢もだ。そんな治療をしている優曇華の元に別の場所で治療をしていた紅樓夢
が現れた。

【紅樓夢】

「鈴仙さん！大丈夫でしたか！」

【優曇華】

「紅樓夢さん!? どうしてここにいるんですか？ 確か逃げた筈。」

【紅樓夢】

「目が覚めて逃げようと思いましたが、爆風に煽られ気絶してしまったんです。その所
に裕也さんが来て私を助けてくれたんです。それで裕也さんに医者とは何かを再確認
しましてね。今まで兎や色々な人を治療していましたんです。」

【優曇華】

「そうだったの。」

優曇華と紅樓夢が話していると、裕也がやつて來た。

【裕也】

「そつちは大丈夫か？」

【優曇華】

「あ、はい。大丈夫です。」

【紅樓夢】

「こつちも大丈夫です。」

【裕也】

「そうか。」

裕也は安堵をした。

【裕也】

「早速だが、異変の主犯格の場所を掴んだ。だからちよつと言つてくる。だから、紅樓夢、優曇華、皆を頼む。」

紅樓夢と優曇華は心配そうな顔をしたが、裕也を信じる事にした。

【紅樓夢】

「分かりました。」

【優曇華】

「こつちは任せて。」

【裕也】

「ああ、頼む。」

裕也は妖怪の山に行こうとしたその時。

【靈夢】

「待ちなさい。」

ボロボロの靈夢が裕也を止めた。

【裕也】

「靈夢。大丈夫なのか?」

【靈夢】

「こん位屁でも無いわ。」

そう言う靈夢で合つたが、辛そうに喋っていたから全然平氣そうに見えなかつた。

【裕也】

「・・・・そんな体でどうするつもりだ。」

【靈夢】

「決まつてるじゃない。あいつを、異変の主犯格に私に怪我をさせた落とし前をつけなきやいけないし、なにより・・・・異変解決は巫女の仕事よ。一般人が出しゃばら無いで。」

【裕也】

「一般人か。」

【靈夢】

「ええそうよ。ただの人間。巫女でも無いのに、何であんたが異変を解決するの?」

裕也は呆れ顔をしながら答えた。これには靈夢も怒りが増した。

【裕也】

「じやあ聞くがその怪我でどうする。ただ犬死にするだけだぞ?」

【靈夢】

「なんですか？」

【裕也】

「異変解決は巫女の仕事。だからいいのか？」

靈夢はきょとんとした顔をした。

【靈夢】

「え？」

【裕也】

「あのな？お前は博麗の巫女である前に人間なんだ。ちっぽけな人間なんだ。その人間の強みはなんだと思う。」

【靈夢】

「決まっているじゃない！誰にも負けない強さよ。」

【裕也】

「違う。自分が弱いと認める心とその弱さを補える仲間が必要なんだ。いくら強くても必ず連戦や自分と同じ位の強さの奴と戦つていると靈力や体力が落ちる。その状況で増援が来たらどうする。」

【靈夢】

「そ、それは。」

【裕也】

「一人で行け無いだろ？だから、一緒に行かないか？靈夢。」

裕也は手を出して來た。靈夢は少し考えたが、裕也が言つた事は全部事實なので靈夢は裕也に付いて行く事にした。自分の弱さを認めて。

【靈夢】

「はー。あんたといふると自分がちっぽけな人間なんだつて思っちゃうわ。よろしくね。」

靈夢は裕也の手を握り握手をした。

【裕也】

「ああ。さあ！行こうか！最終決戦だ！」

決戦

妖怪の森・滝に行く為の山中

【裕也】

「後どれ位で着く。」

【霊夢】

「後、約數十分と言つた所かしら。」

靈夢は裕也に気になつた事を聞いた。

【霊夢】

「ねえ、聞きたい事があるんだけど。」

【裕也】

「？ 何だ。」

【霊夢】

「なんであんたは他人の為にそこまでやるの？仲間の為つて言つたつて以上過ぎる。」

【裕也】

「・・・俺は罪を犯した。許されない罪をな。」

「俺は、人間の道を外す物を作つてしまつたんだ。」

【裕也】

「俺は、人間の道を外す物を作つてしまつたんだ。」

【靈夢】

「それって、なに。」

靈夢は気になつてそこを聞いた。裕也は言いづらそうにしていたが何かを決心した
かの様に話した。

【裕也】

「不老不死になる薬を作つてしまつたんだ。」

【靈夢】

「な!?」

靈夢はかなり驚いた。でも、裕也の気持ちを汲み取り直ぐに落ち着いた。

【靈夢】

「それで、どうなつたの。」

【裕也】

「それを巡つて戦争、つまり、その薬を手に入れる為に沢山の人達が死んで行つたよ。」

【靈夢】

「そう。」

裕也と靈夢が話していると一人の者がやつて來た。

【??】

「やあやあ靈夢！元氣かい？」

【靈夢】

「あんたは、勇儀！どうしてここに。」

【勇儀】

「面白そうな気を見つけてね。そいつと戦いたくてね。つい、地獄を抜け出しちまつたよ。」

【靈夢】

「旧、でしょ。」

【勇儀】

「まあ！どつちでもいいじゃないか！」

【靈夢】

「良く無いわよ。」

靈夢はため息を付いた。

【勇儀】

「ここを通りたければ私とケンカ、しようぜ。」

勇儀は殺氣を立たせた。

【靈夢】

「勇儀！あんた本気で戦うつもり！」

【勇儀】

「は！安心しな。私が感じた奴以外は本気を出さないよ。」

【靈夢】

「あんたが感じた奴？それって。」

靈夢が話そとしたら裕也が前に出て來た。

【裕也】

「それは、俺の事か？」

裕也は勇儀以上の殺氣を立たせた。

【勇儀】

「ほう。お前はあの時の。確か、裕也だつたか？」

【裕也】

「ああ、宴会の時だな。その節はどうも。」

勇儀は嬉しそうに笑つた。

【勇儀】

「あつはははは！いやー！お前か！私の目に狂いは無かつたね。さあ！始めようか！ケンカを。」

【裕也】

「そう慌てるな。今準備をするから。お前は最高のケンカをしたいんだろう？なら、我慢しろ。」

【勇儀】

「へー。いいよ。別に。」

【裕也】

「ありがとう。」

裕也は一言お礼を言いながら靈夢の所に行つた。

【裕也】

「ルーミア、いるか？」

裕也がそう答えると、裕也の影の形が変わりルーミアが現れた。

【ルーミア】

「久しぶりだな、裕也。」

【裕也】

「ああ、そうだな。それで。」

裕也が続きを喋ろうとしたらルーミアが止めた。

【ルーミア】

「大丈夫だ。全て分かつてゐる。靈夢と共に先に行け、だろ？」

【裕也】

「そう言う事だから頼むぞ靈夢。」

裕也とルーミアに靈夢は待つたをかけた。

【靈夢】

「それは、つまり裕也が囮になると？」

【裕也】

「そうだ。靈夢はその間にい異変の場所にいけ。」

【靈夢】

「いや、私が残るから裕也、貴方が行きなさい。」

【裕也】

「何？どう言う風の吹き回しだ？」

靈夢は照れ臭そうに答えた。

【靈夢】

「あんたが異変を解決しなさいって言つてんのよ！」

【裕也】

「だからどうして。」

【靈夢】

「私はあいつにはかなわない。でも、私は博麗靈夢。異変を解決する為に作られた存在なのよ。でも、ダメだった。私じゃあ全然かなわなかつた。だから、私より強いあんたに任せるわ。」

靈夢は覚悟をした感じに話した。しかし裕也は靈夢の頭をおもつきり叩いた。

「ふん！」

靈夢は顔から地面に付いた。靈夢は直ぐに立ち上がり裕也を怒つた。

【靈夢】

「ちよつと！ 何すんのよ！」

靈夢は怒つていた。裕也は靈夢をなだめる様に話した。

【裕也】

「それでこそ靈夢だ。」

【靈夢】

「え？」

【裕也】

「靈夢は自分で弱さに気付けた。だつたら靈夢が行くべきだ。」

【靈夢】

「はあ？ あんた、何言つてるの！ 私じゃ無理だからあんたに任すつて言つてるのに。」

【裕也】

「いいか？ 番號。人間はな、自分の弱さを認めたら強くなれるんだ。力の強さじゃなくて心の強さ。そして、自分で気付けたなら、きっと何とかなる。お前は一人じゃ無い。ルーミアがいる。そして、自分自身がいる。自分と仲間を信じろ、靈夢。博麗靈夢じやなくて、靈夢を信じろ。そうすればきっと大丈夫だ。俺も勇儀を倒したら直ぐに行く。」

靈夢は悩んだが裕也に従つた。裕也なら何かをやつてくれるんじや無いかと言う期待をして。

【靈夢】

「分かつたわ。早く来るのよ！ 行くわよ！ ルーミア！」

【ルーミア】

「了解。」

靈夢とルーミアは勇儀を越し先に行つた。

【裕也】

「いいのか？先にいかせて。お前はここを守る為にいるんだろう？」

勇儀は笑ながら裕也の質問に答えた。

【勇儀】

「あつはつはつは！私、いや、あたしはね？強い奴と戦いたくてここにいるんだ。そう、お前だ。裕也。」

裕也も少し嬉しそうに答えた。

【裕也】

「俺は戦闘馬鹿じやないからそんなに嬉しくはないが、飲み仲間の実力を知るって事なら別にいいぞ。」

【勇儀】

「ぶつくくく。だつははは！面白い！実際に面白い！飲み仲間か！いいぞ！私も飲み仲間に馬鹿にされないよう本気で行こう。」

勇儀はさつきより強い殺氣を放つたが裕也はそれ以上の殺氣を放つた。

【勇儀】

「ほー。私の本気を目の前でまだ上がるか。ますます面白い。これは久しぶりに楽しめそうだな。」



妖怪の山・龍神の湖

靈夢とルーミアは勇儀を超えて暫く歩いていた。そして暫く歩いていた二人は開けた場所に出た。

【龍神】

「ようこそ、幻想を守りしもう一人の巫女と幻想に集いし最も黒く、そして全ての闇を統べる王よ。」

【靈夢】

「ようやくあんたの姿が見れたわ。異変の主犯格さん。」

靈夢とルーミアは龍神を見た。龍神は10歳そらの子供で服装は外にあるパン

カーに短パン。髪の色は、水色に白と銀を混ぜたような髪だった。

【ルーミア】

「お前の名前は何て言う。」

【龍神】

「龍神。そう呼ばれているな。」

【靈夢】

「そう。なら、この異変を止めなさい。」

靈夢の言葉に龍神は笑つた。

【龍神】

「くはははーー」の程度で異変だと？ふふ。通りで弱い訳だ。きっと貴様が解決して來た異変は生ぬるい物なんだろ？」

【靈夢】

「なんですって！」

靈夢は怒つた。

【靈夢】

「確かに暇つぶしとかで異変をしていた奴もいたわ。でも！全てがそうじやない！自分を守る為。仲間を助ける為。自分を保つ為。そして淋しさをまぎわらす為。その他の異変も確かにあんたには、くだらないかもしないけど、想いは！気持は！どんな異変よりも重く、辛い物だわ！一人だつた私は、異変で仲間が増えた！その私が今まで解決して來た異変をあんたなんかに馬鹿にされる筋合いはない！」

靈夢は怒鳴つた。何故なら皆の想いを龍神は馬鹿にしたからだ。靈夢はこう考える事が出来るのは裕也のおかげなんだなど、心で感謝した。

【龍神】

「下らん。一体それがなんだと言うんだ。やつぱりぬるいな。もし貴様の解決して來た異変が凄いと言うなら私を倒して證明してみろ。まあ、貴様如き我が手を下すまでもないな。いけ、星矢。」

【星矢】

「はい。分かりました。龍神様。」

そう言つて滝の中から星矢が現れた。

【靈夢】

「な！あんたは！」

【ルーミア】

「知つているのか？」

【靈夢】

「ええ、忘れないわ。」

靈夢はギリリと歯軋りしながら答えた。

【星矢】

「ん？はは！お前はマヌケな巫女様じやないか！また操りに來たのか！」

ルーミアは靈夢の表情と星矢の口調で何があつたかを察し、靈夢に提案した。

「成る程な。靈夢。こいつの相手は私がやる。お前は龍神をやれ。」
ルーミアの提案に靈夢は驚いた。

【靈夢】

「何言つてゐるの！…こいつは私がやるわ！」

【ルーミア】

「今のお前は怒りにかられてる。そんな状態じゃ絶対に勝てない。だからお前は龍神を倒せ。こいつは私に任せろ。」

靈夢は少し考えたのち答えた。

【靈夢】

「分かつたわ。ルーミア、貴女に頼むわ。」

靈夢は恥ずかしそうに喋つた。それにルーミアはクスリと軽く笑いこう答えた。

【ルーミア】

「分かつた。安心しろ。私は負けない。」

【靈夢】

「ええ。私も、負けない！」



対戦表

霊夢ＶＳ龍神

ルーミアＶＳ星矢

裕也ＶＳ勇儀

順番

ルーミアＶＳ星矢

裕也ＶＳ勇儀

霊夢＆??ＶＳ龍神

因みにルーミアと霊夢は別れて戦っています。



妖怪の森・滝から離れた場所

【ルーミア】

「お前には本気で行く。」

【星矢】

「はーっはははー！俺様は無敵だー！龍神様に力をいただいたからなー！貴様がどんな本気を出した所で俺様に叶う訳がないんだー！」

【ルーミア】

「うるさい奴だ。少し黙れ。」

ルーミアがそう言つて腕を星矢の方に向かつて向けたら。高速の黒い何かが星矢の元に飛んで行き、口にくつづいた。星矢は早く、そして油断をしていた事もあり避ける事が出来なかつた。

【星矢】

「んぐ？ んー！ んー！」

星矢は必死で取ろうとするが意思を持つてゐるかの様に話さなかつた。

【ルーミア】

「すー、はー。」

(裕也、お前の力を貸してもらう!)

ルーミアは心でそうつぶやいた。するとルーミアの髪が黒く染まり、靈力が跳ね上がつた。

【星矢】

「ん！ んーーーふはーき、貴様！ それはなんだ！」

【ルーミア】

「この姿か？ これはな、裕也の能力。仲間の力を借りる程度の能力の力だ。」

【星矢】

「な!? 他人の力を使うなんて聞いた事ないぞ!」

【ルーミア】

「私が使っている訳じやない。裕也の能力は仲間が近くにいたら仲間も強くなる、だ。そのおかげかな。ま、信頼が成せるわざだ。」

ルーミアは自慢げに話した。星矢はそれがムカついたのかいきなり弾幕を打つてきた。しかし、ルーミアが片手を星矢が打つてきた弾幕に翳すと、弾幕が黒く丸い物の中に入つて行つた。その光景に星矢は驚いた。

【星矢】

「んな!? 何をした!」

【ルーミア】

「そんなに驚く必要はないだろ。私はただ能力を使つただけなんだからな。」

【星矢】

「の、能力、だと。」

星矢はまだ信じられないような顔をしていた。

【ルーミア】

「ああ、そうだ。私の能力。闇を操る程度の能力。闇、つまり虚無、闇は全てを飲み込み何者も残さないそれが闇だ。そして、これが私の本来の力だ。だから貴様の弾幕を弾幕

は闇に飲まれて消えた。」

【星矢】

「な、なんだよ、それ。そんなの卑怯だろ！」

ルーミアは冷たくそして重い空気を出しながら喋った。

【ルーミア】

「戦いに卑怯も卑劣もない。それじゃ行くぞ。」

絶界禁書「虚無の風」

ルーミアは黒い本を出ししそう唱えた。すると本から黒い風が吹き荒れた。星矢は避けようとしたが間に合わず右肩が風に包まれた。すると合った筈の腕が元からそこには無かつたかの様になくなっていた。そして、不思議な事に、血すら流れていたかつた。

【星矢】

「う、うわあああああ!!!!アアアアアアアアアア!!!!腕があああああ!!!!」

星矢は悲痛な叫びをしながら地面を転げ回った。

【ルーミア】

「痛いか？今、楽にしてやる。」

ルーミアがまた黒い本を出し唱えようとしたら。

怪輪「地獄の苦輪」

その掛け声と共に紫色のリングがルーミアと星矢の間を通つて行つた。ルーミアはそれにより少し星矢との距離を開けた。そして森の中から出てきたのは、勇儀と裕也が出てきた。

【ルーミア】

「裕也。それに、勇儀とか言つたな。どうして貴様が裕也と一緒にいるんだ。」

【裕也】

「話は後だ。」

裕也はそう言つて星矢の元に向かつて行つた。星矢はまだ地面を転げ回つていた。

【星矢】

「痛い！ 痛い！ 誰か助けて！」

裕也は飽きれ顔で勇儀を呼んだ。

【裕也】

「勇儀！ 少しいいか！」

【勇儀】

「ん？ なんだ裕也。」

【裕也】

「こいつは鬼と妖精のハーフらしいんだが、勇儀は如何したい。」

【勇儀】

「なぜ、私に聞く。」

勇儀は目をつむりながら答えた。

【裕也】

「仮にもこいつが鬼だからだ。鬼は少ないんだろ？だから勇儀、お前が決める。俺はお前の答えに従う。」

勇儀は少し考え、星矢に近づいた。星矢は痛いと喚くだけだった。

【勇儀】

「・・・」

【星矢】

「ううう。痛い。助けて。」

星矢の姿を見て勇儀は溜息を付きながら頭を搔いた。

【勇儀】

「はー。なっさけないな。お前は鬼何だろ？なのに直ぐに負け、卑怯な事も平氣でやる。本当だつたら見捨ててていい所だが、私が一から鍛えてやる。」

星矢は驚いた顔をした。

【星矢】

「この、俺を許すと言うのか？こんな俺を。う、うう。ありがとう。」

星矢は泣きながら感謝をした。裕也は勇儀の元に向かつた。

【裕也】

「勇儀、お前はそれでいいんだな？」

【勇儀】

「ああ、こいつは私が一から育てる。」

【裕也】

「分かった。」

裕也は星矢の無くなつた腕の所に行き、スペルカードを出した。

人界「全てを打ち消す奇跡の光」

スペルカードが強い光を放つた。光が消えたと思つたら星矢の腕が元に戻つていた。

【星矢】

「な！ 腕が、治つた。」

【裕也】

「これに懲りたら悪い事はもうしない事だな。」

星矢は泣いて感謝をした。

【星矢】

「ありがとう。ありがとう。」

【裕也】

「お礼なら勇儀に言うんだな。勇儀、後は頼むわ。」

裕也はルーミアの所に行つた。

【ルーミア】

「如何言うつもりだ。何故勇儀と一緒にいる。」

【裕也】

「今説明する。」



妖怪の森・滝に行く為の山中 V.S 勇儀

【裕也】

「さあ、こい。」

【勇儀】

「それじゃあ、遠慮無く。」

勇儀はそれだけ言うと肉眼では見えない程のパンチを裕也に食らわせた。

【裕也】

「！ ちつ！ てつ！ やつ！ はあつ！」

裕也は勇儀のパンチを全て受け流した。

【勇儀】

「……やるじゃないか。楽しくなつて來た。次、これはどうだ。」

怪輪 「地獄の苦輪」

紫色のリングが裕也目掛け放たれた。

【裕也】

「く！」

暴風 「雷雲」

雷が混じつた嵐が吹き荒れ勇儀のスペルカードを巻き込んでそのまま威力を落とさずに勇儀に向かつて行つた。

【勇儀】

「はは！この緊張！この死と隣り合わせの感覚！神経が研ぎ澄まされる！忘れていた鬼の力が、役目が！思ひが！蘇る！」

勇儀は気合いで打ち消した。

【裕也】

「やつぱりこの程度は効かないか。」

裕也は凄く落ち着いていた。

【勇儀】

「ふう。さあ、今度はあたしからだよ！」

勇儀は盃を全て飲み干しひょうたんを近場に置いた。（因みに紫の干渉はありません。何故なら妖怪の森一体が龍神の力で満ちていてるからだ。紫も龍神に干渉する事は出来ないんです。その為勇儀は本気でやる事が出来るのです。以上、トキオの説明でした。）

【勇儀】

「はああつ！」

【裕也】

「ぐう!？」

勇儀が放った拳圧で裕也は後ろに吹き飛んだ。裕也は直ぐに立とうとしたが何時の間にかいした勇儀が拳を振り下ろしていたので起きる動作を辞め、裕也に向かって来た勇儀の拳を掴むと足で勇儀の腹をおもつきり蹴り上げその反動で裕也は立つた。

【勇儀】

「（ざ）ほ！」

【裕也】

「まだまだ！つああああ！はつ！」

裕也はそのまま威力を落とさずに勇儀に向かい拳を振り上げた。しかし立て直していた勇儀は自分の拳で裕也の拳を防いだ。

【勇儀】

「はは！やあああ！」

【裕也】

「はああああ！」

何故かいきなり肉弾戦を始めた裕也と勇儀。その戦いぶりは某戦闘民族同士のヤムチヤ視点の戦いになっていた。その打合いは暫く続いたが勇儀が裕也の攻撃を受けヤムチヤ視点は止まつた。

【勇儀】

「がはっ！ぐう！？」

【裕也】

「食らつとけ！」

拳技「青の鳥——鳳凰襲来拳——」

裕也の拳から青い炎が現れ勇儀を包み込みこんだ。裕也はさらに力を加えた。すると竜が現れ勇儀を吹き飛ばした。その姿はまるで竜に戦いを挑んだ鬼が竜に噛まれて攻撃をしている様だつた。

【勇儀】

「ぐおつ！があああああ！」

勇儀は木を何百本も薙ぎ倒しても止まる様子は無くなす術目無くただ耐えているだけだった。

【勇儀】

「ぐ。（このままじゃあ負ける。何か、何か無いのか。・・・・！　これだ！）

飛ばされている勇儀の目の前に大きい崖があり勇儀はその崖に叩きつけられそうだったのだが、勇儀は無理矢理向きを変え崖に足を付けおもつきり力を加えた。すると竜が破られ光に近い速さで裕也に迫つて来た。勇儀はその時に全身の骨が軋んだが気にならなかった。何故なら、こんな楽しい勝負をもつと続けたかったからだ。

【勇儀】

「（さあ、行くぞ！）裕也あああ！」

【裕也】

「くつ！（避けるか！：いや、勇儀は純粋に戦つている。今まで自分の為、エゴの為、私欲の為には戦つたが、こんな真っ直ぐに気持ちが伝わる戦いは初めてだ。だから。）俺は受ける！こい！勇儀いいいい！」

裕也は勇儀の渾身の頭突きを勇儀に生えている両角を持つて防いだ。しかし、速さと

力が尋常じやないから裕也はに土を掘る勢いで後ろ側に押された。

【裕也】

「ぐつ・・・、ぐつ・・・、ぐつ・・・。」

【勇儀】

「つあああああ!!!」

どつちも引かない力と力がぶつかり合い。どつちが買つても負けてもおかしくない勝負だつた。しかし、どんなに力を持つていても人間は人間。徐々に裕也が押されってきた。

【勇儀】

「さあ、さあ! どうした! 裕也! 押されているぞ!」

【裕也】

「ぐつ・・このままじや。・・・! (この力、この速さ、この重心! 出来る! 一か八かだ!) つうおあああおおりやああああああああ!」

裕也は重心をそのままに回る様にして回転した。

【勇儀】

「な!」

【裕也】

「だああああ！」

裕也は止まる事無く回った。すると風が現れそれがどんどん早く、激しいなり、まるで竜巻の様になつた。

【裕也】

「づおりやあ！」

裕也はその手を上に離した。すると勇儀は竜巻に巻き込まれながら上に上つて行つた。裕也は地面に力を加え加速を付け勇儀の後を追いかけて行つた。

【勇儀】

「づうつ！息が。」

勇儀はまだ上に上がつていた。逃げ出そうとしたが体力が足りず逃げ出せなかつた。

【裕也】

「まだ行くぞ！」

裕也は勇儀に追いつき腹に二つのスペルカードが握つてゐる拳を勇儀におもつきりぶち込んである言葉を言つてスペルカードを放つた。

【裕也】

「トリップルスペル！」

無限 「幻想鬼神鳳凰」

裕也の腕が赤くなり周りに陰陽玉を纏つている真紅の竜となり勇儀を攻撃した。

【勇儀】

「げぼっ！」

真紅の竜は上に上がつていた勇儀をUターンさせ下に向けた。速度は落ちなく今よりも早くなった。勇儀は成す術が無く地面に叩きつけられた。勇儀が叩きつけられた地面はかなり凹んでいた。

【裕也】

「かあつ、はー。はつ、ふう。これならどうだ。」

勝利を確信した裕也で合つたが、よろよろしながらも勇儀は立つた。

【裕也】

「まだやるつもりか。」

【勇儀】

「当たり、前だ、ろ？げほつ！～ほつ！」

そう言うが勇儀はボロボロで立つてているのがやつとの状況に裕也は見えた。

【裕也】

「立つてているのがやつとの状況で、どう戦うつもりだ。」

【勇儀】

「はっ！確かにそうだ。だがな、あたいの靈力と体力が尽きた訳じやない。さあ、これが最後だ。」

勇儀はそう言つて靈力を高めた。裕也は勇儀からの殺氣が今まで以上に強いものになつていた事に驚いた。

【裕也】

「な？！本当の最後か、俺も行くぞ！」

裕也も気を溜めた。

【勇儀】

「づうおりやあ！」

四天王奥義「三歩必殺」

勇儀は一步目に距離を詰め、二歩目に裕也の体制を崩した。

【裕也】

「！ しま！」

そして三歩目で靈力の籠つた重い拳が裕也の腹を殴つた。裕也に凄いGと圧がかかり吹つ飛んだ。

【裕也】

「ぶおつ！がつ！はつ！」

裕也は崖におもつきり体をぶつけ止まつた。

【勇儀】

「はあ、はあ、はあ。どうだ。」

裕也は動かなかつた。

【勇儀】

「しまつた。やり過ぎたか。」

勇儀が裕也の元に行こうとしたが裕也は自分自身の力で立つた。

【裕也】

「はあ、はあ、はあ。い、今のは死ぬかと思ったぞ。」

【勇儀】

「お、おい！大丈夫か！」

勇儀は直ぐに裕也の元に向かつた。

【裕也】

「な、何とかな。」

【勇儀】

「はあー。よかつた。まあ、あたいの負けだね。」

【裕也】

「へ？ どうしてだ？」

【勇儀】

「あたいはもう少しで友を殺す所だつた。弾幕ごつこの範疇を超えていたのさ。でも、裕也、お前は付いてくれた。本気のあたいに。あたいは嬉しかつた。そして、あたいは本気してくれた人間を殺したかもしれない。だからこの勝負。お前の勝ちだ。」

勇儀のその言葉に裕也は笑つた。

【裕也】

「あつはははは！ 何言つてるんだよ。俺もお前を殺しそうだつたんだぞ？」

【勇儀】

「え？」

【裕也】

「無限「幻想鬼神鳳凰」は対象者の全身の筋肉細胞と痛覚神経、五感、そして、脳内神経を焼き切る技なんだ。それを威力を落として、痛覚神経を刺激してかなりの痛みがするだけにしたんだぞ？ しかも、あと数秒で変えなければ確実に打つっていた。だから、引き分けだ。勇儀」

裕也はそう言つて笑ながら勇儀に向かつて右手を出した。

【勇儀】

「？」

【裕也】

「握手だ。」

勇儀はボカンとしていたがニコリと笑ながら裕也の出してきた手を握り返した。

「次は負けないからな。」

【勇儀】

「ああ、こっちもだ。」

(たす、けて。もう、痛いのは、や、だ。)

【裕也】

「！ 勇儀！ 急いで戻るぞ！」

【勇儀】

「？ どうした？」

【裕也】

「嫌な予感がする！ 急げ！」

★

【裕也】

「と、言う訳だ。」

【ルーミア】

「成る程な。ならこの場は引く。」

【裕也】

「ありがとう、ルーミア。勇儀、星矢を頼む。」

【勇儀】

「ああ、分かつた。」

【裕也】

「ルーミア！ 霊夢の元に急ぐぞ！」

【ルーミア】

「分かつた。」

裕也とルーミアはその場を離れ靈夢の元に向かつた。



妖怪の森・滝の湖 V S 龍神

【靈夢】

「行くわよ！」

【龍神】

「い。」

靈符「夢想封印」

スペルカードから出てきた陰陽玉が龍神を襲つた。

【龍神】

「ふん！」

龍神は陰陽玉を全て素手で撃ち落とした。

【靈夢】

「な？」

【龍神】

「この程度か。次はこっちから行くぞ。」

龍神は手を靈夢に向けたら靈夢がいきなり吹き飛んだ。

【靈夢】

「ぐうっ！な、なにが。」

靈夢は自分に起こつた現象に戸惑つていた。

【龍神】

「ふん。そんな事も分からぬのか。ただ弾幕を打つただけだ。」

【靈夢】

「な。見えなかつた。」

【龍神】

「これで力の差が分かつただろう。大人しくしてろ。雑魚が！」

【靈夢】

「くつ！はつ！」

靈夢は大量の札を投げそれに隠れ龍神に近付いたのだが。

【龍神】

「甘い！」

水流 「土砂水流」

龍神がそう言うと土砂と水がミックスした泥水が靈夢を襲つた。

【靈夢】

「ばーぼー！」

靈夢は泥水のみ飲み込まれ岩や木や瓦礫などが入つた泥水で攻撃された。靈夢は泥水から開放されたら髪からつま先まで泥だらけの傷だらけだつた。靈夢は口に入つた泥水を出していた。

【靈夢】

「げほ！げほ！ごぼ！」

【龍神】

「きたないな、洗つてやろう。」

水付 「水竜の怒り」

龍神がそう言うと龍神の後ろに合つた水が形を変え、竜の形になつた。その水竜は靈夢を水の中に入れそのままに上昇させ急降下で地面に叩きつけられた。

【靈夢】

「がつ！」

靈夢は力の差を思い知つた。だがフラフラと立ち上がつた。

【靈夢】

「私は、諦めない！だつて私は博麗靈夢なのだから！」

【龍神】

「ふん。博麗の巫女としての役目か。貴様は操り人形だな。幻想でしか生きれない人間が。」

【靈夢】

「違う！私は、博麗でもあり、そして靈夢もある。確かに昔の私、博麗靈夢は面倒く下がりやだし、自分の力を過信して修行をしなかつた。しかも、異変を解決して行くと私の周りに沢山の人が妖怪が寄ってきた皆を邪魔者扱いしていた。昔の私は何にも興味

を示さなかつた。ただ、神社を掃除して、異変が起きたら解決をし、そして、また日常に戻る。確かに昔の私は幻想に振り回されているけど！今は違う！だって、私は、博麗靈夢じやなくて純粹な靈夢としてここにいる！靈夢としてこの異変を解決しようここに来たのよ！それは決して、幻想に振り回された訳じやない！自分の為に、仲間の為にここにいるのよ！信じている仲間がいるから、私は絶対に負ける訳にはいかないのよ！」

靈夢の靈力がいきなり跳ね上がつた。

「なに。」
【龍神】

「まだ終わらない！」

【靈夢】

「よく言つたぜ！靈夢！」

【???】

「あ、あんたは。」

【靈夢】

「あ、あんたは。」

靈夢の前に現れたのは。

【魔理沙】

「この霧雨魔理沙が助太刀に来たぜ！」

【靈夢】

「ま、魔理沙！？あんたどうしてここに。」

【魔理沙】

「呼ばれたんでな。それに私だけじやないぞ？」

【靈夢】

「え？・な？」

「靈夢の目の前に写つたのは。異変の時に戦つた幻想郷最強の軍勢だった。

【レミリア】

「靈夢！貴女変わつたじやない。今のは貴女なら力を貸してあげてもいいわよ。」

レミリアはカリスマたっぷりな感じで行つた。でも。

【フラン】

「な、に言つてんのお姉さま。そんなにカリスマ出したら力を使い果たして戦えなくな
るよ？」

フランがレミリアねカリスマを崩壊させた。

【レミリア】

「な！そ、そんな事無いもん！」

【フラン】

「頑張ろうね、カリスマ（笑）のレミリアお、ね、え、さ、ま。」
フランがそこまで言うとレミリアはいきなり泣き出した。

【レミリア】

「ぐす、うわん！ちやくやフランがいじめる。」

レミリアは近くにいた咲夜に抱き付いた。

咲夜

おつ
おおおおおおお
おつ 嬢さ、さま！あ――よしよしよしよし。よしよしよしよしよし。

咲夜は鼻からでる忠誠心（笑）を抑えずレミリアを強く抱きしめた。

「さくやー、ありがとう。」

レミリアは涙目、少しハニカミそして、上から目線の三段コンボを咲夜に食らわせた。

咲夜

咲夜は変な叫びをした後忠誠心（笑）が臨界点突破し鼻から血を吹き出しながら倒れた。

【レミリア】

「咲夜!? どうしたの。」

【咲夜】

「お、お嬢様。っ！ ぶは！」

レミリアは倒れた咲夜に近寄った。その瞬間咲夜はまた吐き出し。

【咲夜】

「わ、我が生涯に一片の悔いなし。」

咲夜は最後にそう言つて召された。

【妹紅】

「なにやつてんだか。」

【霊夢】

「妹紅！ どうして。」

【妹紅】

「レミリアや魔理沙と同じ理由だよ。」

【霊夢】

「呼ばれて？ 一体誰に。」

【妹紅】

「ああ、それはな。」

妹紅が続きを言おうとしたら妹紅を呼ぶ声が聞こえた。

「も～こ～た～ん～♪」

【慧音】

「ぶほ！」

【妹紅】

妹紅は慧音の方に向いた。その瞬間慧音のジャンピング頭突きが妹紅の腹にクリティカルアタックをした。（想像ができない人は、とあるで御坂が上条に頭突きするシーンがありますよね？それを慧音先生が実演してくれました。トキオより。）

【慧音】

「あーー！妹紅妹紅妹紅かわいいなー。」

【妹紅】

「ぎやあああああ！骨が軋む！角が刺さる！慧音！落ち着いてくれ！痛い痛い！いや、マジでヤバイ。慧音、や、辞めて。リバースしちゃうから！リバースしちゃうから！」名状し難い光景がそこにあつた。ついでに慧音は何故かきもつっていた。

【靈夢】

「ちょ！慧音！貴女月が出てないのに何で。」

靈夢がそう言うと妹紅を離した。

【慧音】

「ああ、すまない。取り乱したな。それで答えたが、何となく出来た。」

【妹紅】

「ちよ wwwwwwおまつ wwwwww」

妹紅は笑ながら慧音を後ろに下げた。

【永琳】

「何か皆変になつてゐるわね。」

次に現れたのは永琳だつた。

【靈夢】

「永琳。あんたもどうして。」

【永琳】

「呼ばれたからよ。」

【靈夢】

「だから一体誰に。」

【永琳】

「来たわよ。」

永琳がそう言うと皆が同じ方向に向いたから靈夢は気になり皆が向いている方を見

た。そこにいたのは。

【裕也】

「ん？ 皆どうしてここに。」

【魔理沙】

「何言つてんだよ。お前が呼んだんだぜ裕也」

【裕也】

「いや、俺は何も。と言うか今日はまだ合っていないだろう？」

【魔理沙】

「いや、確かに聞こえたぜ。なあ、皆。」

魔理沙がそう言うとレミリア達は領いた。そして魔理沙は話を続けた。

【魔理沙】

「心に直接だぜ！」

【裕也】

「心に直接？」

【魔理沙】

「ああ！ 靈夢が危ないかもしれないから手伝ってくれってな。」

裕也は謎が解けた様だった。

【裕也】

「成る程。俺と勇儀の戦いで漏れ出した俺の靈力が俺の気持ちを乗せ、俺を信じてくれて助けに来てくれる仲間に心をとうして伝わったんだ。勇儀との勝負の時誰か靈夢に力を貸してくれないかとずっと祈つていたからな。」

【勇儀】

「あたいと戦つている時に考え方をしていたんかい？あつはははは！いや、あんたは本当に凄いね。」

勇儀は関心をしていた。こんなに面白く、そして優しい人間は本当に久しぶりだつたからだ。

【裕也】

「さあ、待たせたな龍神。やろうぜ、これが最終決戦だ！」

裕也達の言葉を聞いて龍神は笑つた。

【龍神】

「はは！威勢はいいな。だがどうする。その人数じや同士討ちをするだけだぞ。」

裕也はいきなり笑つた。

【裕也】

「ふ。よく言うぜ。まだ力を隠し持つてゐるくせに。」

【龍神】

「よく分かつたな。安心しろ貴様らには見せないからな。」

【裕也】

「それじゃメンバーを決めるから待つてろ。」

【龍神】

「ほう。よし、待つてやるよく考えろよ。」

龍神は目を瞑った。

【裕也】

「さあ皆、どうする。俺の希望は二人もしくは三人のチームが望ましいんだがな。」

【レミリア】

「取り敢えずここにいる人を確認しましよう。」

【裕也】

「そうだな。ここにいるのは、レミリア、咲夜、妹紅、慧音、ルーミア、靈夢、永琳、魔理沙、フラン、そして俺を合わせて、丁度十人か。さて、どう分けるか。」

ありがとう・前編

戦う順番

一回戦・妹紅	慧音	永琳	魔理沙
二回戦・レミリア	咲夜	ルーミア	フラン
三回戦・靈夢	裕也		



【龍神】

「どうだ？ 決まつたか？」

龍神が目を開けて来て、 そう聞いて来た。

【裕也】

「ああ、 いいぜ。」

【龍神】

「さあ、 最初はどいつだ？」

【永琳】

「私達よ。」

【龍神】

「ほう。最初は、歴史を操りし混血者に、人の道を外れて無限の命を宿し者と、罪を犯せし月の煩惱から、人の付き合い方をしらぬ人間か。何と纏まりのないチームだ。」

【魔理沙】

「うるさいぜ！確かに私達は、一緒に戦った事はないぜ？だがな、そんなのは関係ない！だつて、問題は協力しようと言う気持ちだ！」

【妹紅】

「はつづい事を平氣で言うな。だが、確かにそうだ。なあ、慧音」

【慧音】

「ふう。変わつたな妹紅。」

【妹紅】

「そうか？」

【慧音】

「ああ。（だつて、昔は相手の事など考へる事が出来なかつたからな。）さて、永琳さん？ でしたつけ。行きましょくか。」

【永琳】

「ふふ。そうね。」

【龍神】

「なら、他の奴らは。」

龍神は腕を前に出した。すると水のバリアみたいな物が現れ裕也達を囲んだ。

【裕也】

「なんだこれは？」

【龍神】

「これは邪魔が入らない様にするバリアだ。どんな事をしても破る事は出来ない。ただし、俺を一回ごとに倒すと次の物が出来る様になる。そう言う物だ。」

龍神はそう言った。

【レミリア】

「フラン。あんたの能力で何とかならない？」

【フラン】

「無理だよ。これには目がないから。」

【レミリア】

「そう。」

【龍神】

「貴様らはそこで見ていろ。さて、来ないのか？なら、こっちから行く！」

龍神は水の弾幕を繰り出した。

【魔理沙】

「へっ！・こんななの！」

魔理沙が弾幕を出そうとした瞬間。

【慧音】

「！ 離れろ！ 魔理沙！」

【魔理沙】

「へ？・んな！」

魔理沙は驚いた。何故なら、弾幕が幅を広げたからだ。魔理沙はいきなりの事で止まる事が出来ず、水の弾幕を浴びるかと思ったその時。

【妹紅】

「危ない！」

【魔理沙】

「うわっ！」

妹紅は寸前の所で魔理沙を押しのけ、自分が身代わりになつた。

【妹紅】

「んぐ？（い、息が。）」

妹紅は水の塊に顔全体を包まれて、苦しそうだ。

【慧音】

「も、妹紅!!!き、貴様ああああ!!」

【永琳】

「ま、待つて！今行つたら！」

【慧音】

「うるさい！邪魔だ！どけ！」

慧音は止めた永琳を押しのけ、妹紅の所に向かつた。しかし。

【龍神】

「ふん。この程度で取り乱すとはな。」

【慧音】

「どけつつってんだよ！この野郎！」

慧音はそう言うと、姿が変わった。髪が緑色になり、角が生えた。

【龍神】

「ほう。憎しみで半獣化しおつたか。だが。」

【慧音】

「ぐうつ?!?があああああ!!」

慧音は龍神を自慢の頭突きで破ろうとしたが、逆に慧音の頭に頭突きをした。めきつ！と、言う嫌な音が周囲に鳴り響いた。龍神はそのまま慧音の角を掴みおもつきり顔を殴つた。

【妹紅】

「（ご）ぼが！（慧音！）」

妹紅は自らの体を炎の塊にし、水を蒸発させた。

【龍神】

「ふむ。中々、やる様だな。」

龍神は少しだけ安心をした感じであつた。

【妹紅】

「慧音！おい！慧音！しつかりしろ！」

妹紅は慧音のそばに歩み寄つた。慧音の姿は、頭から血が出ており、顔にはかなり大きい傷が付いていた。

【慧音】

「・・・」

妹紅の呼び掛けに慧音は何も反応しない。

【龍神】

「ふん。行き込んで来たはいいが、その程度の力で私に勝つつもりか？一生勝てないな。」

【妹紅】

「く！」

妹紅は何も言い返せなかつた。

【龍神】

「期待外れだ。」

皆は動けなかつた。何故なら自分達がどんなに頑張つたつて、こいつには勝てないと確信してしまつたからだ。だが、そんな中でも、まだ諦めていないやつがいた。そう。魔理沙、裕也、靈夢の人間チームだ。水のバリアは全ての攻撃、声が吸収される使用だ。だからしやべれたのは、魔理沙だけだつた。

【魔理沙】

「ふざけるな！」

【妹紅】

「魔理沙？」

【永琳】

「魔理沙？」

【魔理沙】

「私達はまだ負けてない！」

【龍神】

「ふん。何を言つている。思い知つただろ。どんなに頑張つたとして、この私に勝てるわけがない。」

【魔理沙】

「へへ。それはどうかな。」

【龍神】

「なに？」

【魔理沙】

「永琳！お前は慧音の治療、妹紅は外れ玉が来ない様にしておくんだぜ！」

【永琳】

「！　ええ！」

【妹紅】

「わ、分かつた。」

【龍神】

「ふん。無駄な事を。」

【魔理沙】

「へへ。そいつは、どうかな？絆の力！お前に見せてやるぜ！」

魔理沙はそう言つた。すると、魔理沙の髪が伸び、靈力が上がつた。

【龍神】

「なに！どう言うわけだ！」

【魔理沙】

「へへ。教えてやる。裕也の能力に、仲間の力を借りる程度の能力があつてな？その能力は、仲間が近くにいるなら、そいつも力が上がるんだ。」

【龍神】

「ほう。しかし、何故貴様だけなんだ？他の二人は？」

魔理沙は力強くこう答えた。

【魔理沙】

「力つて物は、修行や鍛錬をしたら強くなる物だと私は思つていた。でも、違うんだよ。確かにそれも大事だ、でもな？裕也を見て分かつたんだ。こいつは自分が一度信用をした奴なら、どんな状況にもそいつの味方をする。」

【龍神】

「だから一体なんだと言うのだ！」

「わつつかんねえ奴だな、私達は裕也の仲間だからここに来た。仲間は人を、妖怪を強くするんだぜ？」

【龍神】

「戯言を！」

【魔理沙】

「戯言かどうか、確かめてみるか？」

【龍神】

「ほざけ！三下が！」

龍神は弾幕を打ちながら魔理沙に突進をして來た。だが、魔理沙は、その弾幕を全てよけた。

【龍神】

「なに!?」

【魔理沙】

「へ！甘いぜ！今度はこつちの番だ！」

魔理沙は龍神が自分の前あたりに來た時にタイミングを合わせて、スペルを發動させた。

【魔理沙】

「は！油断したな！今なら使える！私の奥義行くぜ！」

魔理沙はスペルを八卦炉に取り付け、自分が乗つっていた箒に装着してこう唱えた。

魔心「真・ファイナルマスタースパーク」

すると、箒が大きい砲台見たいな形になりそこから巨大な赤色のマスタースパークが放たれた。

【龍神】

「なに！ぐああ！」

龍神はモロに食らつてしまつた。

【魔理沙】

「へ、へへ。どうだ。」

魔理沙は龍神を見た。そこには、片腕がなくなつていた龍神がいた。

【龍神】

「ぐうう。中々やる。」

【妹紅】

「すげえ。これなら。」

妹紅達は少し離れた場所で慧音の治療をしていて、魔理沙の戦いを見ていた。

「ぐつ・・・・うう・・・・」

【妹紅】

「あ！慧音！気が付いたか！よ、よかつた！」

【慧音】

「も・・・・妹紅。魔理沙を手伝ってくれ。今の・・・・ままでは、勝てない。」

【妹紅】

「え？どういう意味？だつて、魔理沙が押しているじゃないか。」

そう、誰がどう見ても魔理沙が押しているように見えていた。しかし。

【慧音】

「し・・・・かし。今の・・・・魔理沙は、体力を・・・・使い果たしている。」

【妹紅】

「え？」

妹紅はそんな素振りを見せていない魔理沙に驚いた。

【妹紅】

「だつ。だつて、魔理沙はそんな素振りは。」

【慧音】

「ふ。気づ……かないのも、仕方が……ない。何故なら、魔理沙は、私たちの……誰かを、待っている。その……為、悟られてはいけないからな。」

慧音は苦しそうにそうつぶやいた。そして、その後にこう続いた。

【慧音】

「私……は、見ての……とう、り。むり、だ。」

【妹紅】

「だつたら！ 永琳！ お前がいけよ！」

【永琳】

「別に言つてもいいけど、あんたは慧音の治療をきちんと出来るの？」

【妹紅】

「そ、それ、は。」

妹紅は青ざめていて、唇を噛んでいた。決められない自分に、何も出来ない自分に。そして、何も言い返せない自分に。

そんな様子を見ていた慧音は、寝ながら妹紅の襟首を掴み怒鳴り上げた。

【慧音】

「妹紅!! お前はお前にしか出来ない事があるだろう!! 昔、教えた筈だ!! 今の自分に出来る事を精一杯やれって!!! 私はお前に言つた筈だ!! お前はこんな所でなにしている!! 魔

理沙が!!私たちの仲間が必死に戦っているのに、妹紅!お前は、過ちを犯すつもりか!!
ぐつ・・・・がは!」

慧音はいきなり苦しみだし、吐血した。

【妹紅】

「け、慧音!お、おい!一体どうしたんだ!!おい!!!!」

妹紅は心配そうに慧音に呼び掛けた。

【永琳】

「!ダメよ、これ以上喋つちやあ。」

【妹紅】

「お、おい、永琳。これは、どういう意味なんだよ!!」

【永琳】

「どうしたものないわよ。慧音は、多分。頭にヒビと肋骨が折れていて、本当は喋れる状態
じゃないのよ。それを、貴女の為に無理して喋つていたのよ。」

【妹紅】

「そ、そんな。」

【永琳】

「貴女はどうしたいの?このまま自分で出来る事があるのに、何もしないでただ最悪の

結果にするか、今の自分に出来る事を精一杯やつて、最悪の結果を回避するか、貴女はどうしたいの。」

【妹紅】

「わ、私は。」

妹紅はふいに魔理沙を見た。

【龍神】

「ふん。疲れて来てるぞ。」

【魔理沙】

「へ！ そう言うお前だつて片腕がないだろ。お互い様だ。」

【龍神】

「ふん。ぜえああ！」

【魔理沙】

「ふつ！ はつ！ ！ がはつ！」

龍神は弾幕を打ち出した。魔理沙はそれをよけていたが、龍神は弾幕を凹に使い、魔理沙の腹にパンチを食らわせた。魔理沙は少し体制を崩したが、立て直した。しかし、さつきの攻撃が効いたのか魔理沙はふらついていた。

【魔理沙】

「はあ・・・・はあ・・・・うつ・・・・くつ。」

【龍神】

「ここまでの様だな。仲間は来ない、靈力も尽きかけている。さあ、ここで・・・死ね。」
龍神はさつきより強く、そして、大量の弾幕を打ちながらその上に、また大量の弾幕
を打ち出した。龍神はそれに紛れ込んだ。

【魔理沙】

「なに！くつ！よけきれない！くそ！」

魔空 「スターダストブレイヴ」

魔理沙は八卦炉強く握つて、そう唱えた。すると八卦炉から大量の雪の結晶が流星の
様な降り注ぎ大量の弾幕を相殺した。しかし、八卦炉にヒビが入つた。

【魔理沙】

「ぐう。やつぱり耐えれないか。これ以上は。」

【龍神】

「よく耐えたな。もう諦めたらどうだ？」

【魔理沙】

「・・・確かに、諦めた方が楽かもしれないけど、人間つて言うのは諦めが悪くつてな
！それに、仲間を信じるのが人間つてヤツなんだぜ？しかも、どんなに遅くても来るつ

て信じるんだ。少なくとも私はそう思うぜ。」

妹紅はその光景を見ていた。

【妹紅】

「魔理沙。……私は。」

【慧音】

「妹紅。……聞いてくれ。」

【妹紅】

「慧音! 気が付いたのか!」

【永琳】

「喋つちやダメよ。傷に触るわ。」

慧音は苦しそうに喋つた。

【慧音】

「昔の……話だ。ある男がいた。その……男は、熱くて、そして、芯がしつかりしているヤツだつた。ぐうう……そ、その、男が言つたんだ。俺はある兄弟にこう言つたんだって。」

慧音は一旦間を開けそして話を続けた。

【慧音】

「俺を信じるお前じやなく、お前を信じる俺でも無く、お前を信じるお前自信を信じろ。つて、いつ、た、んだ。その・・・・・意味が・・・・分かるか？妹紅。」

【妹紅】

「わかんないよ。慧音。」

【慧音】

「うぐうう・・・・そ、そ、うか。その意味、はな？お前はお前自身だ。誰の何者でもない。私を信じてる自分でも無く、自分を信じてる私でも無く。自分自身を信じてそして、決める。そう言う意味があるんだ。だ、だか、ら。お前、が、きめ・・・・・・・・慧音はそこから喋らなくなつた。

【妹紅】

「慧音！慧音！おい！慧音！」

妹紅の呼び掛けに慧音は答えない。

【妹紅】

「永琳！慧音は！慧音は！」

【永琳】

「・・・・安心しなさい。気絶しただけだわ。でも、危ない状態には変わりしないわね。」

【妹紅】

「よかつた。」

【永琳】

「妹紅。私は何も言わないわ。慧音の言葉を聞いて、貴女がどう思つたかは知らない。でも、これだけは言える。甘つたれてんじゃないわよ！普段のあんたはいつも強気だつたでしょ！しかも、大切な人の言葉を聞いても悩んでいる！あんたは慧音を！裕也を！信じていのいの！？ならどうしてここに来た！答えろ！藤原妹紅！」

永琳はそういうながら妹紅を引っ叩いた。

【妹紅】

「ぐつ！……そうだ。何を悩んでいたんだ。自分自身を信じろ、か。そうだよな！私は、いや、俺は怖かつたのかもしれない。昔の自分に戻るのが、だけど、もう迷わない！俺は！慧音の、仲間の為に！昔に戻る！」

妹紅はそう言うと、魔理沙の元に飛んで行つた。

【永琳】

「ふふ。若いわね。いや、私だってまだ若いけど。」

【慧音】

「はは。強がり、ですか？」

【永琳】

「あら？ 目が覚めたの？」

【慧音】

「まあ、な。」

【永琳】

「・・・・一つ、聞かせてもらつていいかしら？」

【慧音】

「なんだ？」

【永琳】

「さつきのあの言葉。あれは誰の言葉なんだ？」

【慧音】

「ふふ。さあね。顔も、名前も思い出せないわ。でも、その人が、好きだつたつて事は覚えているんだ。」

【永琳】

「そして、さつきの言葉ね。」

【慧音】

「そうだ。まあ、今の私たちは眺めているだけだがな。」

【永琳】

「・・・・そうね。がんばんなさい。魔理沙、妹紅。」

慧音、永琳はそういうながら上で戦っている二人を眺めていた。今の自分たちに出来る事を精一杯やって。



【魔理沙】

「く、そ。」

【龍神】

「くくく。ここまでだな。よく耐えたと褒めてやろう。だが、これで終わりだ。」

魔理沙はピンチな状態にいた。慣れない魔法の連発。よける事に使った精神。全てが限界に来ていた。龍神はそんな魔理沙に気付き、とどめを刺すところだつた。

【龍神】

「さよならだ。」

【魔理沙】

「ちき、しよう。」

龍神の手から弾幕が放たれた。魔理沙は諦め目をつむつた。しかし、いつまで立つても振動が来ないから何事かと思い、目を開けた。そこにいたのは。

【魔理沙】

「妹紅！」

妹紅は弾幕を握りつぶしていた。

【妹紅】

「またせたな。」

【魔理沙】

「遅いぜ。」

【妹紅】

「悪い。だが、もう大丈夫だ。」

【魔理沙】

「なあ、一ついいか？」

【妹紅】

「なんだ？」

【魔理沙】

「私達、性格と言うか、口調変わつていなかいか？」

【妹紅】

「そうだな。だが、何時の間にかもどつているものだ。そして、お前は何故元気そうに話している？」

【魔理沙】

「む！ 思い出したら痛みが。」

【妹紅】

「そうかい。まあ、いい。下がつていろ、魔理沙。」

【魔理沙】

「いや、まだ大丈夫だ。確かに、辛いけど、まだやれる！」

魔理沙は汗だくな顔で答えていた。

【妹紅】

「そうか、無理はするなよ？」

【魔理沙】

「ああ。」

【龍神】

「今更、一人増えたて無駄だ。貴様らは私に勝てない。」

【魔理沙】

「へ、そうつああどうかな。」

【妹紅】

「ま、やれるだけやるか。」

【魔理沙】

「くるぜ。」

【妹紅】

「ああ。」

【龍神】

「死ねええ!!」

龍神は弾幕を展開した。妹紅と魔理沙は華麗に避けた。

「なに！」

【龍神】

「なにを驚いてやがる。今度はこっちから行くぞ！魔理沙！」

【魔理沙】

「ああ！」

魔理沙と妹紅は初めて合わせたとは思えない連携技を使つた。最初に魔理沙が弾幕をばら撒いた所に少しずらした場所に、今度は妹紅弾幕をばら撒いた。龍神は逃げる場所すらない弾幕を相殺して行きながら道を作り、避けていた。

【妹紅】

「魔理沙。」

【魔理沙】

「なんだ？」

【妹紅】

「俺も信じてみるよ。ここにいる皆を。」

【魔理沙】

「そうか。ならそれまで待つててやる。まだ向こうさんは掛かりそうだしな。」

そう、魔理沙の言う通り龍神はまだ弾幕の相殺に追われていた。

【妹紅】

「サンキュー。」

妹紅は目をつむつた。

【妹紅】

「(ふう。まさか、人を嫌つた俺が人を本気で信じる様になるとは。何が起ころか分かつたもんじやないね。なあ、慧音。)」

妹紅は暫くそうしていたが、だんだん姿が変わつて來た。髪が黒色に戻り目の色は吸い込まれそうな黒色になつていた。妹紅は目を開けた。

【妹紅】

「これは、俺がまだ人間だった頃の姿？ふふ。成る程ね。しかも、能力も変わつてゐるな。これが、今の俺に必要な力つてか？」

【魔理沙】

「妹紅、その姿は？」

【妹紅】

「俺の本来の姿、だな。そして、裕也の能力。その本質がわかつたぜ。」

【魔理沙】

「本質だと？」

【妹紅】

「裕也の能力に、仲間の力を借りる程度の能力があるよな？そして、その延長として築いた絆の仲間の力を上げる。そう思つていた。」

【魔理沙】

「どう言う意味だ。」

【妹紅】

「早い話が、力が上がるわけじやないんだ。」

【魔理沙】

「ど、言うと？」

【妹紅】

「それじやあ聞くが、何故姿が変わる？靈力が上がるだけでいいだろうに。」

【魔理沙】

「確かに。」

【妹紅】

「そして、俺は昔に戻った。それに、能力が変わっている。これらを組み合わせたら、出てくる答えは一つ。仲間の力を借りる程度の能力の延長は、信頼されている仲間を今の状態で最も力が強い時の姿に変える程度の能力。これしか考えられない。」

【魔理沙】

「つまり、私達が強くなればそれだけ裕也の能力で増幅した時の力も上がるつて意味か？」

【妹紅】

「早い話がそうだな。それと、追加だ。お前も知っているだろう、嘘偽りのない信頼が必要だ。しかも、不純な意味で力を求めるど、強くなる代わりに痛みと苦しみが来るらしいからな。」

【魔理沙】

「何故そんな事を知つている。」

【妹紅】

「さあな。おつと、話もここまでだ。」

龍神はようやく抜け出せたみたいだつた。

【龍神】

「よくもやつてくれたな！」

龍神は誰から見てもわかるくらいに起こつていた。

【魔理沙】

「へ！スカしているからだぜ！」

【龍神】

「ぐー！うるさい！」

龍神は弾幕をデタラメに放つた。

【魔理沙】

「ほっ！やっ！とつ！」

【妹紅】

「ふっ！やっ！とりやあ！」

二人は弾幕を避けていた。

【魔理沙】

「行くぜ！妹紅！」

【妹紅】

「ああ！魔理沙！」

魔理沙はスペルを取り出し、妹紅は避けながら龍神に近寄った。

【魔理沙】

「避けれよ！」

彗星「ブレイジングスター」

大量の星屑とともに魔理沙は篝後と回転しながら龍神に突進をして來た。

【龍神】

「なんだど!?ぐあ！」

【妹紅】

「まだだぞ！くらえ！」

「インペリシャブルシューティング」

妹紅の手から一つの弾幕が放たれた。その弾幕は、形を持つてはおらず、伸びたり、曲がったり、大きくなつたり、分裂をして増えたりと、いろいろな形で龍神を攻撃した。

【龍神】

「がはっ！ぐううう。な！しま！があああ！」

龍神は全ての弾幕に当たり倒れた。

【魔理沙】

「やつたか？」

「わからん。」

砂埃が晴れ、龍神の姿が見えた。龍神は仰向けて倒れていた。

【魔理沙】

「やつたぜ！妹紅」

【妹紅】

「ああ！魔理沙！」

二人は喜んでいたが、龍神はゆっくりと立ち上がった。

【魔理沙】

「な、なんだ。まだやるのか？」

魔理沙が警戒したが、龍神は立つたまま動かなくなつた。暫くそうしていたが、いきなり龍神の体が軋みだし、姿を変えた。最初は、少年の姿をしていたが、体格は青年男性より少し高く、体が鱗に覆われていた。

【龍神】

「・・・・・」

【魔理沙】

「よくわからないが、来ないならこっちから行くぜ！」

【妹紅】

「ああ！」

「二人は龍神に突進をした。しかし、龍神はそれを軽く避け、魔理沙と妹紅の顔に手を当て、弾幕を放った。

【魔理沙】

「んぐばああああ！」

【妹紅】

「くうおおおおお！」

魔理沙と妹紅は言葉にならない痛みを受けた。そのまま倒れそうになるが、龍神の蹴

りによつて、二人は吹き飛ばされた。

【魔理沙】

「あぐ・・・・う・・・・・」

【妹紅】

「ぐ・・・・ぐう・・・・・」

龍神はそんな二人を興味がない様な感じに、無視をした。

【永琳】

「魔理沙！妹紅！」

永琳はゆっくりと慧音をおき、直ぐに二人の元に向かつた。

【永琳】

「あいつ、私がいる場所に。 . . . 今はそれより。二人の治療が優先ね。」

永琳は一人の治療を始めた。



【龍神】

「さあ、二回戦を始めようか。」

龍神がそう言うと二回戦に戦うレミリア達がバリアから放たれた。

【レミリア】

「あら？ いいわね。さあ、行くわよ、フラン、咲夜、ルーミア。」

—

【フラン】

「わかつた。お姉さまもカリスマが切れない様にね！」

【レミリア】

「な!? あ、甘く見ないでよ!」

【フラン】

「はいはい。わかつた、わかつた、お姉さま。」

【レミリア】

「ううううそんな事ないもん。」

【フラン】

「はいはい。わろす。わろす。」

いきなり始まつた二人の言い合いに止めようとしたルーミアであつたが、咲夜が止めた。

【ルーミア】

「なんだ、咲夜。」

【咲夜】

「止めるなんてそんなもつたいない。」

【ルーミア】

「はあ? どう言う意味だ? 戦いにならないだろ?」

【咲夜】

「いや! 今一時この幸福の時間を!」

【ルーミア】

「ばかか！いいから戻る！レミリア！フラン！お前らもだ！きちんとしろ！」

【レミフラ】

「う～～わかつたわよ。」

レミフラは全く同じタイミングでそう言つた。それを聞いた咲夜は鼻血を吹き出したが、直ぐに拭き取り戦闘体制に入つた。

【ルーミア】

「あ。さて、待たせたな。龍神。」

【龍神】

「最後の話は済んだか。」

龍神は無表情で答えた。それに対抗してか、レミリアは威厳たっぷりとこう答えた。

【レミリア】

「ふふ。そう言うあなたはどうなのかしらね。あなたの方が最後になるかも知れないわよ？」

【龍神】

「さつきのとは別人だな。仮にも、残されし最後の吸血王と言つた所か。」

【レミリア】

「あら、私にぴつたりの二つ名じやないのよ。闇の王たる私にぴつたりだわ。」

【ルーミア】

「あー、レミリア？非常に言い辛いが、龍神が付けた私の二つ名は、幻想に集いし最も黒く、そして全ての闇を統べる王、だ。」

【レミリア】

「なによそれ！そっちの方が強そうじやないのよ！」

【フラン】

「まあまあ、落ち着いて、お姉さまもかつこいいから。」

【レミリア】

「フラン～ありがと～！」

レミリアはフランを抱きしめた。

【龍神】

「姉より姉らしいな。最も幼き破壊神よ。」

【フラン】

「破壊神か、まあ、仕方ないわね。」

フランはボソッと小声で答えた。

【咲夜】

「お嬢様方、そろそろいかないと。」

【レミフラ】

「うん。そうだね。」

レミリアとフランはくつ付いていたが、咲夜の一言で離れた。

【龍神】

「ふん。あの二人を静めたか。時を操りし罪深き人間よ。」

【咲夜】

「あら、それは私の二つ名かしら？私にぴったりね。まあ、そんな事は関係ないわね。」

【龍神】

「ほう、それはどう言う意味だ？」

【咲夜】

「こう言う意味よ！」

咲夜は時を止めて、ナイフを龍神の周りに設置した。

【龍神】

「はっ！」

龍神は衝撃波を生み出しナイフを叩き落とした。

【咲夜】

「ちつ。こんなもんじや効かないか。」

【レミリア】

「咲夜、一人で先行しない。皆で行くわよ。」

【咲夜】

「申し訳ありません。」

咲夜はそう言うと一步下がった。

【龍神】

「どうした？何故こない。俺を殺しに来たんじやないのか？」

龍神の煽りにもレミリアは動じなかつた。

【レミリア】

「ええそうよ？でも、そんな見え見えの挑発には乗る気はないわ。」

【龍神】

「ほう。ならどうする？」

【レミリア】

「こうするのよ！」

レミリアはそう言つた瞬間に弾幕を自分達が見えなくなる位に展開した。

【レミリア】

「今よ！」

【咲夜】

「はあああ！」

咲夜はもう一回時を止めた。

【咲夜】

「ふううう。」

咲夜は弾幕に当たらず隠れた状態で龍神の所に行ける場所に両手を前に出し自分の靈力を使い靈力のナイフを作り上げた。それを二個から三個程設置した。時間が動き始めたら当たる様に。

【咲夜】

「そして時は動き出す。」

咲夜は安全な場所に行き時間停止を解いた。

【龍神】

「はつ！ やつ！ ほつ！ ！ そこ！」

龍神は展開されている全ての弾幕を避けながら、咲夜が作つた靈力のナイフをはじき返した。

【龍神】

「その程度か！」

【咲夜】

「ふ。まさか。」

【龍神】

「なに？どう言う事だ。」

龍神は何かを企んでいる事は分かつてはいるが、それが何かは分からぬ。そんな龍神の頭上から声が聞こえてきた。

【ルーミア】

「失敗するなよ！」

【フラン】

「わかってるよー！」

何時の間にか龍神の頭上にいたルーミアとフランは同時にスペルカードを使った。

闇符【ディマーケイション】

禁断【フォーオブアカインレーヴアテイン】

ルーミアから漆黒の霧が現れ龍神を包みこむ様に周りを囲みその霧が龍神に絡み付いた。と、同時に、フランが四人に分身した瞬間赤い尻尾の様な槍が現れ四人のフランは龍神を囲む様な感じの陣形をしてそれを左右八方から放つた。

【ルーミア】

「追撃だ！ フラン！」

【フラン】

「わかった！」

夜符 「ナイトバード」

QED 「495年の波紋」

ルーミアの背中に黒い羽が現れルーミアはその羽を振動させた

。すると、羽が抜け弓矢の様な感じになり龍神に向かつて放たれた。龍神は穴が空きだらけの体を曲げよけ様としたが、波紋が無差別に飛び回り龍神の逃げ道を防いだ。龍神はよける事ができずルーミアの攻撃をくらつた瞬間フランの攻撃を受け龍神は地面に落ちた。

【ルーミア】

「どうだ。」

【フラン】

「分からないよ。」

フランとルーミアは様子を見る事にした。深追いは禁物とルーミアが言つたからだ。その様子を見ている事しか出来なかつたレミリアと咲夜は。

【レミリア】

「うう皆して私をのけ者にする。」

【咲夜】

「まあまあ。まだ戦闘中なのですから気を引き締めて下さい。」

レミリアが駄々を捏ねていた。

【レミリア】

「！ フラン！ ルーミア！ そこから避けて！」

レミリアがそう叫ぶのと同時に、二つの細いレーザーがフランとルーミアを貫いた。その打つた龍神は体中がボロボロだつた。

【フラン】

「かはっ！」

【ルーミア】

「ぐうつ。油断、した。」

フランとルーミアは倒れ動かなかつた。

【レミリア】

「咲夜！」

レミリアがそう叫ぶと同時に咲夜が消え、気が付いたら永琳の元にいた。

【咲夜】

「八意さん。一人をお願いします。」

【永琳】

「わかつたわ。任せなさい。」

咲夜はそれだけ言うと、また消え、次に現れたのはレミリアのとなりだつた。

【咲夜】

「お嬢様。」

【レミリア】

「ええ。わかつてるわ。咲夜。裕也、私達に力を貸して。」

レミリアは怒りを抑え、裕也を信じた。吸血鬼は普通は人間は信じない。だが、勝つために、仲間の為に裕也を信じた。すると、レミリアの姿が変わつた。羽が大きくなり、吸血鬼の肝と言われる歯が伸びて、服装は全身が真紅の服に変わつた。咲夜は服の色が黒くなり、髪が伸びた。

【レミリア】

「龍神。貴方は私の大切な者を傷付けた。その報い、体で補つて貰う！咲夜！」

【咲夜】

「・・・ふつ！」

咲夜はナイフを龍神に投げた。

【龍神】

「そんなナイフはよけるまでもないな。」

龍神はナイフを弾いた。その瞬間ナイフが爆発をしてナイフの破片が龍神に降り注いだ。

【龍神】

「くっ！鬱陶しい！」

龍神は気圧で破片を吹き飛ばした。咲夜はその隙に龍神の懷に入り腕を龍神の腹におもつきり刺した。

【咲夜】

「お嬢様！今です！」

【龍神】

「かは！ぐ！この小娘！離せ！」

龍神は咲夜をおもつきり殴り付けた。咲夜は辛そうに呻いた。

【レミリア】

「咲夜！く！」

禁忌 「フォーオブアカインド」

レミリアは四人になり一人は咲夜を助けもう一人は龍神を抑えもう一人は咲夜がやつていた事と同じ事をしていて、残りの一人と咲夜を助けたレミリアはスペルカードを出した。

神槍「スピア・ザ・グングニル」

龍神の前と後ろを二人のレミリアが陣取り、スピア・ザ・グングニルを放つた。もう一人のレミリアに抑えられ、もう一人のレミリアに腹に腕を貫通されられている龍神は避ける事が出来なかつた。レミリアのスピア・ザ・グングニルは二人のレミリアと龍神を貫いた。

【龍神】

「ぐがあつ！ がつ。あ、ぐ。」

龍神は力無く倒れた。

【レミリア】

「はあ、はあ、はあ。ど、どうよ。私の残りの全魔力と靈力を注ぎ込んだ神具の味は。」

レミリアはかなり疲労をしている様で地面に膝を付け苦しそうに喋つていた。

【龍神】

「…………」

龍神は動かなかつた。龍神の腹に大きな穴が空いていた。

【レミリア】

「！　咲夜！　咲夜！　大丈夫なの！　私の声が聞こえる。」

咲夜は気を失っているのかピクリとも動かない。

【レミリア】

「く！　永琳！　咲夜を！　咲夜を！」

レミリアは辛く動かない体にムチを打ち、咲夜を抱きかかえ永琳の所に向かつた。

【永琳】

「・・・・！　これは。レミリア、今咲夜は危ない状態よ。」

【レミリア】

「え？　え？　ど、どう言う事よ！　咲夜は気絶しているだけなんじや無いの！？　ねえ！　永琳！」
レミリアは叫んでいた。子どもの様に、大事な姉を傷付けられた妹の様に。泣きながら、叫んでいた。

【レミリア】

「ねえ、何でもするから、フランも咲夜も皆、助けて。お願ひだから。」

【永琳】

「フランなら大丈夫。ルーミアもね。問題は咲夜の方よ。」

【レミリア】

「え？ 咲夜？」

【永琳】

「そうよ。咲夜は急激な体力と靈力の低下により衰弱している。しかも、今も尚靈力が漏れ出ている。このまま行けば彼女は急激な体力と靈力の変化に耐えられず、良くて廃人悪くて死人になるわ。」

【レミリア】

「!? どうにかならないの!?」

【永琳】

「・・・一つだけ、たつた一つだけなら、方法は無くもないわ。」

【レミリア】

「！ な、何をすればいいの！」

【永琳】

「・・・とても簡単よ。でも、とてつもなく難しいわ。」

【レミリア】

「？ どう意味？」

【永琳】

「先ずは咲夜の治療方法だけど、これは簡単。単に急激な体力と靈力の変化について

行つてないのなら靈力と体力を戻せばいい。」

【レミリア】

「なら！」

【永琳】

「言つたでしょ？ 簡単だけど難しいって。治療方法が分かつても、治療が出来ないのよ。」

【レミリア】

「だつたら私の靈力を！」

【永琳】

「それじゃ、駄目なのよ。」

【レミリア】

「どうして！」

【永琳】

「いい。どんなに強くとも人間なのよ。人間である限り私達が靈力をあげたとしても、拒絶反応を起こすわね。ましてや吸血鬼なんて論外よ。多分吸血鬼の靈力に耐えきれなくて吸収しきれずに逆に吸血鬼の靈力に殺されるわ。」

【レミリア】

「！ ならどうしろって言うのよ！」

【永琳】

「人間からなら何の問題はないわ。でも、かなり使わなければならないでしようね。きつと戦闘どころじゃないわ。だから言つたでしょ、簡単だけど難しいって。成すすべが無く項垂れていたレミリアと永琳だつたが、二人の後ろから声が聞こえてきた。」

【裕也】

「永琳。俺がやる。」

【永琳】

「裕也！ 貴方どうして。」

【裕也】

「バリアが外れたから來たんだ。兎も角急がなきやいけないんだろう？」

【永琳】

「でも。」

【裕也】

「大丈夫だ。どの位の時間があればいいんだ？」

【永琳】

「靈力を供給する使用者に比例するけど、約10～20分位よ。」

【裕也】

「なら大丈夫だ。」

裕也はそう言うとスペルカードを取り出し唱えた。

歴史「自己像幻視（ドツペルゲンガー）」

スペルカードからもう一人の裕也が現れた。

【永琳】

「これは？」

【裕也】

「ドツペルゲンガーって言うのは知ってるか？」

【永琳】

「ええ。でも、同じ顔つまり自分自身に合うと死ぬって聞いてるわ。」

【裕也】

「（ご）明察。このスペルカードは自らドツペルゲンガーを作り出すスペルカードなんだ。」

【永琳】

「待つてドツペルゲンガーは自分に会つたら死ぬって事なのよ！そんな事をしたら貴方が！」

【裕也】

「大丈夫だ。ドッペルゲンガーに会うと死ぬのはドッペルゲンガーが負の塊だからだと思うんだ。その負の塊が一気に戻るから不幸、つまり死ぬって俺は思ってる。だったら話は簡単だ。半分にして常に靈力を漏れ出していればいい。」

【永琳】

「どう言う意味？」

【裕也】

「つまり100パーセントを50／50に分ければいい。そうすると負の塊は完全にはならない。だから死ぬ事はない。」

【永琳】

「わかつたわ。貴方を信じる。」

【裕也】

「ああ、有難う。因みに、俺の分身は俺自身だ。スペルカードも靈力も力も全てがオリジナルと同じだ。ただし、可動時間は30分それ以上になると俺の体が壊れる。まあ、代償として靈力が下級妖怪まで落ちるがな。だが、仲間の助けになるから安いもんだ。だろ？」

裕也は差も当然な事の様に話した。

【永琳】

「分かつたわ。貴方の気持ち、使わせてもらうわ。」

【裕也】

「ああ、頼む。」

裕也は戦場に戻つて行つた。



【靈夢】

「どうだつた？」

【裕也】

「大丈夫だ。さて、龍神いつまで寝ているつもりだ？そろそろ終わりにしようぜ。」

裕也は倒れたままの龍神にそう言つたしかし、龍神は起きない。

【靈夢】

「倒したんじゃないの。」

靈夢はそう言い龍神に近づいた

。その時、龍神が少し動いた様な気がした裕也は靈夢に向かって注意を言つた。

【裕也】

「靈夢！氣を付けて！龍神が少し動いた！」

「靈夢はその言葉を聞いて直ぐに後ろに下がつた。

【靈夢】

「本当。」

【裕也】

「ああ。」

裕也はいつそう警戒をした。龍神はようやく動きを見せた。

【龍神】

「よく私をここまで本気にさせたな。とりあえず褒めてやる。だが、貴様らもここまでだ。」

龍神はそこまで言うと人間の姿からだんだん変わつて行き最終的には巨大な青い龍になつた。

【裕也】

「なに!? デカ過ぎる!」

【靈夢】

「うわ!? 霊力も跳ね上がつたわよ!」

【龍神】

「我は龍神。幻想郷の作り主とし、水を操る神である。人間よ、お前らはなぜ戦う?」

【裕也】

「なにいっている！貴様が異変を起こしたから俺たちが来たんだろうが！」

【龍神】

「何を言っている。我はただ雨を降らせたに過ぎない。人間と水は切つても切れぬ縁だ。それとも貴様は雨を降らすなど、言うのか？」

【裕也】

「違う！貴様はやり過ぎてるって言つているんだ！雨を降らすのはたまいでいい！毎日雨なんか降らせたら、山に囲まれている幻想郷は山の地盤がゆるくなり土砂災害を起こそ！そうしたら人里も妖怪の山もただではすまない！だから止めに来たんだ！」

【龍神】

「そうか。だが我は止めるつもりはない。」

【裕也】

「なぜ！」

【龍神】

「なぜ？我にそれを聞くか人間。まあ、よかろう。なぜ雨を止めないか、だつたな。話は簡単だ。この幻想郷を元の姿に戻す。」

【裕也】

「戻す？」

【龍神】

「本来幻想郷は世界には存在しない。」

「どう言う事だ！」

【龍神】

「元々幻想郷は我とある者達の為に作つた物だった。その為存在はしてはいけない。だから私は空間に作つた。異空間にな。それを紫は能力を切り離し自分の都合のいい様に作り変えた。今の幻想郷は居場所を無くした物や忘れ去られた者の楽園になつている様だが、最初は違つた。全てを飲み込む？全てを包み込む？当たり前だ。幻想郷の本来の役目は、忘れ去られた者や物を取り込み、我やある者を一生楽しませる為に作つたからな。しかし、紫でも幻想郷は変えられたが元は変えれないらしいな。だから時たま人や物が流れる。最近では紫に連れてこられた、幻想入りだつたか？その奴も増えて來た。しかも博麗の巫女がいるから出入り自由と來た物だ。だから、我は、幻想郷を壊し一から作りえる。」

【紫】

「たとえあなた様と言えど好きにはさせないわ。」

龍神が幻想郷を壊すと言つた瞬間に紫が現れた。

【龍神】

「・・・・なにしに来た、紫。」

【靈夢】

「紫!?あんたどうして!」

【裕也】

「やつぱり来てたか。紫。」

【靈夢】

「裕也!貴方気付いていたの!」

【裕也】

「ああ、スキマ、まあ、ここでは空間にしておくか。空間に隠れて見ると言う事はその部分だけ普段とは違う雰囲気になる。しかも上手く隠そうとすれば逆にその部分だけ不自然になる。だから分かるんだ。」

【靈夢】

「あ、あんたどんだけ強いのよ。」

【裕也】

「いや、これは案外誰でもできる。ただし多くの死戦をくぐり抜けなきや無理だけど

な。」

【靈夢】

「裕也。」

靈夢は心配そうに裕也を見た。

【裕也】

「話が脱線したな。紫、お前は、どつちの敵だ?」

【紫】

「あら? 酷いじやない。勿論貴方の味方よ。」

【裕也】

「今の所は、だろ? 紫、お前は本気では俺を信じてないな。」

【紫】

「どうして、そう思うのかしら?」

【裕也】

「阿久から幻想郷縁起を借りていいからな。とりあえず、間違いも含め書いてある事は頭の中に入っている。」

【紫】

「あそこに書いてあるのは歴代阿久が書き綴った本当にあつた事よ。」

【裕也】

「本当か。だが、世界は嘘で出来ている。自分がどんなに正しいと思っていたとしても、見方、別の証言、別の原動。それかが違うと全てが崩れ去る。特に情報操作には長けている妖怪が沢山いるからな。」

【紫】

「あらあら。私達の事は分かつて いますね。」

【裕也】

「ああ。逆にそれが本当の事を言つて いる事もな。」

【紫】

「え？」

【裕也】

「前に言つたろ？俺は一度仲間になつた奴はどんな事があろうが信じるつて、もし間違つていたならただしてやるつてな。だからお前が信じてなくとも、俺が信じる。だから、安心しろ。俺はお前を責めない。」

【紫】

「あ・・・ふふ。馬鹿な人ね。龍神様？いや、龍神。私は裕也側に付きますわ。」

【龍神】

「成る程、似てゐるな。あいつに。まあ、いい。さあ、死の始まりだ。」

【裕也】
「紫一・靈夢！いくぞ！」

【靈夢】

「ええ！」

【紫】

「さあ、行きましょうか。」

【龍神】

「ギュオオオオ!!!」

龍神は雄叫びとともに、水の塊を沢山作り出した。

【龍神】

「コオオオオ!!!ブウウウウ!!!」

その水の塊を一箇所に集め、解き放った。

【龍神】

「ウォーターブレス!!!」

それはまるで魔理沙のファイナルマスタースパークの水バージョンの感じであつた。

【裕也】

「！ 後ろには！くそ！」

暴風「雷雲」

裕也は台風を起こし、ウォーターブレスを防ごうとしたが、台風をブレスは突き抜けた。

【裕也】

「なに？ぐあ！」

威力はそれなりに弱まつたがそれでも強力なブレスが裕也に直撃した。裕也は何とか耐えたがかなりダメージを食らつた様だ。

【靈夢】

「裕也！あんたなんでよけないの！」

靈夢は裕也の所に生き、説教をした。

【裕也】

「げほ、だつて、避けたら、あいつらに当たつちまうだろうが。」

靈夢は裕也の後ろを見た。そこには、治療中の仲間達がいた。

【靈夢】

「！ でも！」

【紫】

「貴方はそこまでして。私も本気にならないといけないじゃないの。」

紫はそう言うと小さいスキマを龍神の身体中に展開してスペルカードを唱えた

境界線 「雨ト雷ノ輝ク光」

スキマから黒い雷と黒い雨が現れ龍神を攻撃して行つた。

【龍神】

「ギュゴオオオオ!!!!」

裕也はそれを観察した。そして裕也は気付いた。龍神の鱗が溶けている事に。その事により分かつた紫のスペルカードの技の正体が。

【裕也】

「強力な酸が混ざつた雨と雷か。」

【紫】

「はあ、はあ。そ、うよ。」

紫は何故か苦しそうに喋つた。

【裕也】

「！　どうした紫！」

【紫】

「この、技は、ね？かな、り、の靈、力を、つ、使う、のよ。その、た、めに、わ、たし

の、か、か、らだが、つい、て、いか、な、いのよ。」

紫は途切れ途切れだつたが確かに聞こえる声で話した。

【裕也】

「な！スペルカードの領域を超えているだろ！それにどうして！」

【紫】

「い、いつ、たで、しょ？ほ、ほ、ん、き、で、や、やら、な、いと、あ、あな、た、に、
しつ、れ、い、だ、つて。わ、わた、し、を、こ、こま、で、さ、せた、の、は、はあ、
はあ、あ、あな、た、がはじ、めて、よ。裕、也、わた、しの、幻、想を、あな、たに、
たく、す、わ。がん、ばつ、て。そ、そし、て、わた、しを、しん、じて、く、れ、て
、あ・・・。」

紫は最後の言葉を言う事無く気絶した。裕也は紫の体を抱きかかえ、永琳の元に行つた。

【裕也】

「永琳。紫を頼む。」

【永琳】

「ええ、分かつてるわ。それから、裕也。私達皆は貴方を信じてる。だから、貴方は心配しないで。貴方が帰つてきたら皆で勞つてあげるから。ね！皆。」

【皆】

「ああ！（うん！）」

裕也は自分に何か暖かい物が流れ込んできているのが分かつた。

【裕也】

「皆有難う。」

裕也はそれだけ言うと靈夢の元に戻つて行つた。



【フラン】

「お姉様。裕也お兄ちゃん大丈夫かな。」

フランは心配そうにレミリアに聞いてきた。レミリアはそんなフランの頭に手を置いてこう話した。

【レミリア】

「フラン、大丈夫よ。……ねえ、フラン？貴方の狂気を直した時の裕也はどうだつた。」

【フラン】

「どうしたの？急に。」

【レミリア】

「いいから。」

【フラン】

「えーとね。凄くかっこよかつた！」

【レミリア】

「だつたらそのかっこよかつた裕也が負けると思う？」

フランは首をブンブンと横にやつた。

【レミリア】

「だつたら大丈夫よ。」

【フラン】

「なんで？」

【レミリア】

「私が言える筋合いはないけど、信じるつて言うのはそう言う意味よ。」

【フラン】

「わかんないよ。」

レミリアはフランを抱きしめながら話した。

【レミリア】

「ふふ。私もわからないわよ。だから、一人で分かつていこ？ 一人だとわからないかも
しないけど、二人ならきっと分かる気がするの。だから、フラン。これからもよろし

くね。」

フランもレミリアを抱きしめた。そしてこうつぶやいた。

【フラン】

「うん。これからもよろしく、お姉様。」

その風景を見ていた残りの仲間達はこの異変の大しさ、思いを心に刻み混んでいた。



龍神はようやく紫のスペルカードから逃げる事が出来たが、体の鱗はボロボロになつていて鱗に隠してあるはずの体が見えていた。

【靈夢】

「裕也。」

【裕也】

「ああ、靈夢。力を貸してくれるな。」

【靈夢】

「勿論よ。貴方も貸してね。」

【裕也】

「分かつてる。」

【裕也 & 精霊】

「そう！あいつを倒せる力を！」

そこまで言つた、裕也と靈夢の姿が変わつた。靈夢は先代巫女と同じ格好になり、裕也は靈力が跳ね上がつた。

【龍神】

「ぐががが。よくもよくも！許せん。絶対に許せんぞ！人間ども!!!吹き荒れろ！水龍！全てを飲み込み！そして愚かな人間どもを！原初の姿に戻せ！」

【全テヲ飲み込ム大イナル源】！

龍神がそう言うといきなり空の天気が崩れ大嵐となりそこから七体の水龍と竜巻が生まれ裕也達を襲つた。

【靈夢】

「こんな物！全てを守る光の盾よ、我と我らの安全を確保せよ！」

博麗奥義 「博麗大結界」

七色の盾が現れ水龍と竜巻を裕也達から守り抜いた。その後盾が碎け散りその破片は龍神が作り出した水龍が生まれた場所に行き消滅させた。

【龍神】

「なに！」

【靈夢】

「はあ、はあ、つ、疲れが半端ない。」

【裕也】

「さつきのは？」

【霊夢】

「ああ、さつきのはね？ 博麗神社に伝わる七つの奥義の内の一つ。普段はスペルカードにして使っているんだけど、かなり威力が抑えられてるのよ。私もあんな強力な力は使えないし。でも、今の力なら使えるわ。でも、消費が激しくてね。後二回しか出来ないわ。」

【裕也】

「そうか。なら、あまり使わない様にな。」

【霊夢】

「ええ。分かつているわ。」

【龍神】

「くたばれ人間！ 生命の命は一つならず！ 生命の息吹は神の力！ 神の怒りは全てを飲み込み滅びの一歩をたどる！」

「吹キ荒レル竜ト龍ノ息吹」

龍神は禍々しく、そして黒く染まつた塊を口に溜めて一気に解き放った。

【裕也】

「靈夢！下がれ！お前の奥義は隙が多い！俺がやる！」

裕也は靈夢を掴み自分の後ろにやつた。

【裕也】

「こい！悲しみを超える！運命を打ち破る！友情の光！」

「柊色の明るい光」

裕也の体から光が現れ龍神の技を包み込んだ。すると光が消え龍神の技も消えた。

【龍神】

「く！貴様！」

【裕也】

「はあ。はあ。靈夢！今がチャンスだ！一気に畳み掛けるぞ！」

【靈夢】

「ええ！悪の者を浄化する怒りの鉄槌！」

【鉄槌の雷】

靈夢の手から雷が現れそれを龍神に当てた。しかし、龍神は当たる寸前に自分の痛んだ鱗を大量に使い盾を作り靈夢の攻撃を防いだ。

【靈夢】

「こ、これでも駄目なの。」

【裕也】

「いや！チャンスだ！」

血付「針棘の山」

針と棘で出来た山で龍神を攻撃した。流石にいきなりの事でよけれなかつた龍神は体で受け止めた。

【龍神】

「ギュオオオオ！」

龍神は苦痛の叫びをあげながら翼を振るわせた。すると、翼が鋼色になり銀色の風をおこしながら水を巻き込み靈夢を攻撃した。

【靈夢】

「な！・よけ！・うぐ！・がは！」

靈夢は何とか腕でガードをし攻撃を最小限に収めたが靈夢は腕が上がらない様であつた。

【裕也】

「靈夢!!・おい!!大丈夫か!!」

裕也は靈夢の元に近寄つた。近くで見ると靈夢の腕は爛れていた。

【裕也】

「靈夢！ いまスペルカードを！」

再誕 「浄化と再生」

靈夢の腕がだんだん治つてきた。が、まだまだ動かせる様な状態にはならなかつた。

【裕也】

「靈夢。もう下がつた方がいい。」

【靈夢】

「いや、まだ、やれるわ。」

靈夢は辛そうに言つた。

【裕也】

「いや、やめた方がいい。後は俺に任せてくれ。」

【靈夢】

「……分かつたわ。だつたら、私の靈力と究極奥義を教えるわね。」



【靈夢】

「これが、博麗に伝わる究極奥義よ。裕也、頑張りなさいよ。」

靈夢は下がつた。全てを裕也に託して。

「龍神。貴様だけは許さない。」

【龍神】

「だつたら何だ！ 我の体を傷つけおつて！ 貴様こそ万死に値する！」

【裕也】

「少し聞きたい。今の幻想郷はお前にはどう思う。本当に昔の方がいいのか。」

【龍神】

「・・・・何故聞く。」

【裕也】

「お前は俺の大切な仲間を傷付けた。だが、お前は大切な奴の為に作つたと言つた。そしてその為に幻想郷を作つたって。だが、お前の大切な者はもういない。それは幻想郷を作り変えても同じだ。それだつたら今の時代を楽しんだらどうだ。」

【龍神】

「それが正しいんだろうな。だがな、一度決めた物は変える事は出来ない。それをするには俺を殺すしかないな。」

【裕也】

「だつたら俺は今の幻想郷を守る為にお前を・・・・殺す。」

【龍神】

「だつたらやつて見ろ!!」

【裕也】

「ああ！やつてやるさ！靈夢！お前の力をいきなり使わせてもらう！はあああああ
!!!」

裕也の靈力と力が今より更に跳ね上がった。

【龍神】

「ゞおおおおおおおお!!!!」

龍神は全ての水を巻き込み一点に集中させていた。

【裕也】

「光は無！無は光！全てを包み込み全てを照らす多いなる剣！その剣は神をも殺す多い
なる力！」

「草薙ノ剣ト光ノ力」

裕也の手には光で出来た剣が現れた。

【裕也】

「行くぞオオオ！龍神！」

【龍神】

「そんなちつぽけの力なぞ！ ブオオオオ!!!!」

龍神は水のブレスを解き放つた。裕也は靈夢から教えてもらつた力と剣で水のブレスと草薙の剣がぶつかつた。

裕也

貴様ごとそんな技ぶつた切つてやる！」

龍神

「死ねええええ!!」

草薙の剣と水のブレスはどちらも引く事は無く、どちらも引かなかつた。

【裕也】

「レバーレバーレバ」

龍神

「（）おおおおおおおお!!!!」

裕也

卷之三

形勢はほぼ同じであつたが、徐々に裕也が押されてきた。

裕也

「くそ！押される！」

【龍神】

「死ねえ！」

龍神の技の威力が押し切り草薙の剣を裕也ごとブレスで攻撃した。

【裕也】

「ぐ?! ガアアアアア!!」

ズドン！と大きい音が鳴り響いた。裕也は力無くうなだれていたが、死んではいなかつた。

【龍神】

「ぜは、ぜは。ほう。我の全力の力でも殺せぬか。貴様はそこまでして守りたいのか。」

【裕也】

「あ・・・・・が。」

裕也はうなだれたまま動かない。龍神の質問にも答えられない様だ。

【龍神】

「ふん。さつさと倒れろ。楽になるぞ。」

龍神はそう言うと爪で裕也をおもつきりひつかいた。

【裕也】

「が・・・・・あ・・・・・あ。」

裕也から血が吹き出た。裕也は倒れそうになる体を何とか支えた。

【裕也】

「あ……う。」

【靈夢】

「裕也!!」

【永琳】

「靈夢!!」

永琳は裕也の元に行こうとした靈夢を止めた。

【靈夢】

「なに!! 永琳!! 止めないでよ!! 私は裕也を!!」

【永琳】

「落ち着きなさい！ 精霊！ 貴方は腕も使えない、靈力も使えない。そんな貴方が言つて何になるの！」

【靈夢】

「それでも行かなくてはならないのよ!! 戦えなくともあの馬鹿に喝をいれる事は出来るわ！」

【永琳】

「はあ。貴女はもつと無関係で暑くない性格さじや無かつたかしら？裕也にでも毒された？」

【靈夢】

「う！うるさいわね！た、ただ考え方が変わつただけよ。」

【永琳】

「分かつてるわ。」

【靈夢】

「分かつてくれた？」

【永琳】

「ええ。貴方が裕也の事を好いているつて事をね。」

【靈夢】

「うえ！ちちちち、違うわよ！わわわわ、私はただ！」

【永琳】

「ふふ。冗談だつたのに靈夢つたら。」

【靈夢】

「え？・・・は！はかつたわね！永琳！！」

【永琳】

「ふふ。まあいいじゃない。さあ、行つて来なさい。大切な者を守りに。」

【靈夢】

「永琳、貴女。ふ、ふん！お礼なんて言わないんだから。」

【永琳】

「待ちなさい。」

【靈夢】

「あによ。」

【永琳】

「これを裕也に渡しなさい。」

永琳は小さな小瓶を靈夢に投げた。

【靈夢】

「うわつと！ん？何よこれ？」

靈夢が永琳から受け止めた瓶に入つていたのは、水色の様になどここまで澄んでいる色であつた。

【永琳】

「ここにいる皆の靈力をつめこんだ気持ちの源よ。これを裕也に届けて頂戴。」

【靈夢】

「あんた、本当に人間やめてんわね。ああ、頭脳だから。」

【永琳】

「当たり前よ。私は月の天才、月の煩惱・八意永琳なのよ。」

【靈夢】

「自分で言う?まあいいけど。それから、言われる間でもないわ。」
靈夢は裕也の元に向かつた。



【龍神】

「そらそら!!」

【裕也】

「が、ぐ、があああ!!!」

【龍神】

「貴様の守りはそんな物か!」

【靈夢】

「裕也!」

靈符 「夢想封印 円」

丸い形の陰陽玉が現れそれが伸び円状のブーメランになり龍神の羽を切り落とした。

【龍神】

「グオオオオオオ!!!小娘！」

【裕也】

「ぐ、は。靈、夢。何で、ここ、に。」

【靈夢】

「あんたが情けないからでしようが!!私の力を貸しといて無様に負けたら巫女が廃れるわ!!」

【裕也】

「だが、靈夢。げほ!~ぼ!~ぐ、ウエエ!~ゲエエ!~」

裕也は血と血の塊を吐き出した。

【靈夢】

「裕也!?大丈夫なの!?!」

【裕也】

「ちよつと、まずい、な。」

裕也は死人な顔をしていた。

【靈夢】

「ちょ!~ちよつと!~大丈夫!~」

【裕也】

「ぐう。だ、大丈、夫、だ。」

裕也は今にも倒れそうだった。

【靈夢】

「たく。はいこれ。」

靈夢は永琳から貰つた気持ちの源を裕也に渡した。

【裕也】

「こ、れは？」

【靈夢】

「皆の力を一つにした物よ。これを貴方に託すわ。」

【裕也】

「ふ、こんな、た、たい。ぐーうつーく！」

裕也は既にボロボロで生きているのが不思議な位な感じだった。

【靈夢】

「ほら、意地を張らないの。」

【裕也】

「あ、あり、がと、う。」

裕也は靈夢から貰つた気持ちの源を使った。

【裕也】

「く、オオオオオオオオ!!!」

裕也の体の傷が治つて行つた。

だが、それだけではない。髪の色が紫になり胸が生え、服装が先代巫女の服に変わつた。

【靈夢】

「裕也!?

【靈夢】

「靈夢、皆、有難う。この勝負。絶対に勝つ!だから、下がつてろ。」

【靈夢】

「分かつたわ。頼むわよ。」

靈夢は下がつた。

【裕也】

「龍神。さつき言つたよな?貴様はそこまでして守りたいのかつて。」

【龍神】

「ああ。言つた。」

【裕也】

「今答えてやる。ここは俺を受け入れてくれた。罪を犯した俺をな。」

【龍神】

「当たり前だ。この幻想郷は強い奴、面白い奴、精神が強い奴が集まる様に作ったからな。」

【裕也】

「ああ、そうだな。阿久のを見れば誰でも分かる。だが、俺が一番大切な物は靈夢達と仲間だ。俺はそいつらを守る為なら。・・・・・幻想郷を、壊す。」

【龍神】

「壊したら仲間を守つても意味はないぞ。」

【裕也】

「それだつたら俺が神になつてこの幻想郷を作り変える！」

【龍神】

「ふ、は、ははははは！貴様が神になると！舐めるのも大概にしろよ！小僧！！」

龍神は鱗を奮い立たせた。

【裕也】

「ふざけてはいない！俺は仲間の為なら神にでも何にでもなつてやる!!」

【龍神】

「だつたらどうやつてなるつもりだ！」

【裕也】

「お前の力を借りたい！」

【龍神】

「貴様、本氣か？」

【裕也】

「ああ。」

【龍神】

「我らはさつきまで殺し合いをしていた所だ。何故いきなり。」

【裕也】

「俺は仲間が傷付けられたから戦つた。だが、お前と話して、お前にも大切な仲間がいて会えないがせめて形だけでも戻したいんだよな。なあ、だつたら俺の友達にならないか？」

【龍神】

「何を。！」

「だつたら僕が友達になつてあげるよ！」

【龍神】

「葵。」

【裕也】

「え？ 今。何て言つた。」

【龍神】

「……よかろう。我を倒したら力を貴様にやろう。我的能力、新たな世界を創造する能力を。だが、我的力に人間が耐えれると思つてゐるのか？」

【裕也】

「今なら大丈夫だ。皆の気持ちの形だからな。どんな事でも受け止められる。」

【龍神】

「だつたら本氣でこい。俺も殺す氣で行く。」

【裕也】

「今ならやれる。はああああアアアアアアアア!!!!」

裕也の靈力が体中にコーティングされた。

【龍神】

「！ 貴様！ その靈力は！ 琴光喜に似てゐるだと!?」

【裕也】

「行くぞ！」

「三転雪華」（さんてんせつか）

裕也はそう言うと手が雪を纏つた感じになり、素早く動きながら龍神に近づき、龍神の体に三発当てた。裕也が当てる場所が凍っていた。

【龍神】

「ギュオオオオオオ!!!」

【裕也】

「まだ行くぜ！」

「公転前輪」（こうてんぜんりん）

裕也は龍神の頭にかかと落としを食らわせそれからパンチとキックに繋げていた。

【裕也】

「まだまだああ!!」

「真撃波」

裕也は連打を辞めずに拳に力を蓄えていた。龍神は逃げようとするが竜の体はデカ過ぎて避けられなかつた。

【龍神】

「グオオオオオオオオ!!!」

【裕也】

「どうだ！」

龍神は少しひるんだが余り聞いてはいない様だつた。

【龍神】

「今度は我から行く！」

【大いなる天罰】

龍神は体を震わせた。すると裕也の周りに竜巻が出来始め、雷が降つて來た。

【裕也】

「やつ！ はつ！ ふつ！ く！ うおお

!! ぐああ！」

裕也は何とか避けていたが、避け切れずくらつてしまつた。

【裕也】

「くう。」

【龍神】

「ふん。その程度か。」

【裕也】

「まだだ！」

「岩石壊し」

【裕也】

「どっせい！」

裕也は龍神にパンチをくらわせた。すると、龍神の鱗が吹き飛び龍神に直接攻撃をした。

【龍神】

「ギュオオオオオオ!!」

【裕也】

「勇儀！お前の技を使わせてもらう!!」

【真・三歩必殺】

【裕也】

「づえあ！」

裕也は一步目に龍神に蹴りをくらわせた。

【裕也】

「はああ！」

二歩目で脳天。

【裕也】

「これで最後だあああああ！」

そして三歩目で、龍神の体を貫いた。

【龍神】

「グオオオオオオ!!!!」

龍神は悲痛な叫び声を上げた。だが、龍神はまだ倒れなかつた。

【龍神】

「グ、オ、オ。我の、負けか。」

【裕也】

「龍神。」

裕也は殺氣をおさめた。すると、裕也の姿が元に戻つた。

【龍神】

「我が負けるなんてな。」

【裕也】

「さあ、約束だ。」

【龍神】

「ああ。だがな。我的力がお前の体にかなりの負担をかけるだろう。下手すると死ぬかもしれない。それでもいいのか？」

【裕也】

「ああ。構わない。」

【龍神】

「よかろう。貴様に幻想郷を託そう。」

龍神の体が崩れ落ち、龍神の体から透明な玉が現れて、裕也の中に入つて行つた。すると、裕也の体に異変が起こつた。

【裕也】

「ぐ！ガアアアアアアアア！！！」

裕也がいきなり苦しみだしたのだ。

【靈夢】

「裕也！？紫！裕也はどうしたの！」

【紫】

「なんで私に聞くのかしら？別にいいけど。多分あれは、神の力が人間の体に耐えきれてないのよ。反発し合つてから体が拒絶反応をおこし、それで苦しんでいるんだと思うわ。」

【靈夢】

「何とかならないの！」

【紫】

「これは彼の問題よ。彼自身で何とかするしかないわ。」

【靈夢】

「裕也。」

【裕也】

「ぐう。ウガアアアアアアア！！まけ、ない。ぐうう！み、皆が、見て、いるんだ。ま、負けて！たまるかあああああ!!!」

裕也は気合で神の靈力を押さえ込んだ。すると髪の色が銀と水色になつた。

【裕也】

「ふう。何か余り変わった氣はしないんだがな。まあ、いいか。靈夢！勝つたぞ。」

裕也は笑顔でそう言つた。

【靈夢】

「ええ。おめでとう。」

【裕也】

「ありがとう。」

二人は握手をした。

【紫】

「ふふ。さて、皆さん？これから宴会と行きたいのだけど、皆ボロボロだから、宴会は一週間後にしたいのだけど、誰か意見のある人、妖怪はいるかしら？」
誰も意義をとなえなかつた。

【紫】

「それじやあ皆、解散よ。それから靈夢。裕也くんは私が連れて行くわ。貴女は怪我を治す事だけを考えなさい。」

紫は靈夢が言いたい事が分かつていていたのかの様に話した。

【靈夢】

「む。分かつたわよ。」

【紫】

「裕也君もそれでいい？」

【裕也】

「ああ、俺も紫に相談したい事があるからな。それじやあ！皆！一週間後に！」

裕也はそう言うと紫とともに消えて行つた。

こうして幻想郷を襲つた最も最悪な龍脈異変は終わりを告げた。

ありがとう・後編

一週間後 幻想郷・人里

今日はここで宴会が行われる。妖怪、人間、鬼、妖精、全員入り交じりての大宴会が行われる。今まで無かつた試みだ。だが、人里は変わつて来ている。人々はまだ妖怪を恐れているが、それじやあ行けない。だから、靈夢に人々は頼み込み決定した。今は宴会に向けての準備中だ。

A 「いやー。まさか俺たちが妖怪と一緒に宴会を開くなんてな。」

B 「ああ、全くだ。だが、楽しみだよな。」

「ああ、楽しみだ。」

男達は話しながら準備をしていた。



その頃裕也は幻想郷を回っていた。裕也は暫くマヨヒガと言う場所で療養していた。一週間ずっと紫の家でゆっくりしていた裕也だったが、まだ行つてない所に行きたいと、裕也が言つて行く事になつた。因みに宴会には間に合う様にと、言われている。

【裕也】

「さて、如何しようか。んー。あ！そうだ！太陽の畑に行つてみよう。まだ行つていなかつたからな。」

裕也はどんな所か想像しながら向かつた。普通の人なら誰もが近寄らない場所に。

【裕也】

「うおお。綺麗な場所だな。」

裕也は太陽の畑についた。そこに見えたのは、一面見渡す限り沢山の向日葵（ひまわり）がそこに合つた。裕也は少し歩いて見た。暫く歩いていると、一人の女性と出会つた。その女性は、髪が緑、服は上は白、下は赤のワンピースを着ていて傘をしていた。

【裕也】

「ん？ こここの管理者かな？ すいません。」

【幽香】

「あら？ 貴方、外来人かしら？」

【裕也】

「よく分かつたな。」

【幽香】

「ま、初めてじゃないものの。」

【裕也】

「そうなの？」

【幽香】

「ええ。」

【裕也】

「あ、そうだ！ 幽香さん。この畠少し見てもいいですか？ あ、って言つてももう見ているけど。」

【幽香】

「……何でかしら？」

【裕也】

「いや、綺麗だなつて。まあ、駄目なら去りますけど。」

裕也がそう言つた瞬間大きい風が吹き荒れ向日葵が右に左に揺れた。まるで離れたくないと言つてゐる見たいだつた。

【幽香】

「！ 珍しい。花達が喜んでいる。……ねえ、貴方、ここに住んで見ない？」

【裕也】

「え？」

【幽香】

「ふふ。貴方がいると花達が喜んでいるのよ。だから、どう?」

【裕也】

「気持ちちは嬉しいけど、遠慮しておくよ。まだまだ見たい場所があるからな。」

【幽香】

「あら? そう? だつたら、無理矢理になるわよ?」

幽香は少し笑ながら話した。

【幽香】

「まあ、私の方はそつちの方が楽しいから別にいいけど。」

幽香は笑みを隠そうとせず本当に楽しそうに、嬉しそうに笑つた。

【裕也】

「な、何でそうなるんだよ!」

【幽香】

「いいじやない。貴方も花は好きなんでしょう?」

【裕也】

「確かにそうだけど。俺は自分の道は自分で決める。それが俺の決めた道だ。」

【幽香】

「あらかつこいいじやない。でもね・・・ふつ！」

幽香は距離を一気に詰め、裕也に重い拳を食らわせた。

【裕也】

「！ ぐつ！ ぐうう。い、いきなり何するんだ！」

裕也はギリギリの所で幽香の拳を右腕で耐えた。しかし、幽香の拳を抑えた事により右腕が動かせなくなつた。

【幽香】

「あら、よく防いだわね。人間にしては中々ね。」

【裕也】

「ぐう。今は戦えないって言うのに。」

裕也は紫に言われた事を思い出していた。



一週間後・朝 食事時

【紫】

「ええ？ 戦うな？ どう言う意味なんだ？ 紫。」

【裕也】

「ええ。貴方は龍神と一体となつて神となつたわ。でも、まだ馴染んでいないのよ。」

【裕也】

「馴染んでない?」

【紫】

「そうよ。本来の神は人々の信教とそこに神はいると言う思いで誕生するわ。でも貴方は本来の神とは別の方法で神になつたわ。その為に貴方はまだ人間なのよ。」

【裕也】

「つまり、どういう意味だ?」

【紫】

「つまりは神になる途中つて意味よ。しかもその為に貴方の力は殆ど封印されているのよ。」

【裕也】

「封印? どういう意味だ。」

【紫】

「多分神の力を抑える為に殆どの力がそつち側に行つてているみたいなのよ。」

【裕也】

「成る程。だつたら今はどれ位何だ?」

【紫】

「そうね。今の貴方の力は下級妖怪を何とか倒せる程度ね。」

【裕也】

「な!? そんなに減っているのか!?」

【紫】

「でも、貴方は人間離れしていたからちょうどいいじゃない。」

【裕也】

「まあ、そうだな。あ、紫。俺が今まで使つて来たスペルカードはどうなんだ?」

【紫】

「駄目ね。全て使えないわ。圧倒的に靈力と力不足だもの。だから全て使えないわ。」

【裕也】

「そうか。」

裕也は流石にがっかりした。

【紫】

「いや、悪い事だけじゃないわよ?」

【裕也】

「? どういう意味だ?」

【紫】

「貴方の能力も変化しているわ。」

【裕也】

「変化?」

【紫】

「そうよ。前の能力は。

色々な声が聞ける程度の能力

仲間の力を借りる程度の能力

自分の妄想を現実にする程度の能力だつたじやない。それが変わっているつて意味
よ。」

【裕也】

「じゃあなになつているの?」

【紫】

「ええ。自分の妄想を現実にする程度の能力が消えて、新しく入つたのは、新たな世界を
創造する能力と水を操る能力に水の中で息が出来る能力よ。」

【裕也】

「3つもか!? それに程度がついていないぞ。」

【紫】



「多分龍神の力ね。セーフティがついてないけど、まあ、貴方なら大丈夫でしょう。」

【裕也】

「ふう。きつつ。」

【幽香】

「その程度かしら?」

裕也は何とかギリギリ幽香の攻撃を避けていた。

【裕也】

「はあ、はあ。」

【幽香】

「あら、もう終わり? 所詮人間ね。弱い癖に仲間と群れをなして守つて貰つて、本当の強者は一人で全てをしなくちや行けないのにね? 人間。」

【裕也】

「確かに、そうかもしねれないな。」

【幽香】

「あら貴方は物分りがいいじゃない。」

【裕也】

「でも、それだけじゃ、本当の強者には慣れない！」

幽香は少し眉をしかめた。

【幽香】

「どういう意味かしら？」

【裕也】

「本当の強者は一人じや絶対なれない！何故なら仲間がいないうからだ！仲間は相談に乗ってくれるし、一緒に考えたり戦つてくれたりする。そして絆は何処にいても仲間に力を与えてくれるんだ！」

【幽香】

「なら、貴方はあるつて言うのかしら？」

【裕也】

「ある！」

【幽香】

「なら見せて見なさい！仲間の力とやらおね！」

幽香は一気に距離を詰め右フック左フックとテンポよく食らわせた。

【裕也】

「ぐつ！がはつ！」

裕也は吹き飛ばされた。

【幽香】

「口だけは達者ね！これで終わりよ！」

花符 「幻想郷の開花」

幽香の近くに合つた草花が沢山ツルの様になつて裕也を攻撃した。

【裕也】

「なーくつ！早速使う羽目になるとは！」

裕也はそう言うと一枚のカードを取り出した。紫から貰つたものだ。



【紫】

「あ、そうだ！はいこれ。」

紫は30枚のカードを渡した。

【裕也】

「？ これは？」

【紫】

「これはね。ドッペルカードって言つてね？紺を築いた仲間の力頭に思うだけで一度だけ使えるのよ。」

【裕也】

「それは凄い。紫、それは誰でも使えるの？」

【紫】

「一応誰でも使えるわ。ただし、誰かとの絆が必要になるけどね。それ以外の者が使うと自分の靈力を無理矢理消費して使う事になるわ。」

【裕也】

「それは怖いな。」

【紫】

「ついでに言うと、絆が強ければ強い程力が上がるわ。使用者の靈力を消費しないでね。それから、それはあくまでも試作品よ。その為30枚しかないわ。」

【裕也】

「試作品？」

【紫】

「そうよ。それは試作品。だから靈力なしで出来るんだけどね。完成版はそれだけじゃなくて使用者の靈力や体力をも回復させるのよ。」

【裕也】

「なんだよそりや、チート過ぎるだろ。」

【紫】

「その為、私が認めた者にしか話さないし、渡さないわ。因みに靈夢も知らない筈よ。」

【裕也】

「じゃあ何で俺だけに?」

【紫】

「貴方を見ていて思つたのよ。ああ、この人なら大丈夫つてね。」

【裕也】

「紫、ありがとう。大切に使わせて貰うよ。」



【裕也】

「紫から貰つたのがこんなに早く使う事になるとはな!行くぜ!」

恋符 「マスタースパーク」

裕也が魔理沙を思い描きながらカードを使つた。すると、カードが八卦炉に変わり巨
大なレーダーを放つた。それにより、草花が全て薙ぎ払われた。そのまま威力が落ちる
事もなく幽香に向かつて行つた。

【幽香】

「あら、魔理沙が私から取つた技じやない。懐かしいわね。本場の力はこうよ!」

「マスタースパーク」

幽香は持っていた傘を裕也に突き出して、両腕で支えながら放った。幽香から放たれたのは魔理沙のマスタースパークとは比べ物にならない程の力だつた。当然に防げるわけなく裕也が放つたマスタースパークを打ち消し幽香のマスタースパークは力が衰える事なく裕也に向かつて行つた。

【裕也】

「くっ！やべえ！くそ！どうする！ん？待てよ、もしかしたら！いや！かけるぜ！」

裕也はカードを一枚出した。

【幽香】

「あらあら！如何するつもりかしら！また手品でも見せてくれるの！」

幽香は楽しそうに話した。まるで全てがどうでもいいみたいに。

【裕也】

「上手く行つてくれよ！」

裕也はカードを二枚取り出した。

星符「ドラゴンメテオ」

×

魔砲「ファイナルマスタースパーク」

そう言うと二枚のカードが一つになつた。裕也はそのカードを握り強くこう唱えた。

【裕也】

「合成符！」

星砲 「ファイナルドラゴンマスタースパーク」

カードが巨大な八卦炉となりそこから隕石の流星が放たれた。

【幽香】

「何ですって!? 私の技が押されている! くつ! 犄めるな!!」

「ダブルスパーク」

幽香は右腕で打ちながら左腕でもう一つ打つていた。しかし、裕也の技が強く簡単に押し戻された。

【幽香】

「な、何ですって!? きやあああああ！」

幽香は裕也の技をくらい吹つ飛んだ。

【裕也】

「ぐう。が、合体技は、自身、の靈力を、使う、んだな。」

裕也は前に倒れこんだ。

【幽香】

「ぐつ、うう。い、今のは、やばかつた、わね。下手、したら死んでいたわよ。」

幽香はその場に大の字になつていた。どうやら起きれない見たいだ。

【幽香】

「でも。ふふ。本当に面白い人間ね。」

幽香はこの人と色々したら楽しそうだなつて思った。

夜 ★

【裕也】

「う、ん? ここ、は?」

【幽香】

「気が付いた? 人間。」

【裕也】

「あ、ああ。ありがとう。えつと?」

幽香は裕也に膝枕をしていた。

【幽香】

「幽香、風見幽香よ。貴方は?」

【裕也】

「桐上裕也だ。」

【幽香】

「よろしく。」

【裕也】

「ああ、よろしく。て！今何時だ！ぐつ！う、いてて。」

裕也は何かを思い出したかのようすに素早く立つたが、痛みが押してきて直ぐに倒れた。

【幽香】

「きや！ 一体どうしたのよ。まだ動いちや駄目よ。貴方はあと数時間は動けない筈なんだから。」

【裕也】

「そうなのか!?」

【幽香】

「多分最後に使ったスペルカードが原因ね。なぜだか知らないけど、自分の質量以上の力を出した事による反動ね。」

【裕也】

「ぐうう。それでも！ 行かなくちや行けないんだ！」

裕也は支えている幽香の手を振りほどき、よたよた歩いた。

【幽香】

「そこまでして行きたい場所つて何かしら？裕也はどうしてそこまでして行きたいのかしら？」

【裕也】

「決まってる。皆が、仲間が待っているからだ！」

【幽香】

「ふふ。純粋ね、純粋で素直。私、そう言う人間は好きよ。さあ、私の肩を貸してあげるわ。何処に行けばいいかしら？」

【裕也】

「いいのか？」

【幽香】

「私に勝つたご褒美よ。」

【裕也】

「勝った？何言つてるんだ？あれは俺の負けだろ？」

【幽香】

「いいえ。」

幽香は「ようしょ」と言つて裕也の腕を自分の肩に回した。

【幽香】

「あら？・案外軽いのね。それで話の続きだけど、貴方が最後のスペルを使つた時私は貴方より先に地面についたのよ。ほんの少し先にね。貴方は覚えていないようだけど。」

【裕也】

「そうなのか？」

【幽香】

「そうなのよ。」

【裕也】

「そうか。なら、約束の方だな！」

【幽香】

「うつ！・貴方変などこで覚えてているわね。まあ、仕方がない。それで？・この風見幽香にどんな事を願うのかしら？」

【裕也】

「そんなの決まつていいさ！・願いは二つ！・あ！・なしは無しだからな。願いについては何も支持がなかつたからな。」

【幽香】

「ちやつかりしている事。いいわよ。それで何かしら?」

【裕也】

「先ず一つ目は人々、妖怪との交流。幽香は何でか知らないけど向日葵の世話で自分が殻に籠つているのを誤魔化している見たいだから、人里や妖怪達との交流を持つ事!まあ、これは無理しなくていい。自分のペースでやつて行けばいい。無理だつたら俺が手伝つてやる。」

【幽香】

「その言い方。まるで私の事が分かつてゐるみたいな言い方ね。」

【裕也】

「まあ、俺の能力に色々な声を聞く程度の能力があるからな。」

【幽香】

「あら?人の心を覗いたの?酷いわね。もしかして今も?」

【裕也】

「いや、条件がある。一つ目は戦つてゐる時。つまりは感情が高まつてゐる時だな。二つ目は者や物に何処でもいいから手をおいて強く念じる事だな。だから普段は聞こえない。」

【幽香】

「ふーん。まあ、いいわ。それで? もう一つは?」

【裕也】

「こつちが本題だ。もう一つのお願いは、俺と友達になってくれ、だ。」
幽香は畳然とした顔をしていた。

【幽香】

「あ、ふふ。いいわよ、負けた身だからね。」

【裕也】

「それじゃあ。」

裕也は手を出してきた。

【裕也】

「よろしくな。」

【幽香】

「こちらこそ。」

幽香は手を握り返した。

【裕也】

「じゃあ、行こうか。幽香。あ! それから宴会には幽香も参加する事!」

【幽香】

「ふふ、分かってるわ。裕也。」

二人は人里に向かつた。宴会と仲間達が待つ人里に。



人里・宴会会場

【魔理沙】

「うわ！沢山いるな。靈夢達は何処だ？」

魔理沙は靈夢を探していた。今回の^ル人里での宴会の開催は裕也と靈夢と紫が一枚絡んで^ルいる様だ。

【魔理沙】

「しつかし、妖怪も人間も入り混じっているな。昔じゃ考えられない光景だぜ。しかし、皆楽しそうだな。」

妖怪も人間も種族が違う筈なのに皆が皆楽し^ルそうにしていた。喧嘩やなどなくまるで元からがそうであつたがの様に。

【魔理沙】

「お？靈夢！ようやく見つけたぜ。」

【靈夢】

「あら？魔理沙、遅かつたわね。もう始めてるわよ？」

【魔理沙】

「おう！この人だろ？随分見つけるのにかかつちまつたんだぜ。」

【靈夢】

「そうだ！ねえ魔理沙、裕也見なかつた？」

【魔理沙】

「ん？ 裕也か？見てないぞ？」

【靈夢】

「おつかしいわね。紫、見てるんでしょ。裕也はきていないみたいだけど、どういう意味かしら？」

靈夢は魔理沙の斜め上を見た。するとそこがパカつと開き紫が現れた。

【紫】

「あら来てないの？」

【靈夢】

「なに行つているのよ、あんたが連れて行つたんじゃない。」

【紫】

「確かにそうだけど、途中で別れたのよ。だから知らないわ。ここに来てんじゃないの？」

？

【靈夢】

「そうかしら?」

【魔理沙】

「きつとそだぜ!それより楽しもうぜ!この大宴会を。」

【靈夢】

「そうね!楽しまなくちゃ損よね!」

靈夢と魔理沙は二人で回る事にした。その様子を紫は、母親が娘を見守る様な目で見ていた。

【紫】

「ふう。何してゐのかしらね、裕也君。」



人里・門前

【裕也】

「ようやく着いたな。」

【幽香】

「ええ、そうね。まあ、貴方のせいで沢山の妖怪と戦う羽目になつてしまつたけどね。」

【裕也】

「む！それは俺のせいじゃないぞ。」

裕也達はここに来る途中妖怪に襲われた。何故なら人間を担いでる＝弱いと妖怪達に思われたらしく、沢山の妖怪に襲われた。

【幽香】

「全く。無駄な時間を取つたわ。さあ、中に入りましょうか。」

【裕也】

「ああ。」

裕也達は人里の中に入つた。

【裕也】

「うお！すげえ！」

中で見た物はお祭りの様に踊り騒ぐ妖怪と人間だった。しかも、仲良くなつてゐる者もいた。

【幽香】

「凄いわね。」

【裕也】

「ああ。それに、皆楽しそうだ。」

皆喧嘩をする事なく楽しんでいた。まるで元からそうであつたかの様に。

【裕也】

「幽香、もう大丈夫だ。」

今まで肩を借りていたがようやく歩けるまでには回復した様だ。幽香はゆっくり外した。

【幽香】

「これからどうするの？」

【裕也】

「靈夢達を探そうと思う。幽香は？」

【幽香】

「私？私は周りを見ているわよ。色々楽しそうだしね。」

幽香はそう言うと人混みの中に入つて行つた。

【裕也】

「さて、俺も行くか。」

裕也はそう言い探しに行こうとするが、村人の一人が裕也を見つけて騒ぎ出した。

C 「あー！裕也様だ！」

村人の一人がそう叫ぶと村人が集まつて來た。

D 「おお！ 本當だ！ 裕也様だ！」

E 「裕也様一握手して！」

F 「おお、ありがたやありがたや。」

【裕也】

「ちょ！ ちょつと待つてくれ！ 一体どういう意味何だ？」

裕也がそう聞くと村人の一人が答えた。

D 「裕也様はこの里のしがらみを取つてくれた。妖怪も話して見るといい妖怪ばかりだ。それを気付かせてくれた裕也様は、俺らに取つては神様見たいな者だ！」

【裕也】

「そうか。でも悪いな！ 人探しはあるものでな！」

裕也はそう言つて飛び立つた。



【裕也】

「ふう。ようやく巻けたかな？ それにしても全然見つからない。ん？ あれは。」

裕也は一人の子供を見つけた。その子供は一人でいる見たいだつた。

【裕也】

「ちょっと言つて見るか。」

裕也は少し心配になつて子供の所に行つた。

【裕也】

「どうしたの？」

「誰だよ、あんた。あんたには関係ないよ。」

近くで見たら少年だった。

【裕也】

「ああ、先ずは自己紹介だよな。俺は裕也。お前は？」

「いいだろ。別に。」

【裕也】

「いや、きちんと名前を聞かないと、お前つて呼ぶしか無いからな。だから、教えて。」

【幸】

「・・・幸。棚橋幸（たなばし こう）。」

【裕也】

「そうか、幸か。なら幸、幸は何でこんな所にいるんだ？」

【幸】

「妖怪が嫌いだからだよ。」

【裕也】

「何で嫌いなんだ？」

【幸】

「何でお前にそこまで言わなきやならないんだよ。」

【裕也】

「何か手伝える事があるかも知れないからな。」

【幸】

「そう。だつたら。殺されたお母さんやお父さん。妹達の仇を取つてよ。」

【裕也】

「！ お前。」

【幸】

「皆どうかしてるんだ！ 何で妖怪なんかと仲良く出来る！ そりやあ殺されてない奴はいいよな！ 妖怪を受け入れられて！ でもな、妖怪に殺された俺はどうしたらいいんだよ！ 誰か教えろよ！ なあ！」

幸は叫んだ思いをぶちまけた。しかしその声は宴会で騒ぐ者達に遮られた。ただ一人を除いては。

【裕也】

「だつたら教えてやる。」

【幸】

「え？」

裕也出あつた。裕也はさも当然の様に話して來た。

【裕也】

「認める。」

【幸】

「認める？」

【裕也】

「そうだ。お前は憎しみに囚われている。だが、それを隠している。怒る事によつてな。だから先ずは、認める。自分が誤魔化して來た事實に。そして、憎しみに囚われるな。」

【幸】

「……どうしろつて言うんだよ。」

【裕也】

「先ず両親を殺した妖怪を許せ。次に仲間、友達を作れ。最初は難しいが諦めなければ必ず出来る。」

【幸】

「何でそんな事が言えるんだよ。」

【裕也】

「俺がそりだつたからだ。俺は昔に友達も仲間も全てなくした。だけど諦めなかつたから、この場所で友達が出来たんだ。だから、幸もきつと大丈夫だ。さあ、勇気を出して。ちょうどあそこにいるよ。」

幸は裕也が指差した場所を見た。そこには妖怪と人間の子供が遊んでいた所だつた。

【幸】

「お、お前さつきと言つてゐる事違うぞ！さつきはゆつくりでいひつて言つたじや無いか！」

【裕也】

「ん？ そりだつたか？ まあ、いいじやないか。さあ。」

【幸】

「わわ！ お、押すなよ！ おい！ 裕也！」

裕也は幸の背中を押した。

【裕也】

「ねえ、君達少しいいかな？」

「ん？ 何だよおつさん。」

「俺達に何か様だよ。」

【裕也】

「おじ。はあ。まだ二十歳前なんだけどな。まあ、俺の事はどうでもいい。なあ、こいつと友達になつてくれないか?」

裕也は幸を押し出した。

【裕也】

「さあ、幸。」

幸は仏頂面だつた。

「おい、どうする。」

「そーだな。大将どうする?」

子供二人をかき分けて出で來たのは大きな体をしていた。子供にしてはやけにでかい奴が出来た。

「どうした。」

「いや、あの兄ちゃんがこのガキを仲間にいれてやつてくれつて。」

「おい。」

「へ。」

大きな体をした人は子供の一人の頭を叩いた。

「いて! 何すんだよ! 大将!」

「何抜かしてやがる! てめえもガキだろうが! 済まねえな。兄ちゃん。」

【裕也】

「いや。お前はまともだな。」

「ああ。一応こいつらの保護者見たいな者だからな。しつかりしなくちや行けないんだ。」

【裕也】

「お前、名前は?」

【沙汰】

「高天原沙汰（たかまの　さた）だ。」

【裕也】

「俺の名前は。」

【沙汰】

「知ってるよ。桐上裕也だろ? この街を一つにした人間。人里の連中は、世界の革命者つてな。」

【裕也】

「なんじやそりや? 俺はただの人間だ。（今の所はな。）仲間の助けをえなきや何も出来ない弱虫だぞ? しかも、俺はただの足でまといなだけだ。だから、がんばって強くなろうとしているんだ。」

【沙汰】

「ふーん。成る程確かに本当にそう見たいだな。」

【裕也】

「え？」

「聞いて驚け！大将は能力使いなんだぞ。能力は、力を底上げする程度の能力だ！どうだ！驚いただろう。」

【沙汰】

「馬鹿野郎！むやみに言いふらすな！」

【裕也】

「珍しいな！能力持ちだ何て。でも力を底上げつて具体的に言うとどう言う能力何だ

？」

【沙汰】

「まあ、話していいか。底上げって言うのは今の自分の力以上の力をノーメリットで上げる事が出来る能力だ。」

【裕也】

「凄いな！なあ、幸の事を見てくれないか？」

裕也はずっと後ろにいた幸を沙汰の前に出した。

【沙汰】

「ふむ。分かつた任せてくれ。」

沙汰はあつさりOKをした。

【裕也】

「おー！よかつたじやないか！それじやあ、お別れだ。幸。」

【幸】

「その、色々ありがとう。」

【裕也】

「ああ。またな。」

裕也は靈夢達を探す続きをする為に別れた。

【沙汰】

「さあ、行こうか。仲間が待ってる。」

沙汰達は去つて行つた。幸は一抹の不安を感じたが、着いて行く事にした。



【裕也】

「さて、見つからない。はあ。早く宴会を楽しみたい。仕方ない。靈夢達は宴会を楽しみながら見つけるか。」

裕也はそう言つて降りた。

【裕也】

「さて、先ずはどうするかなつて何だあれ？」

裕也が見たのはピエロのショードだった。

【裕也】

「おお！ 淫い！」

玉乗りやお手玉、色々な芸をやつていた。裕也は一通り見て次に行く事にした。

【裕也】

「お？ あそこにいるのは鴉？ か。」

裕也は黒い羽を折りたたんでいた少女が気になり近付いた。

【裕也】

「あの、貴女は？」

【文】

「あややや！ 貴方は裕也さんじやありませんか！ 噂は聞いていますよ。」

【裕也】

「え？ 噂？」

【文】

「ええ。この人里に革命を起こした者として。」

【裕也】

「おいおい。冗談はよしてくれ。俺は確かにその場にいたが、靈夢達に助けられただけだつたんだ。それに、俺は革命を起こせるだけの力はない。」

【文】

「む？ 確かに弱そうですしね。」

【裕也】

「あ、はは。まあ、そう言う事だ。そうだお前の名前は何だ？」

【文】

「あややや！ これは申し遅れました。私の名前は射命丸文と言います。気軽に文と呼んで下さい。ああ、そつちは別にいいですよ？ 知っていますから。」

【裕也】

「そうか。あ、そうだ！ 靈夢達を知らないか？」

【文】

「あや？ 靈夢さんですか？ そうですね～。まだいるか分かりませんが、あつちで見ましたよ？」

文は社の方を見た。

「あれは？」

【文】

「ああ、つい先日建てたばっか見たいですよ？詳しくは知りませんが、この里の守り神を祀つていて見たいですけど。昔から祀つていたんですが、前の人里異変で壊れた見たいで、治したんですよ。それで、折角だから大きくしようとしたらしいですよ？」

【裕也】

「そうなのか。ありがとう、行つてみる。」

【文】

「いいえ。お礼はネタで。」

【裕也】

「はは。いいよ。あ、そうだ、これからイベントがあるからそれを記事にしたら？」

【文】

「あや？ そなんですか？」

【裕也】

「ああ。」

【文】

「ふむ。まあ、いいでしよう。それでは楽しみにしてますよ？裕也さん。」

【裕也】

「ああ。それじやあな。」

裕也は文に別れを告げ文から教えてもらつた場所に行つた。



人里・社前

【靈夢】

「はあ。疲れた。こんな宴会は始めてよ。」

【魔理沙】

「確かにそうだぜ。でも、いいじゃないか！靈夢。皆楽しんでいるみたいだからな。」

【萃香】

「れ～い～む～。お酒切れた～。」

何処からかやつて来た萃香が靈夢に抱きついた。

【靈夢】

「うわ！酒臭い！萃香！離れなさい！」

【萃香】

「お酒お酒お酒～。」

「ぎやあああ！入ってる！首に決まってるから！ぐ、ぐるじいって！言つてんでしょうが夢想封印！」

靈夢は萃香の頭を持ち地面に叩きつけた。

【靈夢】

「ふんぬ！」

「どがつ！凄い音が聞こえた。萃香の方を見たら頭が地面に埋まっていた。

【萃香】

「んー！んんんー！ふはー！あー、苦しかった。何すんだ靈夢！」

【靈夢】

「ふん。自業自得よ。」

【幽香】

「あんた達はいつも騒がしいわね。」

萃香とは逆方向から幽香がやつて來た。

【靈夢】

「幽香？あんたどうして。」

【幽香】

「ん？少し友に誘われてね。」

【魔理沙】

「お？お前に友達なんていたのかぜ？」

【幽香】

「あら？魔理沙、貴女は喧嘩を売っているのかしら？いいわよ？買つてあげるわ。」

幽香は腕を鳴らしながら魔理沙に近付いた。

【魔理沙】

「ちょ！ちょ！待つた待つた！売つてない！売つてないのぜ！だから落ち着け！」

【幽香】

「そう。それは残念ネエ？」

【魔理沙】

「あ、あははは、はあ。」

【紫】

「あら？皆ここで何をしているのかしら？」

スキマから紫が現れた。

【靈夢】

「あら、紫じやない。どうしたの？」

【紫】

「いや、皆が何故かここに集まっているからね？何してるのかな～って思っちゃって。」

【靈夢】

「そう。」

【レミリア】

「あーー！靈夢！ようやく見つけたわよ！」

【靈夢】

「げ！レミリア！？あんた何でここが！」

【レミリア】

「ふん。吸血鬼の嗅覚を舐めないでよね。」

【靈夢】

「犬かお前は！」

【咲夜】

「お嬢様の犬。．．．．ぶはーー、これはご飯10杯行ける！」

【フラン】

「ダメだこの従者早く何とかしないと。」

【魔理沙】

「フラン!? 何でここに!」

【フラン】

「あら? 私だつて異変解決に貢献したのよ? いてもおかしくないわ。」

【魔理沙】

「そ、 そ う か。」

【妹紅】

「うわああ! どいてくれー! 魔理沙! そこどいてくれー!」

【魔理沙】

「え? ぶぎや!」

魔理沙と妹紅は正面衝突した。

【魔理沙】

「いたた。 いきなりなんだぜ。」

【慧音】

「もこたん。 いきなり逃げるなんて 酷いじやないかよ。 一緒に愛を語ろうよ。」

【妹紅】

「近寄るな! 酔っ払い!」

【慧音】

「そんなつれない事を言うなよ～。ヒツク！」

【妹紅】

「ま、魔理沙！何とかしてくれ！」

【魔理沙】

「はあ？ 何で私がそんな事を。」

【慧音】

「魔理沙、そうか。魔理沙も妹紅を狙っているんだな！」

【魔理沙】

「違う！ 何でそうなるんだぜ！」

【慧音】

「うるさい！ 覚悟しろ！」

慧音は魔理沙に攻撃を繰り出した。

【魔理沙】

「うわっと！ 落ち着け！ 慧音！ あぶね！」

魔理沙は慧音の攻撃を避けた。

【慧音】

「何故よける！」

【魔理沙】

「お前が攻撃をしてくるからだぜ！」

【永琳】

「プスつとな♪」

【慧音】

「はう！」

慧音は変な声を上げて倒れた。

【魔理沙】

「永琳か？助かっただぜ。」

【永琳】

「ふう。騒がしくてお酒が飲めないじゃないの。たく。」

永琳は少し赤い顔をしていた。

【優曇華】

「師匠～。待つて下さいよ。」

優曇華がとてとて歩いて來た。

【永琳】

「遅いわよ～。優曇華～。」

永琳はふらふらしていた。

【靈夢】

「ちょー・酒臭さがまして來た！」

靈夢は少し下がった。

【裕也】

「皆、何してんの？」

皆がわやわやしている所に裕也が現れた。

【靈夢】

「やつと來たわね裕也！待つっていたわよ！」

靈夢は少し嬉しそうに答えた。

【裕也】

「はは。悪いな。紫、準備できているか？」

【紫】

「ええ、全て出來てるわよ。」

【靈夢】

「？ 何の話？」

【紫】

「直ぐに分かるわ。さて行きましょうか。」

【裕也】

「そうだな。」

裕也と紫はスキマの中に入つて行つた。

【靈夢】

「何かしら?」

【魔理沙】

「さあ?」



人里・社

【裕也】

「紫、例の物を。」

【紫】

「はいはいこれね。」

紫から手渡された物、それはメガホンだつた。

【裕也】

「よし。宴会にいらしている皆様!!聞こえていたら社の方をみて下さい!!!」

裕也のデカイ声は人里中に響いた。宴会に来ていた妖怪と人里の住民は何事かと思
い社を見た。

【裕也】

「皆様ここにちは!!俺は桐上裕也と言います!!さて、今回はお知らせしたい事があつて
話をさせてもらっています!!!週間後に幻想何でも屋と言う何でも屋を開きたいと思
います!!依頼内容は殺しや盗み以外は何でも大丈夫です!!道順は1週間後に看板が出
るのでその通りに行つてもらえれば着きます!!!1週間日後を楽しみにしていて下さ
い!!最後に萃香さん!!!いたら社の下に来て下さい!!以上!!」

裕也は早口だが確かに聞こえる声でそう言つた。裕也は紫のスキマで下に降りた。



【文】

「あややや。裕也さんが言つてたのつてこの事ですか。ふむ。確かに記事には丁度いい
ですね。しかも、私の感だと靈夢さんは何故か裕也さんに安心感を覚えていてますね。暫
くは裕也さんに張り付いてみますか!ふふ。ネタに困らなさそうですね。おつと!

そうと決まつたら早く記事を書かなければ。」



文は笑ながら去つて行つた。

【萃香】

「んで？ 私に何の様だい？ ヒツク！」

【裕也】

「お前の力が必要なんだ。お前の密と疎を操る程度の能力がな。」

【萃香】

「ふーん。どうするつもりだい？ 密と疎を操る程度の能力

って言う大層な名前がついているが、様は集めたり散らしたりする能力何だよ？」

【裕也】

「お前の能力で道と道を集め繋げる。」

【萃香】

「へー。中々面白い使い方を考えるね。でも、それだと道じやなくて、距離と時間になつちまうぞ？ そんな事をしたらそこだけ時間が狂う事になる。それは如何するんだ？」

【裕也】

「そこは大丈夫だ。先ず萃香の能力で距離と時間を集めるそれを紫の境界を操る程度の能力で出来た空間を安定させる。安定させたら靈夢の空を飛べる程度の能力と巫女の力で空間を固定させる。そして、最後に俺の能力。新たな世界を創造する能力で、出来た空間を固定させる。」

【靈夢】

「ちょ！ ちょっと待ちなさいよ！ つまり世界つてそんなのあの閻魔が黙つてないわよ！」

【紫】

「その時はその時よ。」

【裕也】

「分かつてもらうさ。この能力はあいつが託してくれた物だからな。」

【靈夢】

「分かつた。貴方を信じるわ。さて、私は大丈夫だけど萃香、あんたは如何なの？」

【萃香】

「私も別にいいよ。面白そудだし。だけど、裕也って言つたけ？ あんたと戦つて見たいな。ああ、別に今じやなくていい。万全の裕也と戦つてみたいからね。ヒツク！」

【裕也】

「分かるのか!?」

【萃香】

「まあな、ヒツク。」

【裕也】

「それじゃあ明日から頑張るぞ！」

【ルーミア】

「裕也、私を忘れていいか？」

裕也の影からルーミアが現れた。

【裕也】

「いや！忘れてないぞ！うん！」

【ルーミア】

「まあ、いい。私はお前に着いて行くと決めたからな。」

ルーミアは笑みを浮かべた。

【霊夢】

「へー。ルーミア、あんた、もしかして、裕也の事好きなんじゃないの？」

霊夢はにたにた笑いながらルーミアを見た。

【ルーミア】

「そうか。そう言う事か。」

ルーミアはフツと笑った。

【霊夢】

「？」

【ルーミア】

「裕也。」

【裕也】

「？ どうした？ ルーミア？」

【ルーミア】

「裕也、私は、お前が好きだ。」

【裕也】

「は？」

【靈夢】

「え？」

【レミリア】

「は？」

【フラン】

「うー！」

【永琳】

「あらあら。」

【優曇華】

「うえ?」

【妹紅】

「お?」

【慧音】

「なぬ!」

【咲夜】

「む。」

【紫】

「ふふ。皆の心に火が付いたかしら? モテモテね。裕也。」

紫は誰にも聞こえる事のない声で答えた。

裕也はルーミアに告白された。他の皆は何かの心に火が付いた見たいだつた。

宴会は朝方まで続いたと言う。こうして裕也の幻想物語の序章は終了した。

次に話

す物語はまだ先のことだ。